



# 中山修一著作集11 : 研究余録――富本一枝の人間像

中山, 修一

---

(Issue Date)

2023-04-11

(Resource Type)

book

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100492136>



中山修一著作集 1 1

## 研究余録——富本一枝の人間像

はじめに——著作集 1 1 の公開に際して

ここに公開する著作集 1 1 『研究余録——富本一枝の人間像』は、次のふたつの伝記によって構成される予定です。

第一編 富本一枝という生き方——性的少数者としての悲痛を宿す

第二編 富本一枝にとっての小林信、そしてその後の桑野信子について

これまで私は、主として日英デザインの歴史を、個人のデザイナーとしては、とりわけウィリアム・モリスと富本憲吉を研究の対象としてきましたが、富本の研究を進めるにつれて、富本の妻である富本一枝（旧姓尾竹）という女性の生き方について興味を抱くようになりました。果たして富本一枝とはどのような女性だったのでしょうか。

確かに富本憲吉自身は、外的環境に左右されることのない、固有の内的な個性と天分を秘めていたでしょう。しかしながら、もし一枝に出会わなければ、あのような富本憲吉の生涯は存在しなかったかもしれません。一枝を知るということは、富本憲吉という特異な芸術家の存在様式にかかわっての、よりよい理解の手助けになる一方で、女性の生き方を規定するその時代固有の諸力について学ぶ、よい機会ともなります。

この研究は、富本憲吉研究の副産物といえるものです。また、私自身、女性史や家族史を専門とする研究者でもありません。この著作集 1 1 の表題の一部に「余録」の二文字を使った理由もそこにあります。

第一編は、富本一枝という生き方を性的少数者としての文脈から記述します。このテーマは、とてもデリケートな問題を含みます。それだけに慎重な筆運びが必要になります。目的にあった内容になっているか、読者のみなさまのご批評を仰ぎたいと思います。

続く第二編においては、奈良女子高等師範学校の生徒であった小林信というひとりの女性が、どのようにして富本一枝と親交を結ぶようになり、その後上京して、結婚により桑野信子に改姓し、文筆家、教師、そして歌人してどう生きたのか、その生涯のあらましを、桑野啓さんとの分担執筆により素描します。

第一編の「富本一枝という生き方——性的少数者としての悲痛を宿す」につきましては、すでに公開しています。楽しく読んでいただければ幸いです。第二編の「富本一枝にとっての小林信、そしてその後の桑野信子について」は、現在執筆中です。ふたりの原稿が整い次第、公開したいと思います。

二〇二三年四月一日

陽春を迎えた阿蘇南郷谷の小さきわが庵にて

中山修一

## 著者について

中山修一（なかやま・しゅういち）

1948年12月、熊本市に生まれる。熊本県立熊本高等学校時代は、新聞部にて部活を楽しむ。東京教育大学農学部林学科に入学、木材工学を専攻する。学生運動の影響でほとんど授業は行なわれず、ヨット部に所属し館山と葉山で年間一〇〇日以上の中泊生活を送る。卒業に引き続き、東京教育大学大学院教育学研究科修士課程において美術学（工芸・工業デザイン）を専修する。その後、東京教育大学は移転し筑波大学となる。

1974年4月に神戸大学教育学部の助手に採用される。それ以降、講師、助教授、教授へ昇格。主としてプロダクト・デザインの実技とデザイン史の講義を担当する。組織としての教育学部は、職を得てしばらくしたのち発達科学部に改組され、さらに現在は、国際文化学部との合併により、国際人間科学部へと改称。

在職中、学内にあっては、神戸大学附属図書館副館長を務め、学外にあっては、大阪教育大学教育学部、長崎大学教育学部、国立高岡短期大学（現在の富山大学芸術文化学部）、および静岡文化芸術大学デザイン学部等で、非常勤講師として「デザイン史」の集中講義に長年従事する。また、海外においては、1995年に、ロンドンのウィリアム・モリス協会が本部を置く〈ケルムスコット・ハウス〉にて招待講演を行ない、さらに2010年には、上海の華東理工大学美術・デザイン・メディア学部に招かれて二日間の連続講演を行なう。

他方、1987-88年にブリティッシュ・カウンシル（British Council）のフェローとして、続いて1995-96年に文部省（現在の文部科学省）の長期在外研究員として渡英し、主として王立美術大学（Royal College of Art）とヴィクトリア・アンド・アルバート博物館（Victoria and Albert Museum）を利用して英国デザインの歴史研究に当たる。

1987年から2013年まで英国のデザイン史学会（Design History Society）の会員。2003-14年、ブライトン大学客員教授（Visiting Professor at the University of Brighton）。また、2008年に学術雑誌 *The Journal of Modern Craft*（Berg Publishers, Oxford）が創刊されたおりには、国際諮問委員会（International Advisory Board）の委員を務める。

2013年3月に定年により神戸大学を退職し、それ以降、阿蘇山中の庵に蟄居し、執筆活動に専念する。専門はデザイン史学。

現在、神戸大学名誉教授、博士（学術）。英国にあっては、王立芸術協会（Royal Society of Arts）の終身会員（Life Fellow）、およびウィリアム・モリス協会（William Morris Society）の終身会員（Life Member）。

訳書（共訳を含む）に、ノエル・キャリントン『英国のインダストリアル・デザイン』（晶文社、1983年）、ハワード・ヒバード『ミケランジェロ』（法政大学出版局、1986年）、ステュアート・マクドナルド『美術教育の歴史と哲学』（玉川大学出版部、1990年）、アヴリル・ブレイク編『デザイン論——ミッシェル・ブラックの世界』（法政大学出版局、1992年）、ジャン・マーシュ『ウィリアム・モリスの妻と娘』（晶文社、1993年）、およびポール・グリーンハルジュ編『デザインのモダニズム』（鹿島出版会、1997年）。

中山修一著作集 1 1

研究余録——富本一枝の人間像

## 第一編

# 富本一枝という生き方 ——性的少数者としての悲痛を宿す

2018年9月

中山修一著作集 1 1

## 研究余録——富本一枝の人間像

### 第一編

#### 富本一枝という生き方——性的少数者としての悲痛を宿す

目次	二
はじめに	四
第一章 「同性の愛」の発見	
——果たして異性間の如き愛の成立し得るものなりや否や	七
第二章 青鞥の紅吉	
——殆ど先天的の性的轉倒者とも思われるやうな一婦人	一一
第三章 結婚する前	
——美しい女の人をみるのが非常に心持のよいこと	二〇
第四章 結婚してから	
——正直な生活を営むには、未だ未だ私は眞實でない	二六
第五章 夏の出来事と安堵村生活の終焉	
——わたしは M さんに心を傾けていました	三六
第六章 東京に住む	
——ひとりで祖師谷に行つてはいけないよ	四五
第七章 転向を誓う	
——そうした化粧の乙女を見たいと希つて、夜な夜な街を歩く	五一
第八章 母親発見	
——今は古き母親の道／かけ離れた両親	五六
第九章 戦時体制下にあつて	
——憲吉さん、お気のどくだと思うだろう	六三
第一〇章 憲吉の出奔と戦後生活	
——死のうと思つて、身の回りのものを焼き捨てた	六九
第一一章 再起と憲吉の死	
——逢うことを夢なりけりと思ひ分く心の今朝は恨めしきかな	七八
第一二章 最晩年の「紅吉」との決別	
——お母さんご心配ばかりかけてごめんなさい	八四
おわりに	八七
跋	九六
注	一〇二
図版	一一〇
図版出典	一二三

索 引 . . . . . 一二四

凡 例

- 一. 本文中『 』は書名、雑誌名、新聞名を示し、「 」は論文や詩、記事等の表題を表わしている。また、強調すべき固有の事象についても「 」が用いられている。
- 一. 本文中《 》は作品名を示し、〈 〉は建物の名称を表わしている。
- 一. 本文中の【 】は図版の参照番号を指し示している。
- 一. 引用文および引用語句内の [ ] は本著作集の著者による補足である。

## はじめに

富本一枝（一八九三—一九六六年）のセクシュアリティにかかわって、これまで研究者は、どのように対峙してきたのであろうか。一枝の最初の本格的評伝である、高井陽・折井美耶子『薊の花——富本一枝小伝』が世に出たのは、一九八五（昭和六〇）年であった。高井陽は、富本憲吉・一枝夫妻の長女で、実際にこの本が出版されたときは、陽が亡くなってすでに三年が過ぎていた。そのなかで、一枝のセクシュアリティについては、このように言及されている。

一枝がまわりの人にできる限りの援助の手をさしのべるという生き方に徹するのはこの頃 [『婦人公論』に「共同炊事に就いて」を寄稿した一九三〇年ころ] からである。それは、人に尽くすことは最高の美德と教えた母の訓えでもあり、一枝自身の困っている人を見ずがすることができないヒューマニズムでもあった。しかしその底には、天賦の素質をもちながら自己の芸術を完成させることのできない己に代って、他に尽くすことによる間接的な自己表現、あるいは代償行為といった心持が、無自覚的にひそんでいた。それは広い意味でいえば母の心ともいえる。しかし一枝は純粋なあまり、夢中になりすぎたし、若くて、美しく、有能な女性には、理屈抜きで好意をもった。こうして、一枝の一生のうちで誤解されやすい同性への熱中が何度か繰り返される<sup>1</sup>。

本書の成り立ちからして、遺族への配慮が働いた可能性を否定することはできないかと思われるが、この時期の一枝の同性へ向かう性的指向については、あくまでもこのように、「他に尽くすことによる間接的な自己表現、あるいは代償行為」であり、「誤解されやすい同性への熱中」として描かれている。

他方、比較的新しい研究である「『青鞥』同人をめぐるセクシュアリティ言説——一九一〇年代を中心に——」では、著者の呉佩珍は、ジュディス・バトラーの言説に全面的に依拠しながら、青鞥社時代の平塚らいてうと尾竹紅吉の関係を「少年同性愛」とみなしたうえで、次のような指摘をしている。

ジェンダーを、男性が女性性を過剰に演じる異性装にたとえることによって、バトラーは、ジェンダーは本質的な存在というより、むしろ模倣を通じて行為遂行的に構築されるものだといっている。つまり、本質的な性がまずあるのではなく、集合的に構築されたジェンダーの幻想があり、その幻想を模倣する形で現実のジェンダーが形成されるのである。

バトラーのこの観点は、まさに、平塚らいてうと尾竹紅吉のジェンダー・パフォーマンスにあてはまる。彼女たちのジェンダー・パフォーマンスは、〈模倣〉に基づいて築き上げられていたもので、現実の異性愛中心的なジェンダー・ロールをパロディ化して脱構築するような側面を持っている<sup>2</sup>。

いうまでもなく、「尾竹」は富本一枝の旧姓である。そして、「紅吉」は青鞥時代の一枝

の筆名で、本人が自分のことを呼ぶ場合には、「こうきち」と呼んでいたことを後年らいてうは明かしている<sup>3</sup>。

さて、そこで問題になるのは、次の点である。果たして、呉が指摘する、一九一〇年代の「現実の異性愛中心的なジェンダー・ロールをパロディ化して脱構築するような側面」から、高井陽・折井美耶子が描く、一九三〇年代の「誤解されやすい同性への熱中」へと続く、一枝のセクシュアリティには、どのような内的連続性があったのであろうか、あるいは別個の不連続的現象だったのであろうか。それとも、このふたつの見解に、何か適切さを幾分欠くような断定的な表現が介入している可能性はないであろうか。本稿は、一枝本人と友人たちが書き残した言説を主として援用しながら、可能な限り、そうした疑問の実態を解明し、ひいては、一枝自身の生涯にわたるセクシュアリティの全体像を明確にすることによって、一枝というひとりの人間の生き方に現われた複雑性の一端を探る試みといえる。

一枝のセクシュアリティにかかわる歴史を記述するに先立って、本稿が前提とするのは、一枝のトランスジェンダーとしてのセクシュアリティの可能性である。これは、著作集 3 「富本憲吉と一枝の近代の家族（上）」および著作集 4 「富本憲吉と一枝の近代の家族（下）」（ウェブサイト「中山修一著作集」にて公開）の執筆を通じて得るに至った知見であり、本稿では、そうした前提をひとつの主題として実証的なアプローチがなされることになる。しかしながら、一枝自身は、自分のことを「トランスジェンダー」として明確に「カミング・アウト (coming out)」しているわけではない。したがって、最初から一枝をトランスジェンダーとして決めつけることはできない。かといって、歴史のなかに残された一枝本人の言説や、他人による一枝についての描写からして、その可能性を完全に排除することもまた、同様にできないであろう。もっとも、「トランスジェンダー」も「カミング・アウト」も、あくまでも今日的概念であり、そして用語法であるため、存命中に一枝自身が自分のセクシュアリティを「トランスジェンダー」という概念のもとに認識することも、「カミング・アウト」という用語を使って告白することも、当然ながら、それはなかった。そうしたことを踏まえるならば、可能性として一枝をトランスジェンダーとしてみなす本稿にとっての前提は、あくまでもひとつの仮説的な前置きということになる。

今日的には、典型的で規範的とみなされる全体的な性のあり方から逸脱した少数の人たちを指して性的少数者 (Sexual Minority) という用語が使われる。そのなかには、主にレズビアン (Lesbian)、ゲイ (Gay)、両性愛 (Bisexual)、トランスジェンダー (Transgender) が含まれ、その頭文字をとって、LGBT と呼ばれることもある<sup>4</sup>。レズビアンは女性間の同性愛者を、ゲイは男性間の同性愛者を、そしてバイセクシャルは、異性、同性のどちらにも性愛の関心を示す人たちを指し、他方トランスジェンダーは、肉体的 (生物学的) な自分の性別に違和感をもち、社会的 (文化的) には、それとは反対の性別において生きることを求める人たちを指す。そして、身体的には女性でありながら、性自認 (Gender Identity) においては男性である人を FTM (Female to Male)、逆に、身体的には男性でありながら、性自認においては女性である人を MTF (Male to Female) と呼ぶ。もっとも、心の性の自己認識は、人によっては、しばしばあいまいで、はっきりと区別立てができない場合も多いといわれている。

その一方、性的欲望や恋愛感情の対象が、異性なのか、同性なのか、その指向を示す呼

称として、性的指向 (Sexual Orientation) という用語が使用される。たとえば、レズビアンの場合は、当事者双方は、身体的に「女」であり、性自認も「女」であるものの、性的欲望や恋愛感情の対象である性的指向が、異性ではなく、同性である「女」へと向かう。そこで問題なのが、FTM のトランスジェンダーの性的指向が「女」だった場合である。外見上は、女性間の同性愛者 (レズビアン) のように見えるものの、実際には、「男」を性自認する者が「女」を愛することからして、したがってこの場合は、「同性愛」ではなく、「異性愛」とみなされる。このことに照らし合わせるならば、仮に一枝が FTM のトランスジェンダーだったとして、「女」への性的指向が認められたとすれば、それは明らかに、「異性愛」という実質を示すことになる。

四月に一枝が一八歳になり、そしてまた、九月に『青鞥』が創刊されることになる、一九一一 (明治四四) 年当時の「不可思議な」あるいは「病的な」と形容された女性たちのセクシュアリティには、どのような実態が介在していたのであろうか。そして、新聞や雑誌は、あるいは有識者と呼ばれる人たちは、それをどのように受け止めたのであろうか。それでは本稿の導入として、そうしたセクシュアリティを巡る、その時期の社会文化的な背景の記述から、まずはじめたいと思う。

## 第一章 「同性の愛」の発見

### ——果たして異性間の如き愛の成立し得るものなりや否や

一九一一年（明治四十四）年八月一日の『婦女新聞』に掲載された一頁の社説は、「同性の愛」という表題をつけて、女性間の「不可思議な」セクシュアリティについて論じている。以下は、その書き出しの部分である。『婦女新聞』は週刊新聞であり、女学生などがその主な読者となっていた。

『女同士の情死』と題して、二人の女工が手を携へて投身したりし新聞紙に報せられたる事あり。最近に一博士の令嬢と、一官吏の令嬢とが共に高等女學校卒業の教育ある身にして、同じやうなる最期を遂げたるあり。新聞紙は之を同性の愛、世俗に所謂オメの関係なりとして審しまざる様子なるが、同性間に、果たして異性間の如き愛の成立し得るものなりや否や。容易に信じ難けれども、若し眞に成立し得るものとせば、娘持つ母及び女子教育家は、最愛なる子女の監督法に就て新なる警戒を加へざるべからず。かゝる問題は人生の機微に關し、紳士淑女の輕々しく口にすべき事にあらざれども、又それだけに重大な問題なるを以て、眞面目に研究する必要あり<sup>5</sup>。

この社説では、女工の例と令嬢の例を、ともに「オメ」の関係とみなしながらも、前者については、女性相互の「熱烈な精神的友情」に基づく関係とし、後者については、男性的な女と女性間の「肉的墮落」との烙印を押す。社説は、二種類の「同性の愛」の内的違いを、このような文言を使って解説する。

後者の所謂オメなるものは、實に不可思議の現象にして、今日の生理學心理學にては殆んど説明しがたし。然り、説明はせられざれども、事實の存在は否定すべきにあらず。恐らくは是れ病的現象ならん。……前者に於ては、關係ある二人の境遇年齢性格等が相似たるを要するに反し、後者は、一人が必ず男性的性格境遇の女子にして、他を支配するを要す。前者は熱烈なる精神的友情に因て成立するに反し、後者は不可思議な肉の接觸を俟ちて成立するが如し。前者は死を共にするまで互い同情すれども、後者は、元來が肉的墮落なれば、さまでに双方の精神が一致せず。即ち一方的男性的の女は、常に巧なる一種の手段を弄して他を操縦するなり。されど、いかにしても不可思議なるは、操縦せらるゝ女が、全然對手の術中に陥りて、眞の戀愛状態に陥ること、異性に對すると殆んど差違なき事なり<sup>6</sup>。

そしてこの社説は、結論として、次の点を指摘する。「後者のオメなるものは、前者の病的友愛なると同じく、病的肉慾とでも稱すべきものにして、生理學者も未だ鋏を入れざる未開墾地なれば、吾等はこゝに論斷を下す事能はざれども、不可思議なる事實の存在だけは如何にしても否むべからず。されば、娘持つ親達は、最愛の娘を他に托するに當りて、單に同性なるの故のみを以て安心すべきにあらざるなり」<sup>7</sup>。

同新聞の同日付けの四頁には、「同性愛の研究」と題された特集が組まれ、「某醫師」「某

宗教女学校卒業生」「某高等女学校校長」「某夫人」「某心理学者」「洋行歸りの某氏」および「某軍人」からの聞き取りの結果が公開されている。そのなかには、異性間の愛とまったく変わらない同性間の愛の事例や、男女の夫婦とまったく変わらない女夫婦の事例や、しつけのために預かっていた娘のもとへ夜な夜な訪ねてくる女の事例などが、赤裸々に、そして詳細に報告されていた。この「同性愛の研究」は、社説にいう「説明はせられざれども、事実の存在は否定すべきにあらず」を、具体的内容を挙げて、例証するものであった。

このときの『婦女新聞』の社説および特集の立ち位置は、見てきたとおり、良妻賢母主義や家父長制主義が異性愛によって成り立っている以上、同性愛はそれを否定しかねない反体制的行為であるがゆえに、即刻追撃しなければならないといったような政治的に過激なものではない。同性の愛という行為は、いまだ学説にない、知識を超えた実に「不可思議な」現象であるがゆえに「病的な」ものとして執筆者には映っており、その感染を避けるという観点から、年ごろの娘をもつ親や子女教育に携わる人たちに対して警鐘を鳴らすといった啓蒙的な論調が、ここにおいて展開されていた。このようにして、この時期、女性間の「不可思議な」セクシュアリティが、「かゝる問題は人生の機微に關し、紳士淑女の軽々しく口にすべき事にあらざれども」、新聞というひとつのメディアをとおして、新たに社会的に「発見」されたのであった。

続く翌週（八月一八日）の『婦女新聞』は、島中雄三<sup>8</sup>の「同性の戀と其實例」を掲載した。そのなかで島中は、男子間の同性の恋（男色）も女子間の同性の恋も、結局のところ、その原因も、その実態も、その結果も、類似していることを指摘する。そのうえで、なぜそのような現象が起きるのか、次のように分析する。

近來男色が少々衰へたのは、東洋的武士道的の克己道德、禁欲道德が廢れて男子の性欲が自然的方法によつて満足される機會が多くなつた結果である、それと反對に、女子の間に両性の戀が盛になつたのは、男子の誘惑が多くなり、社會の道德的制裁が弛み、印刷物其他によつて隠れたる社會の暗黒面が暴露され、其結果一般に淫靡なる空氣が深窓の中にも通ふと同時に、官能的刺戟が著しく強くなつて性欲の發作年齢が以前よりは早くなつて居るに拘らず、結婚難てふ社會的現象と極端なる男女隔離主義とに依つて、精神的にも肉體的にも適當に性欲を満足するの機會に遠つた結果と見るべきものが大部分である<sup>9</sup>。

このように島中は、女性間の同性の恋は、以前に比べて性に目覚める年齢が早まるも、その性的欲求を満たす機會が彼女たちにとって遠のいていることに、おおかた起因していると説く。そして後段では、新橋の芸妓の中村時子の例を引き、「兎に角彼女は女を惹き着ける強い魔力を有つて居た……何の女も何の女も瘦せて衰へて蒼くなつて其れでも思ひ切れないで泣いたのである、無論時子は常に男装して居つた……然れども彼女は到底男ではない……但だ其の方法は絶對の秘密で、彼女及び彼女と關係した女以外は何人も知らない、又何人にも話さないのである」<sup>10</sup>と、男性的な女の事例を紹介する。

ここで言及されている時子は、性別表現のひとつの指標となる衣装に関して、「常に男装して居つた」ことから判断すると、体の性と異なり、心の性については「男」である

ことを自認していた可能性がある。また、「何人にも話さないのである」という表現から推測すると、時子がカミング・アウトを拒否していた可能性も否定できない。島中は最後に、この評論文をこう結ぶ。「教育家、心理學者、生理學者などの大に研究して然るべき問題である、臭い物に蓋をするのは差支えないとしても、臭きを恐れて何時までも遁げて居つては教育の實は擧るまいと思ふ」<sup>11</sup>。

こうした『婦女新聞』の報道を受けるようなかたちで、『新公論』の九月号は「性慾論」と題して幾編かの論考を掲載した。そのなかには、内田魯庵の「性慾研究の必要を論ず」、桑谷定逸の「戦慄す可き女性間の顛倒性慾」が含まれていた。前者の論説は、イギリス、フランス、ドイツ、アメリカなどの欧米諸国においてこの分野の研究がどのような状況にあるのかを、当該国で刊行された雑誌や書籍を紹介しながら、論じるものであった。一方、後者の論説では、多様な視点からこの「顛倒性慾」が論じられているため、一言で総括することはできないが、一般に「顛倒性慾」は、学校（女学生）、工場（女工）、病院（看護婦）、遊郭（遊女）などの女が集う場所では広く見受けられるものであることを指摘し、男装（異性装）については、このように書く。「顛倒的な女には、出来ることなら男装し男職したいといふ強い傾向がある。此の場合の男装は便利の爲めでもなく、又た他の女に印象を與へる爲めでもなく、唯だ何となく夫れが自分の身體に適するやうに思ふからである」<sup>12</sup>。ここで表現されている「自分の身體に適するやうに思ふ」は、文脈的には「自分の気持ちに適するやうに思ふ」と読み替える方がふさわしく、そうであれば、今日というところの、性自認（ジェンダー・アイデンティティー）に関する事柄が、すでにこの時期にあつて、暗に言及されていたことになる。そしてこの論説は、このようにもいう。「顛倒性慾の豫防法に付ては、今日未だ確説はない。否、先天的に其ういふ素質を有つて居る者に對しては、人間の力では殆んど何うすることも出来ないのである」<sup>13</sup>。

同じく九月、『新婦人』（第1年第6号、9月之巻）も、『新公論』同様に、「同性の愛」に関する論説文を掲載した。それは、婦女通信社長である松本順造の執筆による、「恐るべき同性の愛——親不知の激浪に相擁して情死せし二令嬢」で、副題からわかるように、内容は、八月一日の『婦女新聞』の社説でも言及されていた、七月二七日に新潟県の糸魚川町の海岸に漂着したふたりの令嬢の情死事件についてであった。ふたりが相並ぶ写真とともに、実名入りでその事件が詳報されている。続く十一月には、大阪高等醫學校教諭の田中祐吉の「女性間に於ける同性の愛」が、続報として掲載された。おおかたの論旨は、次のようになる。「女性間に於ける同性の愛は、男色と同様であつて、其の動機は種々ありますが、吾人醫學者の方から論じますると、性慾の倒錯に基因する者も尠くない……然し同性の愛に陥るものゝ全體が悉く此の性慾倒錯に出づるものでなく、男子と相接する機會なき爲め性慾満足の必要上より若くは新奇なる快感を貪ぼらんが爲の劣情に出づることも多い……此頃吾邦でも、女學生間に同性の愛の流行するに就ては教育家が之を撲滅するに内々に苦心してゐるといふ噂を聞たが、併し之を豫防撲滅する方法手段の頗る困難なることは今更言うまでもない……醫學上倫理上より其の背天非倫の行為であることを説明するにしても、青春妙齡の女學生に向て明らかに説き示すことは中々至難の業である……要するに同性の愛を豫防撲滅する方法は女性其者の品性徳操の涵養に待つより他はあるまいと思ふ」<sup>14</sup>。

以上に述べたように、一九一一（明治四四）年は、ふたりの令嬢の情死をきっかけとし

著作集 1 1 『研究余録——富本一枝の人間像』

第一編 富本一枝という生き方——性的少数者としての悲痛を宿す

第一章 「同性の愛」の発見——果たして異性間の如き愛の成立し得るものなりや否や

て、「同性の愛」にかかわる関心が社会的に高まった年であった。くしくもこの年の九月、『青鞥』が平塚らいてうの手によって創刊され、それに吸い寄せられるようにして、年が明けると、一枝自身も青鞥社の社員となるのである。

## 第二章 青鞆の紅吉

——殆ど先天的の性的轉倒者とも思われるやうな一婦人

尾竹一枝は、父尾竹熊太郎、母うたの第一子として、一八九三（明治二六）年四月二〇日に富山市の越前町で出生した。新潟出身の熊太郎（画号は越堂）は長兄で、三男の染吉（竹坡）、四男の亀吉（國觀）とともに尾竹三兄弟と呼ばれて、明治の末期前後にあって、日本画壇にその輝かしい名声を刻んでいる。一枝は、一八九九（明治三二）年八月の富山市を襲った大火事により、父方の祖父母（尾竹倉松とイヨ）に連れられて上京し、根津尋常高等小学校に通うことになる。その後両親とともに大阪に移り住み、高等女学校（現在の大阪府立夕陽丘高等学校）へと進む。一枝には、幼くして死去した数人の妹と弟を別にすれば、福美（のちに洋画家の安宅安五郎と結婚）、三井（のちに日本画家の野口謙次郎と結婚）、そして貞子（のちに武田家から正躬を婿養子に迎える）の三人の妹がいた。自身の父親倉松（國石）も画工であった父の熊太郎は、長女の一枝を画家として大成させ、自分の跡取りにと考えていた。一方、父親が越中富山藩の高禄武士であった母のうたは、祖先を敬い、親に尽くし、夫に従うことに徹した、厳格なしつけを子どもたちに行なった。

幼少期を富山、東京、大阪で過ごした一枝は、絵の勉強を口実に、再び憧れの東京に上り、叔父の竹坡の食客となった。ちょうどその時期のことであろうか、竹坡の妻のきくと一枝は、連れ立って上野へ出かけたことがあった。そのときのきくの記憶は、こうである。「一枝さんと一緒に上野の山へ行った時よ、その人マントをすらっと着ているものだから男と間違えられちゃってね、笑ったことがあるわよ……」<sup>15</sup>。男さながらのセルの袴にマントの着用、これが若き日の一枝の特異な衣装姿であった。

『婦女新聞』が社説に「同性の愛」を掲載した一九一一（明治四四）年の八月から数箇月が立った秋のある朝、一枝は、表庭の掃除をしていると、叔母・きく宛ての一通の手紙が配達夫から手渡された。封を切ればそのなかから、『青鞆』発刊の辞と青鞆社の規約が現われた。まさしく一枝のその後の人生を決定づける一瞬であった。一度大阪にもどった一枝は、実際に『青鞆』を手にした。そして何度も、主宰者の平塚らいてうに手紙を書き送った。このころの様子をらいてうは、こう描写している。「型破りな、男とも女とも判らない妙な手紙を度々よこす大阪の変な人として、姿は見えないけれども、かなり早くから社の人たちに、軽い好奇心のようなものをもたせていました。……上京後は社の事務所にも、私の家にもよく来るようになり……人にもてることの好きな紅吉は、幸福のやり場のないようなかがやいた顔をして、大きな、丸みをもったからだを、着物と羽織とおついの、いきな久留米かすり飛白ひびらに包んで、長い腕をそらして、いつも得意然と市中を歩き、大きな声でうたったり、笑ったり、実に自由な、無軌道ぶりを発揮していました」<sup>16</sup>。

こうして一枝は、望みどおりに青鞆社の一員となった。そして、一九一二（明治四五）年春の第一二回巽画会の展覧会に出品した二曲一双の屏風《陶器》で三等賞銅牌を受賞した一枝は、画壇への初登場も見事に果たした。もっとも一枝の関心は、日本画よりも、むしろ文学にあった。一枝は自分のことを「紅吉」と呼び、ペンネームにもその名を使った。一九一二（明治四五）年三月号の『青鞆』（第二卷第三号）に、はじめて紅吉の「最後の霊の梵鐘に」が掲載され、さらに翌月号では、紅吉が描いた「太陽と壺」に、表紙が差し替

えられた。

五月一三日に紅吉の自宅で青鞥社の同人による会合が開かれた。そのとき紅吉が出した案内状には、こう書かれてあった。「桃色のお酒の陰に、やるせない春の追憶を浮べて春の軟い酔を淡い悲しみで、それからそれに、覚めて行く様に、私達は新しい酒藏から第二の壺を搬び出した。そして私達の仕事に異大な祝福の祈を捧げ乍ら青いお酒を汲み合ひたいと思ふ。来る十三日午後一時から紅吉の家で同人のミーチングを催します。紅吉は、黄色い日本のお酒とそして麥酒と洋酒の一[,]二種とすばしこやのサイダを抜いて待つて居る。……紅吉は、その日、その夜の來るのを、子供の様に數へて待つて居る。さよなら」<sup>17</sup>。この日の会合は泊まりがけになった。そしてその日の夜、らいてうと紅吉とのあいだに烈しい愛の衝動が走る。そのことを紅吉は、「或る夜と、或る朝」のなかで、誰にはばかることもなく、こう告白する。

私は、どうしたらいゝのだろう。抱擁接吻それら歡樂の小唄は、どんなになる事だろう！？。……私の心は、全く亂れてしまった、不意に飛出した年上の女の為めに、私は、こんなに苦しい想を知り出した。少年の様に全く私は囚はれてしまった。……けれども……あゝ私は毒の有る花を慕つて、赤い花の咲く國を慕つて、暗い途を、どこ迄歩ませられよう。……DOREI になつても、いけにへとなつても、只 抱擁と接吻のみ消ゆることなく與えられたなら、満足して、満足して私は行かう<sup>18</sup>。

この「或る夜と、或る朝」に続いて、さらに波紋を呼ぶ一文が、次の七月号の「編輯室より」に記載された。

らいてう氏の左手でしてゐる戀の對象に就いては大分色々な面白い疑問を蒔いたらしい。或る秘密探偵の話によると、素晴らしい美少年ださうだ。其美少年は鴻の巢で五色のお酒を飲んで今夜も又氏の圓窓を訪れたとか<sup>19</sup>。

これは美少年（紅吉）とらいてうの恋について、紅吉自らが書いた文章であろう。こうして、紅吉は、社会の注目を浴びる存在となつていった。

この当時の紅吉が、宮本百合子の小説「二つの庭」のなかに登場する。そこには、次のように描かれている。

伸子とは二つ三つしか年上でない素子の二十前後の時代は「青鞥」の末期であつた。女子大学の生徒だの、文学愛好の若い女のひとたちの間に、マントを着てセルの袴をはく風俗がはやつた。とともに煙草をのんだり酒をのんだりすることに女性の解放を示そうとした気風があつた。二つ三つのちがいであつたが、そのころまだ少女期にいた伸子は、おどろきに目を大きくして、男のように吉という字のつくペンネームで有名であつた「青鞥」の仲間の一人の、セルの袴にマントを羽織つた背の高い姿を眺めた。その女のひとは、小石川のある電車の終点にたつていた<sup>20</sup>。

この小説のモデルとなつてゐるのは、伸子が宮本本人であり、素子が、かつての共同生

活者であった湯浅芳子であろう。この小説のなかで伸子は、紅吉のセクシュアリティに驚く。しかしこの驚きは、現実世界においては宮本が湯浅から受けた驚きでもあったにちがいがなかった。ふたりが野上彌生子の家ではじめて会って一箇月と少しが過ぎた、一九二四（大正一三）年の五月二一日と二二日にまたがって書かれた湯浅から中條（のちに結婚により宮本姓へ改姓）へ宛てて書かれた手紙には、このようなくだりがある。

私の性格のかなり複雑なことはあなたも御存じですが、そのあなたのご存じよりももっとも私にはこみ入った矛盾だらけの不幸な生れつきがあるのです。生理的には一通り何の欠点もない女ですが、しかも女でいて女になりきれないというところ、（まだまだ言い足りないが）すべての不幸がまず一番ここにあるのではないかとおもいます。

人生にとって一番意義のある得難く尊いものは何ですか？あなたはなんだとおもいます。芸術ですか、愛ですか。

その何れにも見離された人間は何を目的に生きるのです。まして私は愛を知らないんじゃない！

もうやめ、やめ、こんなこと<sup>21</sup>。

湯浅が告白（カミング・アウト）しているのは、明らかに、女が女になりきれない女性の心の性にかかわる精神的苦痛についてであろう。トランスジェンダーを、のちになって「選択」したものではなく、生まれながらにして本人が備え持つ「本性」であるという立場に立つならば、これを自分の意思や努力によって変更したり、捨て去ったりすることはもはやできず、何を目的に生きればいいのかを、自問するも、答えはない。その苦しみを湯浅は率直に中條に訴えているのではないだろうか。

吉永春子は、富本一枝の評伝的小説である『紅子の夢』を書いている。そのなかに、次のような湯浅の発話部分がある。場面設定は、昭和二九年に開催された「世界婦人大会」の受付ロビー。登場人物は、夏子が、当時女子学生であった吉永春子で、会場の受付を手伝っている。大竹紅子が尾竹紅吉（富本一枝）、富田龍彦が、その夫の富本憲吉であろう。湯浅芳子は実名で登場する。

「あの太柄な方は、どなたですか」

夏子は近くに坐っている、一見男とも見間違ふロシア文学者の湯浅芳子にたずねた。

「なんだい、君、知らないのかい」

彼女は断髪の髪をゆすり、懐手をしたまま、タバコの煙を天に吐いた。

「あの女はね、明治のブルー・ストッキング、“青鞥”の大竹紅子だよ」

「大竹紅子」

夏子は、思わず小さな声をあげた。

「男のような緋と、袴をはいて、さっそうとして生きたあの人ですか」

「そうだよ。彼女は、“青鞥”、〈ブルー・ストッキング〉のマスコット・ガール。いや、違う。そんなもんじゃあない。台風の眼だった」

湯浅芳子は、続けざまに、タバコの煙をプカプカと吐いた。

「紅子は、変っていた。もっとも“青鞥”の女達は皆変っていた。明治というと、箸の上げ下げ一つまで、うるさくいわれ、女は女中か、子供を産む道具ぐらいにしか思われていなかったんだ。そんな中で女がね、“自立”とか“解放”とか叫ぶなんて大変なことなんだ。そんなことを口走ろうものなら、狂ってるとか、<sup>おとこおんな</sup>男女とか言われてね、社会から抹殺されたもんなんだ」

「男女？」

「そう、女の格好をしているけど、本当は男だろうって、失礼な話さ。“青鞥”の女達は、そんな陰口を山と言われ、面と向って、石も投げられ、罵倒もされたもんだ。中でも紅子に対しての攻撃は、ひどかった。紅子は、天真らんまん、行動的だった。好奇心も強かったし。一度、浅草のバーに足を踏み入れたんだ。それを新聞記者に見つかって、“女だてらに、毎晩、五色の酒を飲み干し、あげくの果、遊郭に行って、女を買った”と書かれちゃって、そりゃあ、ひどいもんだった」

「先生、その時、お幾つでした？」

「十五歳で、女学生だった。遠くから“青鞥”に憧れていたんだ」

「それで紅子さんは」

「うん」

湯浅芳子は、一寸声をつまらせた。

「その後、陶芸家の富田龍彦と結婚してね。……。もっとも今は別居中だ。可哀想に捨てられたんだ」

彼女は言い終ると、男物のステッキをついて、パイと席をたった<sup>22</sup>。

紅吉の青鞥時代は一九一二（明治四五・大正元）年のほぼ一年間である。著作集3「富本憲吉と一枝の近代の家族（上）」において詳述しているとおり、この間、らいてうとの「同性の恋」、メイゾン鴻の巢で楽しんだ「五色の酒」、さらには、らいてうと中野初子を誘っての「吉原登楼」といった世間を驚かす話題が次々と起こると、新聞や雑誌が連日のようにそれを書きたてた。誤解や誇張もあったであろう。それでも、青鞥の「新しい女」は、「男のような女」とも、あるいは、単に「新らしがる女」とも揶揄され、叱責された。そのとき一五歳の湯浅は、京都市立高等女学校に在籍し、遠くから、自分のセクシュアリティと重ね合わせるかのようにして、紅吉の言動を注視していたにちがいがなかった。

一九一二（大正元）年一〇月二七日の『東京日日新聞』の「東京観（三二）新らしがる女（三）」のなかで、記者のインタビューに答えて、紅吉はこういつている。「私は子供の時分から面白い気分を持つてゐますが夫れは自ら獨り楽しむ気分であつて決して口に出して話す気分ではないのです、死ぬる時に遺言状の中には書くかしれませんが」<sup>23</sup>。この内面に秘められた「面白い気分」が、生涯の紅吉（一枝）の光と影となるものであった。この「面白い気分」の内実は、一体何なのであろうか。性別表現のなかの服装に着目すれば、一枝は生涯和装で過ごし、とくに独身時代は、男性と見まがうようなマントや袴を身につけ、その後も好んで、男物と思われる帯や下駄を使用した。雅号については、どうだろうか。青鞥時代の一枝は、「紅吉」の二文字を使った。後年一枝は、「あれはやはり私の小さい時から持っているその気分から出たものです」<sup>24</sup>と語っている。「紅」が女を、「吉」が男を表象しているとすれば、身体の性が女で、心の性が男であることを、無意識のうち

に、あるいは意識的に、言い表わしていたのかもしれない。この時期紅吉は、本人が語るところにうそ偽りがないとすれば、しばしば酒場に通い、何度か吉原にも足を運んだ。相方を勤めた美しい花魁とはその後手紙のやり取りをし、身受けをしたいという高揚した気持ちにまでなっている。その気持ちについて、『讀賣新聞』は「紅吉の畫が賣れる——三百圓で花魁身受の噂」のなかで、こう書いている。

紅吉の一枝がまだ青鞥の一人であつた頃、一夜新しい女の誰彼と吉原某樓に押上つた、其時紅吉の敵娼になつたのは榮山といふ賈れつ奴、それ以來兩女は意氣投合して紅吉は櫛の齒を引くやうに通ひ、何うにかして受け出して遣りたいと心を千々に砕いたが何と云つても先に立つものは金、金を拵らへるには腕に覚えのある繪を書いて身代金を得るより外に仕方がないと、斯くは「枇杷の實」を描いたのであると……<sup>25</sup>

こうした行動規範は、明らかに「男性的」であり、ここにも、一枝の心の性自認が投影されていると考えることもできるであろう。身なり、呼び名、振る舞いなどに表出される、こうした一連の自己のセクシュアリティを指して、一枝は、「面白い氣分」という言葉を使っているのかもしれない。しかし一枝は、「死ぬる時に遺言状の中には書くかしれませんが」と述べているように、その実体や自己認識については、生涯カミング・アウトしないことを、この時点においてもはや心に決めていた可能性もある。

すでに言及した『新公論』一九一一年（明治四四）年九月号に掲載の「性慾研究の必要を論ず」のなかで、著者の内田魯庵は、「Havelock Ellis の “Studies in the Psychology of Sex” といふは五冊物で性慾に關する各方面の研究を集めてある。之も一應寓目して置くべきものだ。此エリスは誰も知つて通り現代精神界の趨勢に隻眼を持つている評論家であるだけ、文章も立派で……」<sup>26</sup>と、この本を高く評価していた。その一部分が日本語に訳され、「女性間の同性戀愛——エリス——」のタイトルで『青鞥』に掲載されたのは、一九一四（大正三）年の四月号（第四卷第四号）においてであった。巻頭に、らいてうの筆になる一文が端書きのように寄せられており、そのなかで、抄訳掲載の経緯が、次のように記されていた。

女學校の寄宿舎などで同性戀愛といふやうなことが行はれてあるやうなことを屢々耳にはいたしますけれど、私自身はさういふ事實を實際目撃したこともなければ、自身経験したこともありませんでしたので半ば信じられないやうな氣もいたしました、全く何の興味もこの問題にもつことが出来ませんでした。ところが私の近い過去に於て出逢つた一婦人——殆ど先天的の性的轉倒者とも思われるやうな一婦人によつて私はこの問題に非常な興味をもつやうになりました。私はその婦人の愛の對象として大凡一年を過しました。そして色々のことを考へさせられました結果、いよいよこの問題に就いて、知りたくなりました<sup>27</sup>。

このときすでに紅吉は青鞥社を退社していたが、ここでらいてうは、紅吉のことを「殆ど先天的の性的轉倒者とも思われるやうな一婦人」として公言した。明らかにこれは、今日的な用語法に従えば、個人のセクシュアリティについて赤の他人が吹聴することを意

味する「アウトティング (outing)」といえるにちがいない。しかもらいてうは、「私はその婦人の愛の對象として大凡一年を過しました」と、素っ気なく他人事のようにいっている。本当にこの愛は、紅吉かららいてうへの一方的な愛だったのであるか。らいてう自身は、紅吉のことを「愛の對象として」全く何も考えていなかったのだろうか。事實は決してそうではない。というのも、「五色の酒」や「吉原登楼」のことで新聞が青鞥を攻撃していたとき、らいてうと紅吉とのあいだに実際に何が起こったのか——そのときのふたりの関係が、一九一二（大正元）年の第二卷第八号の『青鞥』に掲載された、らいてうの「圓窓より」のなかに、明確に刻印されているからである。らいてうは、自分宛ての紅吉からの数通の私信を含めて、率直にその思いを開陳していた。「圓窓より」は、異例の長文であり、以下の記述は、その概略となる。

一九一二（明治四五）年七月一〇日の夜、らいてうは、寂しがりやで不意の訪問を喜ぶ紅吉の顔が見たくなり、下根岸の紅吉の家を訪ねた。多くを語ったあと、上野広小路まで送ってきた紅吉は、別れる際に、「あした朝、行つてもいゝでせう。其時見せます」<sup>28</sup>といて、左腕の包帯を押えた。そして翌朝——

「見せて、見せて、ね、見たい、見たい。」私の心は震へた。紅吉は戀の為めに、只一人を守らうとする戀の為めに……我が柔かな肉を裂き、細い血管を破つたのだ。……長い繃帯が一巻一巻と解けて行く。……<sup>はらわた</sup>腸の動くのを努めて抑へた。そしてじつと傷口を見詰めながら、眞直に燃える蠟燭の焰と、その薄暗い光を冷たく反對する鋭利な刃身と熱い血の色とを目に浮かべた<sup>29</sup>。

その日の午後、ふたりは万年山勝林寺にある青鞥社の事務所へ行った。疲労を滲ませる紅吉は、大きな体を縁側に横たえていたが、しばらくすると、ふと立ち上がって、黒板にこう書いた。

#### 離別の詩

あたいの人形に火がついた

赤いおべべに火がついた

いとしや人形は火になつた

いとしや人形が火になつた

人形を買つて五十八日目の夕 紅吉

らいてう様<sup>30</sup>

「五十八日目の夕」とは——。するとらいてうは、五月一三日のミーティングのあの夜から数えて五八日目であることに気づいた。

私の心はまたもあのミイティングの夜の思ひ出に満たされた。紅吉を自分の世界の中なるものにしようとした私の抱擁と接吻がいかにも烈しかつたか、私は知らぬ、知らぬ。けれどもあゝ迄忽に紅吉の心のすべてが燃え上らうとは、火にならうとは<sup>31</sup>。

しばらく沈黙が続いたあと、紅吉はふたつの心配事をらいてうに打ち明けた。ひとつは、吉原見学のあとに「新しい女」や青鞥社へ烈火のごとく浴びせられた非難や揶揄についてであり、もうひとつは、自分自身の健康状態についてであった。

『國民[新聞]』に「所謂新[ら]しい[き]女」が掲載されだし事はこの日からのことだつた。紅吉は其記事に就いて眞面目に心配してゐるらしい。……私はあらゆるものを眞面目に考へることの出来る紅吉を、新聞の記事の虚偽を以て満されてゐるのを今更のやうに驚く紅吉を心に羨んだ。そして三[、]四年前の[塩原事件(煤煙事件)のときの]自分を目の前に見るやうな氣がした。……私は紅吉を咎めやうとはゆめさら思わない。……

「退社してお詫びします。」

「馬鹿」

私の少年よ。らいてうの少年をもつて自ら任ずるならば自分の思つたこと、考へたことを眞直に發表するのに何の顧慮を要しやう。みづからの心の欲するところはどこまでもやり通さねばならぬ。それがあなたを成長させる為めでもあり、同時にあなたがつながる青鞥社をも發展させる道なのだ<sup>32</sup>。

紅吉は、一箇月くらい前から消え入りそうな咳をし、よく頭痛で倒れもした。また、ますます神経が過敏になるのを恐れてもいた。らいてうは、そのことを薄々感じ取っていた。肺の病かもしれない——。らいてうは、高田病院での診察を勧めた。「明日診察を受けるでせう……すると、どつちかに極るでせう、ね、どつちかに」<sup>33</sup>と、紅吉は怯える。せめて医者宣告だけは直接紅吉に聞かせたくないと思つたらいてうは、「私も明日病院へ行く。院長に一度逢ひたいことがあるから」<sup>34</sup>という。しかし紅吉は、入院となれば、今後らいてうに会えなくなることを恐れる。

「淋しい? どうした。」と言ひざま私は両手を紅吉の首にかけて、胸と胸とを犄と押し付けて仕舞つた。「いけない。いけない。」口の中で呟いて顔を背けたが、さりとて逃げやうとはしない<sup>35</sup>。

そして、らいてうは、「ね、いゝでせう。あなたが病氣になれば私<sup>わたし</sup>もなる。そしてふたりに[療養のために]茅ヶ崎へ行く」<sup>36</sup>と、紅吉の心情を温かく包み込む。こうして万年山の事務所を出たふたりは、別れ際に、明日病院へ行く約束を交わした。帰宅するとらいてうは、これまで紅吉から受け取った、あわせて六七通の手紙とはがきを読み返しながら、眠れぬまま、「同性の戀といふやうなことを頻りに考へて見た」<sup>37</sup>。

概略、以上が、らいてうが「圓窓より」において刻印した、その時期のふたりの実像であった。このことからわかるように、らいてうの、「私はその婦人の愛の對象として大凡一年を過しました」という認識は、明らかに自己の当事者性を横に置いた、独善的なものであった。疑いもなく、らいてうもまた、紅吉を「愛の對象として」いたのである<sup>38</sup>。しかし、それと同じように重要なことは、当時のらいてうは、紅吉のことを「私の少年」と呼び、一方で「同性の戀」について思いをめぐらせていたという事実である。「私の少年」と

呼ぶ以上は、らいてうは紅吉を「男」として認識していたのであろう。そして「同性の戀」という言葉を使う以上は、らいてうは紅吉を「女」と認識していたのであろう。「圓窓より」から一年と八箇月後の「女性間の同性戀愛——エリス——」の端書きにおいて、らいてうは、すでに紹介しているように、「私の近い過去に於て出逢つた一婦人——殆ど先天的の性的轉倒者とも思われるやうな一婦人によつて私はこの問題に非常な興味をもつやうになりました」と書き綴っている。らいてうは、紅吉のセクシュアリティのうちに女性性と男性性との混成を見出し、そのことを根拠に、「殆ど先天的の性的轉倒者とも思われるやうな一婦人」という表現を使ってアウトティングしたものである。それでは、「女性間の同性戀愛——エリス——」に書かれてあつた内容は、実際はどのようなものだったのであろうか。まず、「女性間の同性戀愛」の、陰に隠れた実態について、エリスはこう説明する。

婦人同士は、男子よりヨリ親密であることは習慣上吾々の頭にありふれたことであるので、彼等の間にこんなやうな異常な欲情が存在してゐやうとは一寸思ひ及ばぬことである。そして此原因と關係して吾人の注目すべきは、婦人が性的アブノーマルな表現に關して、甚だしきはその正則の場合すらも全く知らないで、絶對的沈黙を守ると云ふことである。婦人は同性にして非常に烈しい性的牽引を感じても、其愛情が性的變態であることに氣がつかぬ。そして一度之れを意識した時には譬へ之を發表すれば他人の肩に載っている重荷を軽くしてやる事が出來ると知れてゐても、極力自己の内部經驗の本性を暴露されないように努める。<sup>39</sup>

らいてうがアウトティングしたのは、ここでいわれている、「之を發表すれば他人の肩に載っている重荷を軽くしてやる事が出來る」に従つたのかもしれない。次にエリスは、性的に轉倒した女たちにみられる特性を、次のように語る。

彼等は常の服装の場合には大いに男性的單純さを表現してゐる、そして殆どあらゆる場合に、どんな些細でも化粧と云ふやうな事は忌み嫌ふのである。之れ等の事實が明に現はれない時でも、凡ての無意識になさるゝ身振りや習慣が、女の知り合に斯ういふ人は男に生るべき筈であつたのに、と云ふ考へえを起さしめる。粗暴な、エナジーエティックな動作、腕の様子、愛想もない、ブツキラボーな言葉づかい、音聲の抑揚、男の様に率直で、名譽心に富む事、殊に男に對する羞しいと云ふやうな様子はなく、と云つて又殊更に大膽を装ふのでもない態度、凡て是等の事實は、鋭敏な觀察者に、底に潜んでゐる心理的變態を觀察せしむるには充分である。<sup>40</sup>

一枝を指して「殆ど先天的の性的轉倒者とも思われるやうな一婦人」という以上は、一枝の言動やしぐさや身なりのなかに、らいてうは、ここで述べられている婦人の「心理的變態」を觀察したのであろう。また、エリスは、こうもいう。「轉倒した婦女は女性美の熱心な賞讃者であるが、殊に肉體のしつかりした美をたゞへる。此點は普通の女の性的情緒の中には極僅少な美的感情しか交つてゐないのに比して異つてゐる點である」<sup>41</sup>。それでは、「性的轉倒」は何が原因で起こるのであろうか。エリスの見立ては、こうである。

男子の獨立と、因習道德——譬へば女は家の中の陰氣な倉の内で嘆息しながら、決して來る事のない男を待たねばならないと云ふ様な舊い教へに對する嫌惡を教へられた女は、何處迄もこの獨立と發展<sup>てんぱん</sup>させて仕事のある所に愛を探さうとする所まで達する。私は敢て此等の近世の運動の慥かな影響が直接性的轉倒を惹起したとは云はないが、間接な原因は確かにあると思ふ<sup>42</sup>、

エリスが描写する、「女は家の中の陰氣な倉の内で嘆息しながら、決して來る事のない男を待たねばならないと云ふ様な舊い教へに對する嫌惡」——これが、女性の解放や獨立を叫ぶ、近代の婦人運動の原点となる思いであろう。エリスはいみじくも、この近代運動が「間接な原因」となって「性的轉倒を惹起した」とみなす。であれば、近代日本の婦人運動の原点に位置づく青鞥社の運動には、これ自体に、「性的轉倒」を招来せしめる力が必然的に最初から内在していたことになる。そして、その歴史的主人公が、まさしく、紅吉、その人だったのである。もっとも、医学的観点から、あるいは統計学的観点から、女兒の誕生にあつては、性的指向が女へと向かうレズビアンや、FTM のトランスジェンダーが常に一定の割合で生まれることが実証されるならば、近代の婦人運動のイデオロギーとは直接関係なく、女学生や女工のような集団同様に、婦人運動という女の集団においても、避けがたく「同性の戀愛」が一定数発生する可能性は否定できない。しかしながら、らいてうの個人的事例にみられるように、「私の少年」や「同性の戀」という用語を使って自らの性愛について公然と語る一方で、「同性の戀愛」という現象に強い関心をもち、外国の書を翻訳して雑誌に掲載しては、そこから積極的に学ぼうとしたのは、疑いもなく、先行する女学生や女工たちの集団ではなく、この時代に新しく胎動した婦人たちの集団のなかにおいてであった。その意味においては、女性解放の近代運動の萌芽と、「同性の戀愛」へ向けられた知的なまなざしとは、相互に大きく関連していたといえるだろう。そしてそれは、「新しい女」の内実ともかかわることであった。紅吉が「新しい女」の前衛的実践の役割を気楽にも担い、他方、らいてうが後衛に陣取り、その理屈の枠組みを必死になって習得しようとしたと見ることも、可能かもしれない。

明らかに、らいてうにとっては、この「女性間の同性戀愛——エリス——」の抄訳は、「圓窓より」の執筆以来未解決のままになっていたこの種の問題への個人的興味を満たす、ひとつの有効な知的回答となったにちがいない。しかし、一方のアウティングされた紅吉は、それをどのように受け止めたのであろうか。紅吉のそれに対する言葉は残されていない。もっとも、「女性間の同性戀愛——エリス——」が掲載された『青鞥』(第四卷第四号)の巻末に目を向けると、文芸雑誌『番紅花』四月号(第一卷第二号)の広告を見出すことができる。この限りにおいては、らいてうと紅吉の関係は、少なくともこのときまでは、決定的な破局を迎えていない。しかしながら、それ以降のしばらくのあいだの疎遠は、明白であった。

### 第三章 結婚する前

#### ——美しい女の人をみるのが非常に心持のよいこと

尾竹一枝が、自分の性に違和感を覚えるようになったのは、いつころからであろうか。正確な年齢まではわからないが、性的指向に関しては、次のような本人の告白が残されている。

私にはちいさな時分から美しい女の人をみるのが非常に心持のよいことで、また、大變に好きだったのです。それで私の今迄の愛の對照になつてゐた人のすべては悉く美しい女ばかりでした。私の愛する人、私の戀しいと思ふ人、そしてまた、私を愛してくれる人、戀してくれる人の皆もやつぱり女の人ばかりでした。

ですから美しい綺麗な女の人と言へば私に有つてゐるようなないほど非常な注意と異常な見守り方をもつて來てゐました<sup>43</sup>。

これは、一枝が二一歳のときの結婚前の言説であるが、小さいときから自分の性的指向が美しい女性に向かっていたことを、何ひとつ隠すことなく、率直に語っている。

一連の出来事に対して責任をとるかたちで一枝が青鞆社を退社してのち、約一年の月日が流れていた。そして、『青鞆』に「女性間の同性戀愛——エリス——」が掲載されたちようど一箇月前の一九一四（大正三）年の三月に、絵画作品の売却金を元手に一枝は、『青鞆』の向こうを張って『番紅花』を立ち上げ、すでに第一巻第一号が刊行されていた。この雑誌には、もはや「紅吉」の名は見当たらない。すべてにおいて実名の「尾竹一枝」が使われている。創刊号に一枝は、「自分の生活」と題した手紙形式の長文を掲載した。

これは、二月一五日の夜に、夏樹から俊ちゃんに宛てて書かれた手紙である。夏樹が、一枝本人であろう。この日の夕刻、俊ちゃんは、怒りをぶつけようと夏樹を訪ねるも、夏樹は来客や雑務に追われていたため、ふたりはほとんど会話を交わすことなく、別れた。この手紙は、俊ちゃんの怒りに関する夏樹からの戒めであり、さらには、夏樹が求める愛のかたちを俊ちゃんに伝える内容になっている。俊ちゃんは、自分への愛を棄てて別人へと走ろうとしている夏樹の遊戯的な愛し方をとがめているのであるが、それに対して夏樹は、かつて同じ心的状況に立たされていたことを告白する。俊ちゃんを知る前のこの一年間、「一人の人にひどく愛されてゐたことがありました……その時分でしたよ、私があなたの心持のようであつたときは」<sup>44</sup>。そして、そのときその人はどうであつたのかを分析してみせる。

その一人の人は随分弱つてゐましたよ、今、こうしてその時分の問題があべこべになつて私が愛すと云ふ立場をもつてその問題にぶつかつてみると、その時分私を愛してくれた人の心持があんまりはつきり思ひやられすぎて氣の毒やら恥しいやらで随分心苦しく思つてゐます<sup>45</sup>。

「その時分私を愛してくれた人」とは、おそらく平塚らいてうのことであるにちがいな

い。らいてうが自分への愛を捨て去って奥村博に愛を見出したとき、その理不尽さを激しく責め立てた自分をいま思い返すにつけて、「随分心苦しく思っている」と懺悔しているのであろう。そして夏樹は、その人がそのとき与えてくれた愛の実態を回想して、こう述べる。「その人はよく葡萄酒を口うつしにしてくれました。あの人の唇から私の幼い唇にそれをそそがうとして私をしつかり抱いてくれたときなんか私は眞赤になりました、そして嬉しくてたまらなかつたものでしたよ」<sup>46</sup>。夏樹はこれを、「眞當の愛」と当時思っていた。しかし、いまになって思えば、「馬鹿馬鹿しいふざけ方」に映る。そして俊ちゃんが、「私の過去の或る時の行為と同じ色彩をもつた人」<sup>47</sup>に思えてくる。どうやらここでは、過去における「らいてうと紅吉」の関係が、いまや「夏樹と俊ちゃん」という関係に置き換わって再現されているらしい。違うのは、夏樹は俊ちゃんの疑いのまなざしを、「私は現在に於て特別な愛の交渉をもつてゐるのはあなたより他にたつた一人もありません」<sup>48</sup>と、きっぱりと否定している点である。一方、H氏については、「あの人をほんとうに好きなんです、けれどその人を好きだと云ふ事がすぐ一直線にその人を愛すと云ふことになるでしょうか。[あなたは否定するかもしれませんが] 私は決してそんな事を考えたこともありません」<sup>49</sup>と、夏樹はいう。そして夏樹は、こう俊ちゃんに呼びかけるのである。

俊ちゃん、  
私はくりかへして云ふ。

あなたは、美しい人なんだ、珍しく綺麗な人なんだ、だから普通の女よりも、ずうつとずうつと優しく優しくそしておとなしく平和であつてほしい。私はあなたが優しくそしておとなしくあるとき、どんなにかあなたを可愛いものに思ふだらう、私は眞當に可愛ゆく思つてゐます<sup>50</sup>。

このように、『番紅花』の創刊号で、一枝は「自分の生活」という手紙文をとおして、夏樹と俊ちゃんのあいだの愛の交渉について書いていたのであった。

しかし、『番紅花』の刊行は長くは続かず、全六号で休刊し、この雑誌の表紙絵の依頼などを通じて交流が深まった富本憲吉と、同年一〇月二七日に一枝は結婚する。憲吉は、奈良の安堵村に生まれ、東京美術学校在籍中に英国へ留学、その地で、デザイナーで詩人にして政治活動家でもあったウィリアム・モリスの作品と思想を学び、帰朝したばかりの新進気鋭の工芸家であった。結婚するにあたって憲吉は、一枝にこういった。「アナタが家族をはなれて私の処に来ると思はれるが、私の方でも私は独り私の家族をはなれてアナタの処へ行くので、決して、アナタだけが私の処へ来られるのではない、例へ法律とか概観で、そうでないにしても尾竹にも富本にも未だ属しない、ひとつの新しい家が出来るわけである。そう考へて居て貰ひたい」<sup>51</sup>。こうしてここに、因習に囚われない一組の「近代の家族」が生まれた。しかしながら、それもつかのまのこと、新婚旅行を終えて、東京に帰ってみると、そこに大きな惨劇が待ち構えていた。

それは、一二月一日発行の『淑女畫報』一二月号に掲載された「謎は解けたり紅吉女史の正體——新婚旅行の夢は如何に 若く美しき戀の犠牲者」<sup>52</sup>という題がつけられた暴露記事によつてもたらされた。「深草の人」と名乗る執筆者は、冒頭でまず、「Tさま」に宛てて紅吉の書いたものであろうと思われる手紙の原文を紹介したうえで、「私はこの不思議

な手紙、謎の手紙の註解者として、またこの手紙を鍵として彼女の『不思議な過去』不思議な性格、不思議な行為の秘密を語る魔法使いになりませう」と宣言し、それから本論が開始される。書かれてあることを要約的に引用すれば、こうである。「月岡花子嬢こそ、不思議な謎の手紙の主の T さまで、T は月岡の頭文字なのです……花子嬢が女子美術の生徒であり、紅吉女史も一時女子美術に席を置いたことがあると云ふ関係から、おそらく知己となり友達になつたと云ふことだけは確かです……紅吉女史は当時『若き燕』と呼ばれた青年畫家奥村博氏の問題から、らいてう事平塚明子女史と悲しくも別れなければならない事となり……例の不思議な謎の手紙を花子嬢宛に書いたのでした……それからと云ふもの、二人の仲は親しい友と云ふよりも、その友垣の垣根を越えて、わりなき仲となつたのでした。同性の戀！まア何といふあやしい響きを傳へる言葉でせう」。そして執筆者は、紅吉の結婚と新婚旅行に触れ、こう述べる。「新郎新婦手を携へての新婚旅行！それが新しい女だけに一種の矛盾と滑稽な感じをさへ抱かせます。男性に對する長い間の女性の屈辱的地位、そこから跳ね起きて、あくまでも女性の開放を主張し、男性と等しい権利を獲得し、そして男ならで自立して行くと云ふ所に新しい女の立場があるのです。然しながら我が新しい女の典型とも見られてゐた尾竹紅吉女史は若き意匠畫家富本憲吉氏と共に、目下手に手を携へて北陸地方に睦まじい新婚の旅をつづけて居ます」。さらに執筆者は、この結婚の陰に隠れて涙を流している、もうひとりの別の若い女性がいるというのである。「やがてその次にあらはれたのが大川茂子といふやはり女子美術の洋畫部の生徒でした。茂子嬢と紅吉女史との戀……は花子嬢のそれと比べてはなかなかにまさるとも劣ることない程の強く深く切ないものでありました……悲しい戀の犠牲者、茂子嬢は今はどうして居るでせう？……紅吉女史と富本氏との今日此頃の關係を茂子嬢はどんな氣持できいて居るでせう？私は紅吉女史の新生活を祝福すると共に、あえかにして美しい茂子嬢の生涯に幸多きことを祈つて居ります」。

他方この記事のなかで、注目されてよいのは、紅吉のセクシュアリティーに関して記述されている箇所であろう。「紅吉女史は女か男か」という見出し語に続けて、このように描写されている。

紅吉女史は女か男か？この質問ほど世に笑ふべき、馬鹿らしい、不思議な質問はありません。然しそれ程紅吉といふ女は不思議な女とされてゐるのです。彼女は勿論女である、而も立派な女性であることは争はれない事實です。然し彼女の一面に男性的なところのあるのも事實です。先づ第一にその體格の如何にもがつしりとして、あくまでも身長の高い所に『男のやうだ。』と云ふ感じが起ります。セルの袴に男ものゝ駒下駄を穿いて、腰に印籠などぶら下げながら、横行闊歩する所に、『まるで男だ。』と云ふ感じが起ります。太い聲で聲高に語るところ、聲高に笑ふところ、其處にやさしい女らしさと云ふ點は少しも見出すことは出来ません。男のやうに女性を愛するところ、その女性の前に立つて男のやうに振舞ふところ、それは彼女が愛する女と楽しい食卓に就いた時のあらゆる態度で分ると云つた女がありました。甘い夜の眠りに入る前に男のやうに脱ぎ棄てた彼女の着物を、彼女を愛する女が、さながらいとしい女房のやうにいそいそと畳んだと云ふことを聞いたこともありました。

實際彼女は男のやうに我儘で、男のやうにさつぱりとして、男のやうに無邪氣で粗

野な一面を持つてゐるのです。それがやがて彼女を子供のやうだとも云はしめ、新しい女といふ皮肉な名稱を彼女に與へた動機ともなつてゐるのです。そしてまた彼女が同性を惹き付ける點もおそらく其處にあるのです。

この記事の記述内容が真実であるとするならば、ほぼ間違いなく、紅吉はレズビアン(女性間の同性愛者)ではなく、肉体的には女性であるも心的には男性を自認するトランスジェンダーであつたということになる。そしてまた、性的欲望や恋愛感情が女性へと向かう性的指向を示していることから判断して、紅吉のその愛は、同性愛ではなく、異性愛だつたということになるであろう。

さらにこの記事の重要なところは、「新しい女」という名稱が紅吉に付与された動機として、「男のやうに我儘で、男のやうにさつぱりとして、男のやうに無邪氣で粗野な一面を持つてゐる」点を挙げて、指摘していることであろう。つまり、紅吉に対して世間が「新しい女」と呼ぶのは、この記事の指摘に従うならば、高踏的な理想や革新的な思想を主張し、古い因習を打破しようとする、これまでに存在することのなかつた女という意味においてではなく、体格や衣装、あるいは発話や振る舞いがいかにも男性的であり、これまでに見受けられた伝統的な女性とは異なる女という意味においてなのである。記事が含意するところを換言すれば、こうして紅吉の心的男性性が、性的に女性を惹きつけただけではなく、世間をも関心の輪に巻き込み、「新しい女」という、ある意味で蔑称に近い呼び名を紅吉に用意したということになるろうか。

その一方で、この記事には、結婚式での両家の集合写真だけではなく、紅吉のものであると思われる手紙の一節、月岡花子その人、ふたりの弟妹と一緒に七歳のときの紅吉、書齋のなかの紅吉などの写真までもが掲載され、また、同誌同号の別の箇所には、「問題の婦人尾竹紅吉女史の花嫁姿」(目次表題)と題した写真も見ることができる。こうしたことからして、この記事は、必ずしも「深草の人」単独のものではなく、その執筆の過程において、何か、紅吉かその家族による情報の提供、あるいは別の第三者によるある種の関与があつたのではないかと疑いも残る。しかしいずれにしても、この記事に描かれている内容の真偽は、当事者のみが知りえることであり、闇のなかにある。とはいえ、大変皮肉にも、真実としていえることは、「若き意匠畫家富本憲吉氏」と「問題の婦人尾竹紅吉女史」の結婚は、こうした暴露記事をとおして世間に披露されたことであつた。さらに、この記事の内容が真実であるとするならば、結婚に至るまでのこの時期の一枝は、一方で月岡花子や大川茂子と親密な関係をもちながらも、その一方で憲吉とは結婚話を進めていたことになる。

憲吉は、結婚に先立つ九月一日に、美術店田中屋に「富本憲吉氏圖案事務所」を開設し、凶案家(デザイナー)として活動を開始していたにもかかわらず、一〇月二七日に結婚式を挙げると、翌年(一九一五年)の三月初旬に、この夫婦は、憲吉の生まれ故郷である奈良の安堵村へ移転する。しかしこれまでの研究にあつては、移転の理由を示す、証拠となる資料が存在しないため、それを適切に跡づけることができず、一種の謎となつていた。そこで、以下の記述は明確な証拠に基づくものではないが、この雑誌記事と安堵村帰還とを絡めて、ここで少し推量を加えてみたいと思う。

おそらくこの記事を受けて、憲吉と一枝は、今後のふたりの生活が支障なく成り立つの

かどうかについて、意見を交わしたものと思われる。このとき一枝は、小さいころから自分の身体の性に違和感を覚え、心のなかでは自己の性を「男」と思い、美しい女の人に恋愛感情を抱く性的指向が自分に内在していることについて、より詳しく憲吉にカミング・アウトしたにちがいない。そして、ともにふたりは、一枝から「同性の愛」が取り除かれない限り、愛情に満ちた結婚生活は決して訪れることはないだろうという見解に達したものと考えられる。どうすれば、「同性の愛」を捨て去ることができるのか——。すでに紹介したように、一九一一（明治四四）年一月の『新婦人』（第一年第八号）に掲載された「女性間に於ける同性の愛」において、著者である大阪高等醫學校教諭の田中祐吉は、「此頃吾邦でも、女學生間に同性の愛の流行するに就ては教育家が之を撲滅するに内々に苦心してゐるといふ噂を聞したが、併し之を豫防撲滅する方法手段の頗る困難なることは今更言うまでもない……醫學上倫理上より其の背天非倫の行為であることを説明するにしても、青春妙齡の女學生に向て明らかに説き示すことは中々至難の業である……要するに同性の愛を豫防撲滅する方法は女性其者の品性徳操の涵養に待つより他はあるまいと思ふ」と、書いていた。「女性其者の品性徳操の涵養」という、あまりにも消極的な結論であったかもしれないが、しかしこれが、「同性の愛を豫防撲滅する方法」に関しての当時の最新の知識であったであろう。しかし、憲吉と一枝は、話し合いの結果、一步考えを前に進め、より積極的な対処方法にたどり着いたものと推測される。それは、一種の転地による療法であった。このまま東京に住み続ければ、美しい女性と触れ合う機会も多いが、人の少ない寒村へ住まいを移せば、美しい女性との出会いは、それだけ減少する可能性がある。そこでふたりが決断したのが、憲吉の生地である大和の安堵村への転居だったのではないだろうか。もっとも一枝は、それに先立って、結婚をするそのこと自体によって、事前に「同性の愛」を自らの意思で断ち切ろうとした可能性も排除できない。

少し振り返ってみると、正式に一枝に求婚する少し前の七月二日に、憲吉は安堵村から東京の一枝に宛てて、次のような手紙<sup>53</sup>を書き送っていた。何度会っても、まだまだ伝え足りないものが、憲吉の胸に残っていたようである。

人々がする様な手紙の上での空論を止めて何うか直接に遇って話して見たい（オープンリーに）と、最初五月にお遇ひした時から考へて居ましたが、御説の通り幾度お目にかゝっても云ひ残した様な感じがします。

ふたりにとって安心の地はどこだったのだろうか、大和、それとも東京——。両者の考えに溝があった。それにしても、『番紅花』を創刊したばかりの一枝に、どうして「東京を去る必要がある」のであろうか。一枝は『番紅花』の創刊号に、「自分の生活」（手紙）以外にも、「私の命」他一編（詩）と「夜の葡萄樹の蔭に」他二編（詩）を寄稿していた。そのなかの複数の作品から読み取れるように、本当に一枝は、「悲しきうたひ手」が唄う喧騒の東京における過去の世界から逃れ、未来の「私の命」を、大和の牧歌的な田園に求めようとしていたのであろうか。それには、自分のセクシュアリティとの何がしかの関連が、ひょっとしたら隠されていたのかもしれない。

兎に角、今の処では大和をにげ出すことです。にげ出す様な処に来られても、仕様が

ないでしょう。

あなたの方では東京を去る必要がある、その事も私にはよく解りますが、私も、大和を出たい。

憲吉は、「あなたの方では東京を去る必要がある、その事も私にはよく解ります」といっている。ということは、この間に会ったときの会話をとおして、そしてまた、この年の三月の『番紅花』に一枝が書いていた「自分の生活」や四月の『青鞥』に掲載された「女性間の同性恋愛——エリス——」を読んだりして、憲吉は一枝の特異なセクシュアリティについて、ある程度理解を示していたのかもしれない。続けて憲吉は、東京でのこれからの新しい計画を打ち明ける。これは、九月一日から美術店田中屋内に開設を予定している「富本憲吉氏圖案事務所」のことで、「東京であって東京で無い」ここで、一緒に仕事をすることを一枝に提案するのである。明らかに憲吉は、一枝に対して、結婚後の住む場所について配慮を示している。

事務所は真に独立した完全な意味の<sup>ルーム</sup>室ですから、其処で仕事されたらば、東京であって東京で無い様なものです。私は其処に行けばロンドンに行ったつもりで、食事から何から一切その様にするつもりです……只心を落ちつけて私の新計画に幾分の御助力あらむ事を祈ります。

最後に追伸として、「鹿沢温泉に四、五日中に行き、九月一日頃より東京の生活を初める」と、その手紙には書き記してあった。

求婚は、この鹿沢温泉滞在中の出来事であった。しかし、それに先立って憲吉から一枝に宛てて出されていた、上で紹介した手紙の内容から明らかなように、結婚する以前から、つまり暴露記事が世に出る前から、憲吉は、家族との関係がうまくいっていない大和を抜け出して東京に出たいとの思いを強くし、他方一枝はその逆で、東京を抜け出して田園生活を送ることに強い願望を抱いていた。そう時間を要すこともなく、話はまとまったものと思われる。もっともその結果、憲吉には、開設したばかりの活動の拠点である「富本憲吉氏圖案事務所」をたたむという大きな犠牲が伴うことになったし、さらには、家族との軋轢の再来を考えると、安堵村帰還には、大きな精神的負担もまた、影のように付着していたものと推量される。九月の「富本憲吉氏圖案事務所」の開設、一〇月の結婚、そして一二月の暴露記事——これから数えてわずか三箇月後、年が明けた一九一五（大正四）年の三月の初旬、突如として東京を離れ、安堵村への転居が決行された。一枝のお腹には、新しい生命が胎動しはじめていた。

#### 第四章 結婚してから

——正直な生活を営むには、未だ未だ私は眞實でない

一九一四（大正三）年の一〇月に結婚をし、翌年の三月に住むところを喧騒の都会から田舎の村へと移し、同年の八月に第一子の陽が誕生する。一枝の「同性の愛を豫防撲滅」するにちがいないと考えられる手立ては、これですべてが整い、晴れて新生活がはじまった。

すると、ちょうどこの年の六月、羽太鋭治と澤田順次郎の共著になる『變態性慾論』が春陽堂から出版された。著者の肩書きは、羽太鋭治が「ドクトル、メヂチーネ」、そして澤田順次郎が「國家醫學會會員」となっており、総頁数七〇〇頁を超える大部なもので、主として同性愛と色情狂を扱っていた。明確な証拠は見出せないが、おそらく憲吉と一枝は、この本を読み、ここから多くのことを学んだものと思われる。

この本の「第一編 顛倒的同性間性慾」の「第七章 女子に於ける先天的同性間性慾」が、内容的に、とりわけふたりの関心事になったであろう。まず「緒論」のなかで、女性間性慾の海外での名称として、「サフヒズム」「レスビアン、ラブ」「レスビアニズム」などが使われていることが紹介され、一方わが国においては、異名として「といちはいち」「おめ」「でや」「おはからい」「お熱」「御親友」などの隠語があり、「おめ」とは「男女」を指すことも述べられている。「緒論」に続いて、この第七章は、「第一節 女性間性慾の原因」「第二節 女性間性慾の行はるゝ社會の階級」「第三節 女性間性慾者の情死」「第四節 外國に於ける女性間性慾」「第五節 女子精神的色情半陰陽者」「第六節 女子同性色情者」「第七節 女性間同性色情と男子的女子との中間者」「第八節 男性的女子」「第九節 男性化又男化」の全九節で構成されている。そしてさらには、「第九章 顛倒的同性間性慾の利害及び其社會に及ぼす影響」の「第三節 矯正及び治療法」もまた、ふたりにとって興味のある箇所だったものと思われる。というのも、ここには、催眠術によって異性に対する性慾を回復させる「催眠療法」、運動、食物、精神の慰安による「攝養法」、そして、異性との正式な交接を招来する「結婚療法」が挙げられていたからである。

安堵村への転居後、最初に発表した本格的な一枝のエッセイが、一九一七（大正六）年の「結婚する前と結婚してから」（『婦人公論』一月号）であった。そのなかで一枝は、結婚する前の生活を、こう振り返る。

私は思ふ。自分の過ぎこしは、あの美しくしかく果敢い石鹼玉の、都大路に誇ら[し]くかなしく吹きすぎたるやうに！！<sup>54</sup>

そして後段で、再び次のように、同じ石鹼玉の比喻表現を使う。意識的であったのか、無意識的であったのかはわからないけれども、繰り返しの手法を用いることによって、結果的に、「都大路のシャボン玉」は、より一層強調されることになる。

私の意志と、私の希望は最後まで騒音の都大路に高く誇ら[し]く、しかし悲しく浮き上り光った果敢い石鹼玉に過ぎなかつた<sup>55</sup>。

明らかに以上のふたつの引用からわかるように、一枝は、誇らしく美しくもあるが、悲しくはかなくもある、あの空高くに舞い上がったシャボン玉のような両義的な存在として、自分の結婚する前の生活を認識しているのである。そして、青鞥社時代の自分を、こう振り返る。

評判を悪くして心のうちで寂しく暮してゐた事もあつた。可成り長く病氣で轉地してゐた時もあつた。全く寂しく暮してゐた時もあつた。どうにかして眞面目な人生に眼を醒ましたいと悶躁<sup>もが</sup>いてゐた。僞もつゐた。人を欺しもした。いぢめもした。愛しもした<sup>56</sup>。

振り返って内省してみると、青鞥社員のとときの自分が、寂しく、もがき、そして、うそをつき、人をだまし、またあるときは、人をいじめ、人を愛する——そのような人間であつたことへと思いが至る。これこそが、数年前の自分の「新しい女」の内実だったのである。確たる信念があるわけではなく、確たる理想があるわけでもなく、おもしろおかしく、奔放に振る舞う「紅吉」がそこにあつた。

一枝は、この「結婚する前と結婚してから」のなかで、こうも書いている。「都會を出立して田舎に轉移した彼と私は彼の云ふ高い思想生活を私達の爲めに營むべく最もよい機會をここに見出したことに強い自信とはりつめた意志があつた」<sup>57</sup>。そしてさらには、「彼は、都會は、私を必ずや再び以前に歸すことを、再び私の落着のない心が誘起される事をよく知つてゐた」<sup>58</sup>。憲吉と一枝の夫婦は、結婚をひとつの好機ととらえ、一枝のいうところの「落着のない心」、つまり同性へ向かう性的指向が二度と誘発されることがないことを強く望んだ。そのためには、都會を離れ、対象となるような若くて美しく才能あふれる女性と触れ合う機会がほとんどないこの大和の田舎へ移転し、高い精神性のもとに新しい生活をはじめることが、ふたりにとっては、どうしても必要であつた。しかしながら、一枝の「落着のない心」は、「彼の云ふ高い思想生活」で本当に解決するのであろうか。そこには大きな苦闘が横たわっていたであろう。

そのこととはまた別に、本人が述べているように<sup>59</sup>、そしてまた、他人が観察しているように<sup>60</sup>、一枝は、必ずしも「新しい女」ではなく、本来的に、母ゆずりの良妻賢母主義的な「旧い女」の側面を有していた<sup>61</sup>。そこで、脳天気<sup>62</sup>に振る舞つた「青鞥の女」から自己を解き放し、まさしく「近代の女」へと生まれ変わらなければならない状況に立たされていることを、この時期一枝は、正しくも自覚したのであろう。そしてまた、夫である憲吉も、そのことを指摘したのであろう。セクシュアリティの問題に加えて、女としての生き方の問題が、そこにあつた。しかし、頭ではわかっている、一瞬にしてすべてを葬り去ることは、容易なことではない。アイデンティティの喪失にもつながりかねない問題なのである。簡単に前へも進めない、かといって、後ろにしがみついてもできない、極めて深刻な心的環境に身を置いていたにちがひなかつた。しかも、憲吉は強く過去の思想との決別を求めたのであろう。しかしながら、憲吉と一枝には、近代精神の体得という観点から見れば、年齢的な差もあり、体験、知識、語学力のいずれの面においても、おそらくいまだ大きな開きがあつた。一枝は、ふたりのあいだの意識の隔たりだけが、大きな口を開

けて、飛びかかってくるような思いに、ときとして駆られていった。

彼と私は、思想に於いてまだまだ酷く掛<sup>ひび</sup>け離れてゐる。長い間語らずに怒り合ふ時もある。二人とも興奮しきつて沈黙つて大地をみてゐる時もある。もう別れてしまふやうな話までもち出す。……私の心は悩む、そして度々考へた。単純な自然的な正直な生活を営むには、未だ未だ私は眞實でない。眞實が足りぬ。それがどんなに彼を寂しく悲しくするか知れない<sup>62</sup>。

憲吉は離婚について口にすることもあった。そのようなとき、周りの美しい自然に目を向ける。「私達は今田舎にゐる。それが心の爲めにも身體の爲めにも非常に好い。ここは美しい。私達は結び合つた山と、いくら見ても遥かな田園の空氣を吸つて常に最も深い熱心を以て生活を営むのである」<sup>63</sup>。そして、いまの自分たちの姿を見つめなおす。喜びが胸に込み上げる。「夫は非常な熱心で常に私を指導してゐる。そして私達は、私達の全力を注いで幼児の教養と私達の仕事につき進んでゐる」<sup>64</sup>。憲吉が、一枝を「指導してゐる」のは、ひとつには、一枝のセクシュアリティにかかわる問題であり、いまひとつには、妻であり母であることにかかわる問題だったにちがいない。一方では、体の性と心の性がどうしても一致しない違和感や不安感、他方では、自我を殺し、家に縛られる女性像と、そこからの解放や自立を求め、行動する女性像とのあいだの越えがたい溝——つまり、ある意味宿命的ともいえる、二重の克服すべき困苦を一枝は背負っていたのである。後述する三年後の言葉にはっきりと現われているように、憲吉はこの時期、自分の仕事に対してのみならず、こうした一枝が抱える問題に対してもまた、前時代的で封建的な精神を乗り越えて、求道者のごとくに「高い思想生活」を追求しようとしていたものと推量される。

以上が、一九一七（大正六）年ころの一枝の心の状況であつた。この年の一月に、第二子の陶が誕生した。一枝が書くものは、そのときどきの心の情景をそのまま映し出す鏡に似ている。二年後の一九一九（大正八）年の「海の砂」（『解放』一二月号）では、いまの自分をこう語る。

久しい間、幾年か私は、自分を不良心なものと思つたし、不徳義なものだとして見てゐたし、不道德な人間だと思つて見過して來た。勿論、それを恥ぢた [こ] ともあつたし、強く責めて來た時もあつたが、とかく眞實の自分を探りあてる間近になると卑怯にも一時逃れをやつてみた。それが「或る事」から、まるで考へが變つて仕舞つた。そしてどうにかしてそこに見つけた光りを、少しでも見失ひたくないと思つて、どれだけ一心に唯その光りに寄り縋つて來たろう。限りなく善くなること、限りなく正しい道を求めること、それが自分の探るべき一つのものであつた<sup>65</sup>。

ここで一枝がいつている、「不良心」で「不徳義」で「不道德」であつたこれまでの自分とは、具体的にはどのような自分が念頭に置かれているのであろうか。こうした強い表現から推測すると、「らいてうとの恋」に溺れ、「五色の酒」に酔い、「吉原遊興」に耽る、かつての青鞞時代の天衣無縫な紅吉に止まらないように思われてくる。つまりそれは、美しい女性や才能をもった女性に強い関心を抱く、小さいころからの自己のセクシュアリティ

一を指し示しているのではあるまいか。もっとも一枝は、「とにかく眞實の自分を探りあてる間近になると卑怯にも一時逃れをやつてみた」と書いている。そのことから推量すれば、「眞實の自分」のセクシュアリティに誠実に対峙することは、ついぞこれまでになかったのであろう。

ところが、それへの全き対峙が求められる状況へと環境が変わった。上の引用文のなかで、一枝は「それが『或る事』から、まるで考へが變つて仕舞つた」と述べている。「或る事」とは、憲吉との結婚を意味しているであろう。そうであれば、この引用文は、結婚をきっかけとして、異性あるいは同性が織りなす都会の誘惑から離れ、隠者のごとく、自然豊かなこの田園の村に移り住み、夫という「光り」を浴びながら、「不良心」で「不徳義」で「不道德」であったこれまでの自分を捨て去り、「限りなく善くなること、限りなく正しい道を求めること」に己を向けようとしている、自己告白のように読める。たとえそうした血のにじむような努力がなされる状況に身を置くことになったとしても、そもそも本来的に、結婚することにより「同性の愛」は、本当に雲散霧消するのであろうか。不安はつきまとったであろう。というのも、『變態性慾論』には、それについて、こう書かれてあったからである。「結婚療法とは、異性との正式なる交接に依りて、治療する法をいふ。その効力に就いては、異論ありて、或る者は有効とし、或るものは無効無害とし、又或る者は無効有害とせり」<sup>66</sup>。

長女の陽が次第に成長した。おそらく一九二〇（大正九）年の春のことであろうと思われるが、「満四才六ヶ月かの時、彼女には四人の先生が出来ました。いよいよ正しい勉強法を始めたのです。英語國語理科音楽、この四科目をそれぞれの先生にお頼みして、私は一週間に七八時間、陽を連れて奈良に通ひました……數學が一番遅く始めました」<sup>67</sup>。向かう先は、奈良女子高等師範学校（現在の奈良女子大学）の附属小学校だった。

一枝は東京にいた独身時代、よく上野の図書館に出かけていた。それを思うと、陽が附属小学校で放課後に勉強しているあいだ、待ち時間を利用して、奈良公園内にあった奈良県立戦捷図書館（現在の奈良県立図書情報館）へ行き、憲吉の仕事の助手や、女中や子どもたちがいるため家で読むのがはばかられたかもしれない『變態性慾論』に密かに目を通すことはなかったであろうか。熊本県立図書館との相互貸借によりいま手もとにある『變態性慾論』（大正五年八月一五日発行の第四版）には、「奈良県立戦捷図書館」の蔵書印がはっきりと押されている。詳細を奈良県立図書情報館に問い合わせたところ、この本の「受入（おそらく購入）は大正六年一〇月一〇日、分類番号は七〇九、旧登録番号は一七一〇五」という回答であった。所蔵の時期から判断すれば、実にこの本こそ、一枝本人が手にしたものだったのかもしれない。

陽を連れて附属小学校に通いはじめたと思われる一九二〇（大正九）年には、日本性學會発行の性的叢書の全一二編が、澤田順次郎を執筆者として、天下堂書房から順次刊行されていた。そのなかには、第三編『神秘なる同性愛 上巻』と第四編『神秘なる同性愛 下巻』が含まれており、内容的には、全体としては『變態性慾論』と大きく変わるところはなかったものの、最新の情報として、一枝の秘めたる知的欲求を満たすものであったにちがいがなかった。著者の澤田順次郎は、「同性愛を治するには、先づ精神病学上より、是の原因（先天若しくは後天）を確めて、之れに對する療法を講ずること必要である」<sup>68</sup>と前置きしたうえで、前の共著と同じく、ここでも同性愛の治療法として、「催眠療法」「攝養法」

「結婚療法」の三種を説くが、とりわけ「攝養法」には、次のような、具体的記述が新たに加わり、一枝の目を引いたものと思われる。

此の法の主要なるものは、運動、食養及び精神の慰安である。

運動は室内に於いてするよりも、戸外運動の方が宜しい。遠足、遊戯なども有効にして、夏には水浴を試むるがよい。……轉地は必要であるけれども、學校、教會、音樂會、等すべて同性の多く集合するところへ、出ることは禁じなくてはならぬ。それから食物は、亢奮性のものを避けて、成るべく沈静性のものを選びなくてはならぬ。又、精神には慰樂を與へて、安靜に保つべきこと勿論であるけれども、常に心に閑暇を生じさせるよう、仕向けなくてはならぬ。斯くの如くして、固く攝養を守るときは、是の疾患は次第に薄らいで、異性に對する性慾を、恢復することがある<sup>69</sup>。

「催眠療法」については、澤田は、「軽症の者には適するけれども、重症の者にあつては、殆んど無効なりと謂ふの外はない」と記述する。そうであれば、「結婚療法」はもはや該当しないので、一枝にとっての有効な治療法は「攝養法」に絞られ、とりわけ、戸外運動（とくに夏の海水浴）、食事（亢奮性食物の忌避と沈静性食物の摂取）、それに心の閑暇（精神的な慰樂と安靜）に加えて、女性の集まる場所への出入りの禁止が、その当時の一枝には当てはまったのではないだろうか。

ちょうど同じ一九二〇（大正九）年、憲吉は、『女性日本人』一〇月号に「美を念とする陶器」を寄稿した。そのなかで憲吉は、陶器だけではなく、自分たちの考えや生活も見てほしい、と読者に呼びかける。

私の陶器を見てくださる人々に。どうか私共の考へや生活も見てください、私は陶器でも失敗が多い様にいつも此の方でも失敗をして居りますが陶器の方で自分の盡せるだけの事をしたつもりで居る様に此方についても出来るだけ良くなるためにつとめています。それが縦ひ非常に不十分なものであつても<sup>70</sup>。

ここからわかることは、前述のとおり、明らかに憲吉は、陶器と生活とのふたつの事象についてともに改善を図ろうとしているということである。生活における改善のなかには、一枝のセクシュアリティの克服に関する問題や、女性としての近代的な生き方に関する問題が含まれていたものと思われる。

それでは、改善が進むこの時期の日々の暮らしのなかにあつて、一枝は、陽と陶のふたりの娘に対しては、どのような態度で接していたのであろうか、その当時の一枝の文から少し拾い上げてみる。

一九二一（大正一〇）年に発表された一枝のエッセイは、子どもに関する内容のものが目立つ。たとえば、「子供と私」（『婦人之友』一月号）や「子供を讚美する」（『婦人之友』五月号）がそれに相当する。この年の八月に陽は満六歳の、陶は十一月に満四歳の誕生日を迎えている。

前者の「子供と私」の冒頭において、一枝はこう告白する。「『子供と私』を書くについて、私は考へました。私は子供について書く資格が本當に有るだらうか。恥づかしくはな

からうか。恐らく自分は子供について書けないのが本當で、書くのは間違つてゐるのだと。……しかし、また思い返してみると、書くのが本當のやうに思はれたのです。これを書く事は自分が子供にもつてゐる心なり態度を深く反省する機會にもなるし、或意味で正直に自分の態度を責めてもらへる事にもなると思つたのです。……最初に書いて置きます。私は子供にとつて決して善い母親ではありません。親切な母親ではありません」<sup>71</sup>。

なぜここまで、母親としての自分を責めるのであろうか。一枝の性自認が「男」であったとするならば、それに起因して、子どもを慈しむ母性のような母親固有の感情がどうしても湧いてこなく、それを自覚したうえで、「決して善い母親ではありません。親切な母親ではありません」と、いつているのであろうか。それとも、当時の書物に記述されている「先天性の性的転倒者」であり「精神病患者」である己の身は、子どもの母親となるにふさわしくない——そういう刷り込まれた思い込みが、強い自責の念を引き起こしているのであろうか。その延長として、女へと向かう一枝の性的指向が改善されずに温存されていたとするならば、男たる夫の憲吉へは性的な関心が醸成されず、夜伽の交渉も、ほとんど成立していなかった可能性が残る。こうした一枝の子どもと夫に対する接し方は、母の教えであると同時に自ら求める「良妻賢母」の思想に根拠を置く「旧い女」とも、憲吉が一枝におそらく要求していたであろう「近代の女」とも、大きく異なるものであった。別の言葉に置き換えるならば、このとき一枝は、いずれの女性像の観点から見ても、完全なる闇のごときその裏側を生きていたことになる。こうした暗部を目にするときに、憲吉は、「別れてしまふやうな話までもち出す」ようになっていたのではないだろうか。

他方、後者の「子供を讃美する」では、少し趣が変わって、一枝は、次のような表現を使って、大自然のなかに純真さをもって存在する子どもをほめたてる。

子供はいい。歡喜と幸福と純粹の中に跳ねまわつてゐる様子を見ると、羨ましいので心をうたれる。子供はいつでも愉快で、いつでも生き生きとして大自然から生れたまゝで、幸福と云ふものを「掌」<sup>たなごころ</sup>にのせて、自由自在にそこからふりこぼれる光りにつつまれてよろこんでゐる。大自然の寵愛を思ふ存分受けてゐるのも子供だ。美しい自然の風景に、いきなり飛びこむことも、すぐ出来る。大空で朗かに歌う小鳥と一緒に歌へる。太陽と月と星に言葉をかけて得心してゐる單純な、しかも強烈な空想と想像力。どれもこれもなんと云ふ輝かしく豊饒な賜物だらう。子供程大自然に歡喜を感じるものはないと思ふ<sup>72</sup>。

ここには、紛れもなく、安堵の豊かで美しい自然のなかでのびやかに成長する、陽と陶の歡喜と幸福感が描かれていると考えていいだろう。しかし、その一方で、自己の内面にも、目が向かう。自分の歡喜や幸福感は——どこにあるのだろうか。同年翌月の「安堵村日記」(『婦人之友』六月号)に、一枝は、このやうに書く。

くらいところ、おちてゆく程、自分を責める態度が強くなつてくる。他人を責めることの上手な自分は、かつて他人を責めたより、もつと激しい強い力で自分を責めてゐるのだ。それから、自分を底の底まで侮蔑してゐる。意地悪く卑める。自分の痛い痛い傷を、實に残酷にしつこくあばく、ほじくりたおす。自分程、いやな人間、悪い

者は、もうゐないのだと云ふ事を、自分に無理にでも思ひこませようとする氣持がひどい音をたてて荒れ狂ふている<sup>73</sup>。

この時期、厳しい自己嫌悪と自己批判が一枝のなかで渦巻いていたことは確かであろう。けがれなき自然と子どもに比べて、自らの存在は、際立って醜く映る。その一方で、子どもの純真さだけではなく、自然の美しさに、心がいやされる。「今夜ほど星のきれいな晩は近頃になかった。……美しい夜だった。私の心は今、實に静かで、きれいだ。どうぞ、子供達に祝福あれ」<sup>74</sup>。このようにして、『神秘なる同性愛 下巻』の「攝養法」に明記されていた「心の閑暇（精神的な慰樂と安靜）」を、何とか、身近な自然に求めて、保とうとしていたのかもしれない。

一枝は、翌一九二二（大正一一）年の一月号と一二月号の二回に分けて「母親の手紙」を『女性』に連載した。子どもたちが、富本家の個人的な私設学校である「小さな学校」に通いはじめて、半年ほどが経過した時期である。かなりの長大な手紙である。かいつまむと、こうなる。「身体だけではなく、あなた方の知恵も、たましひも、見事にのび、善くそだつたのを母さんはどんなにうれしく沁々見やつたことでせう」<sup>75</sup>と、子どもの成長に喜びを感じ、「陽ちゃん、陶ちゃん、母さんはあなた方のために、やつぱり夢中で暮してゆきます。母さんは、どんなに苦しいことに出逢つてもあなた方のために、生きてゆきます。あなた方の愛と信頼は、母さんに自重、勇氣、忍耐、謙遜、を教へ示してくれる筈です」<sup>76</sup>と、自分にとっての子ども存在の大きさに言及する。子どもの父親のことについては、こういう。「お父さんは、美しい心をもつた、人間の心を温かく結びつけ、人間の生活にうるほいのあるやうな陶器を焼成さすためにどれだけ苦しんでゐらつしやるかわかりますか、お父さんの苦しい氣持や、出来てゆくお仕事をいつも間近で見たり、きいたり出来てゆくあなた方や母さんは、どんなにしあわせでめぐまれてゐるかしれません」<sup>77</sup>。そして、自分の未熟さや未完成さの補完を、子どもに託す。「母さんに出来なかつたものは、あなた方がその續きをしてくれる。そして不完全からだんだん完全にうつつてゆくものだからそうさびしく思はなくてもよいと、母さんの別の心が母さんを慰めてくれるのもその時です」<sup>78</sup>。そして、最後をこう結ぶ。

母さんがあなた方に手紙をかきたいと思つたきもちが、いま母さんには、はつきりわかりました。ありがとう、陽ちゃん、陶ちゃん、母さんはあなたがたにおれいをいひます。

あなた方のために、母さんはいつでもともするとふみかける汚れた道を踏むことなくして、別の正しい路をさらにさがしにゆくことが出来るのです。……

あなた方よ、愛しあつて下さい。助け合つて下さい。そして幸福であってください<sup>79</sup>。

以上が、この「母親の手紙」一二月号の要旨であり、一枝は子どもたちに感謝する。ふたりの娘の成長とともに自らも成長しながら、この時期の一枝は、もはや「汚れた道」へと進むことなく、子どものためにも「別の正しい路」を見出そうとしているのである。

すでに見てきたように、『神秘なる同性愛 下巻』には、一枝に適合しそうな治療法として、戸外運動（とくに夏の海水浴）、食事（亢奮性食物の忌避と沈静性食物の摂取）、心の

閑暇（精神的な慰楽と安静）に加えて、女性の集まる場所への出入りの禁止といった項目内容が記載されていた。おそらく一枝は、これに従ったであろう。一枝の「戸外運動（とくに夏の海水浴）」にかかわる様子については、わずかではあるが、以下のような資料が残されている。このころ一枝は、中江百合子と出会っている。出会いの経緯は、はっきりしないが、憲吉は、東京美術学校時代に、先輩で画家の南薫造を頼って英国へ留学していて、「中江百合子は、南〔薫造〕とは一番町教会、後には富士見町教会での直接の縁もあってか、既に明治四四年の富士見町教会での南の個展で絵を買っている」<sup>80</sup>。おそらくこうしたことが背景にあって南は、その当時、関西の実業家の中江家に嫁いだ百合子を、奈良の安堵村に住む憲吉と一枝に紹介していたものと思われる。ところが、長男が身代金目当ての誘拐事件に遭う。この事件は無事に落ち着いたものの、中江一家は、一九二〇（大正九）年末に東京へと引っ越すことになり、一枝は、上京のうちに、しばしば、本郷区弓町にあった中江宅に逗留する間柄になった。百合子は、「東京に来てからまた教会に通うようになっていた」<sup>81</sup>。誘拐事件以降の長男の精神的不安定を心配してのことであった。一枝も、自己のセクシュアリティについて不安を抱えていた。のちに中江家の三男と結婚し、中江家に入った泰子は、次のように百合子と一枝との当時の交流の一端を紹介している。

今、私の手元に一通の手紙が残されている。それは姑〔中江百合子〕が大正時代から親しく交際していた大和安堵村時代の富本憲吉夫人一枝さんに宛てた、巻紙の四メートル余にもおよぶ長文の手紙である。……長男について、姑がどんなにか深く心配し、迷い、悩みの果てに、祈りによって何とか生きる望みをもとうとした心境が縷々と綴られていて心が痛む。手紙の中での的矢の海岸で富本一家と過ごした夏休みに、富本家の二人の子供さんたちと元気に泳いで喜んでる長男を見て、運動でもさせれば明るくなるのではと、一日も早く彼のためにテニスコートが欲しい、とも記している<sup>82</sup>。

この的矢の海岸での海水浴は、長男の心について悩む百合子と、自分自身の心について悩む一枝との、心をあわせた、ひと夏の「戸外運動」だったのではないだろうか。百合子と一枝の交流は、その後も生涯続く。

次に、一枝の「食事（亢奮性食物の忌避と沈静性食物の摂取）」については、どうであったろうか。これについても、わずかな資料しか残されていない。憲吉は釣りが好きだった。釣果は、一枝の手によって甘露煮となる。しかし一枝は、この甘露煮を食しない。「この間から煮かけてみた川魚がやつとたきあがった。手釣りの鮎の甘露煮だ。子供達もおいしがってたべた。こんなうまいものを、どうして喰べないのかと笑はれた。たべものに、好き嫌ひのあまりに強過ぎる自分を、子供達のために困ったと思つた。幸ひ、子供達にはまだこの困る癖がついてみないので安心だ。しかし自分にこの癖がある事を子供達に知られないやうに可成りの苦心がいつた」<sup>83</sup>。次女の陶は、こう回想する。「そうそう、大和には古いレンジがありました。炭の上に乗せるものでね。……でも、〔母は〕料理はあまりしなかつたようですね。パンやジャムなどを作るのは好きでしたが。母は白身のお魚、父はすき焼きが好き」<sup>84</sup>。これらの言説の内容が、亢奮性食物の忌避と沈静性食物の摂取に関連しているものかどうか、それは、即断することはできない。

最後の、「女性の集まる場所への出入りの禁止」という項目については、一枝はどう対処

したのであろうか。一枝が、女性の集まる場所へ積極的に出かけていたことを例証する資料は見当たらない。おそらく自制していたものと思われる。しかしながら逆に、若い女性たちが、一枝を慕って、安堵村へ足を運んでいたことを示す資料は、幾例か残されている。

一九二一（大正一〇）年五月に、羽仁もと子が園長を務める自由学園高等科に一期生が入学した。そのなかには、のちに童話作家で児童文学者となる岡内<sup>かずこ</sup><sup>かづこ</sup>（のちに村山姓）や社会運動家として活躍する田中綾子（のちに石垣姓）が含まれていた。以下は、村山<sup>かづこ</sup>研究家のやまさき・さとしの文であるが、富本憲吉夫妻と岡内<sup>かづこ</sup>の出会いについて描写されている。

大正十二年三月末から四月のはじめにかけて、卒業旅行と称して彼女たち一期生一行はミセス羽仁とともに（総勢二五名）横浜港発の欧州航路伏見丸の一等船客となり、「西洋」を勉強しつつ、神戸に上陸して奈良近辺の「東洋」を学んだが、奈良では全員、富本の〔本宅の〕屋敷に泊り、かれの案内で仏像をみて廻った。しかし<sup>かづこ</sup>に衝撃を与えたのは憲吉のカマドであり、その夫人、一枝との対面であって、青鞥の流れを汲む富本一枝はその後<sup>かづこ</sup>の受難時代にその胸を貸して終生の友人となったし、憲吉はのちに<sup>かづこ</sup>の遺言によって墓碑銘を揮毫するのである<sup>85</sup>。

それから数箇月後の一九二三（大正一二）年の夏、田中綾子が、再び安堵村を訪ねてきた。のちに執筆する石垣綾子の自伝『我が愛 流れの足跡』に、そのときの様子が、このように書き記されている。

一枝の美しさとそれに魅了された自分について、まず、このように書き出す。

女学校を卒業後、学んだ自由学園で、私は富本一枝と顔見知りになっていた。彼女はいつもすらりと伸びた長身の背すじをのぼし、髪は前を少しふくらませて上へ持ち上げ、くるくると束ねて長いえり足をみせていた。観音像を思わせる顔には白粉<sup>おしろい</sup>気はなく、久留米がすりの対に黒い半衿、幅の狭い帯を低めにゆったりしめている。常識をこえたしゃれっ気と、絵描きらしい独特のセンスがゆきわたっていた。かつて平塚らいてうが愛し、また多くの若い女性に恋心を抱かせた、不思議な美しさに、私も心惹かれたのである<sup>86</sup>。

次に、家のなかの一枝について述べる。

自宅に窯場を築き、陶芸に精魂をこめる憲吉は、家事はすべて一枝まかせであった。台所で魚を焼いたり、煮ものをしたりする一枝の傍には、必ず本やノートが広げられていた。彼女はその頃、羽仁もと子の『婦人之友』にも詩や随筆を寄せていたが、それはみんな、こうして書かれたものだった<sup>87</sup>。

続けて記述は、子どもたちへと移る。ある晴れた夕方のことであった。庭で遊んでいた陽と陶が、沈みゆく夕陽を見て、その美しさに感動すると、叫び声を上げて母親を呼ぶ。

家の中からとび出て来た一枝は、両側に寄り添った二人の娘の手をとり、親子三人は、声もなく、斑鳩の田園地帯の彼方、生駒の山なみに沈む夕日に見とれて、立ちつくしている。田の面の水が夕映えを映して光り、蛙が鳴いていた。太陽が没して山の黒い輪郭の上に金色の空が残り、あたりが次第にたそがれてきても、三人はそのままである。そのシルエットは、それだけで完結した一つの世界であった<sup>88</sup>。

そして、夜になった——。「夜になると私は、夫婦が二人の女の子を挟んで寝る蚊帳に入りこんだ。夫婦には迷惑至極だったろうが、私は一枝のわきに眠れるのがうれしかった」<sup>89</sup>。

これが、一〇代最後の夏に石垣が体験した安堵村での青春だった。そのとき石垣は、「漠然とした焦燥感に悩んでいた。何かをしたくてたまらないのに、何をすればよいのか解らないのだった。家に、世間に、反抗する気持は強かったが、確固たる自分があるわけではなかった。……どのような言葉で自分の悩みを打ち明けたのか、彼女 [一枝] がそれに対してどんな助言を与えてくれたのか、もう思い出せないが、この人のそばにいただけでなぜか心がやすらぐ思いがしたものである」<sup>90</sup>。

## 第五章 夏の出来事と安堵村生活の終焉

——わたしは M さんに心を傾けていました

この時期一枝に魅せられたのは、石垣綾子だけではなかった。一枝が陽を連れて奈良女子高等師範学校に通っていたころのことである、ひとりのその学校の学生が、安堵の自宅へ一枝を訪ねてきた。一枝が雑誌に寄稿した詩に感動し、ぜひとも一枝に会ってみたいとの思いからの訪問であった。その学生が、その後、とりわけ日本の農村の婦人問題にかかわって活躍することになる丸岡秀子である。丸岡は、晩年に執筆する『いのちと命のあいだに』のなかで、一枝と憲吉に出会ったときに受けた強い衝撃について、こう書いている。

青田の中に、ちょこんと建てられたあの家の二人は、当時いっぴしの大人だった。だが、十代を苦悶し、その苦悶に支えられて二十代を翔ぼうとしている小鳥のようなわたしに対して、いささかの差別もない。子ども扱いもしなかった。大人振りもしなかった。人間として、まったく平等な扱い方をしてくれる人という信頼を持たせた。

それはなぜだったのか。このことは、差別に敏感なわたしの環境から、自力で脱却をはかる芽を創り育ててくれた。これこそ、まさに「近代」とのめぐり合いといえよう<sup>91</sup>。

このとき、この夫婦の生き方のなかに、丸岡は、「近代」の具体的な姿を、驚きと崇敬の念をもって目撃したのであった。

その後も、ふたりに魅せられた丸岡の安堵訪問は続く。そのころの詳しい様子について、丸岡は、自伝的小説『ひとすじの道 第三部』のなかにも書いている。主人公の手塚恵子が丸岡自身と考えて差し支えないであろう。それでは、それに従って、最初の出会いから、一九二三（大正一二）年の関東大震災の時期までを追ってみたいと思う。

「[手塚] 恵子は、一枝をあこがれ、一枝に逢うために、安堵村を訪れたのだった。そして、初めて逢ったその日に、一枝には、愛慕を感じた。だが、夫の憲吉には、初めは関心が薄かったが、時間が経つうちに、敬愛の深まるのがわかった。二年生になったばかりの十七歳の春だった。……恵子は、この一組の配偶を理想の像と見るようになっていった。そして、二人の生活のなかに、遠慮もなく入り込んだ自分を、幸運だったと思った。そして求める人間にめぐり逢いたくて、この家にふみこんでしまった無遠慮を大切にし、途中で失うようなことを決してしてはならないと思うようになっていった。……一枝の書架には、新しい本がぎっしり詰められ、机の上に置かれた原稿用紙と、インクとペンは、これまでの女の生き方を否定し、新しい生き方の模索のために、書き手を待っているようであった。……相手の迷惑を顧みる余裕もなく、恵子は、日曜ごとに夫婦を訪ねることを日課とした。そのうちに二人を訪ねる人が、だんだん多くなることもわかってきたし、一枝をあこがれる学生も、同級生のなかにも出てきたり、そのまた上の学生のなかにも、出てくるようになった。一枝は、それらをすべて受容した。決して拒まなかった。強烈な花の香りに集まるように、二人が三人になり四人になっていった。一枝もまた、それらのなかで、好ましい学生とそうでないものとの、心を分ける姿を見せることもあった。恵子は、その

ことを敏感にかぎ分けた。そして嫉妬もした。だが、それに負けるものかと思うようになった。むしろ、せつせと安堵村に通った。すると、同級生や、上級生が、ベランダで、一日中、一枝とはなやかに談笑していることもたびたびだった。だが、恵子はひるまなかった。すぐ、台所に入って袴をとり、割烹まえかけ姿になって、浸けてある洗濯をはじめた。……窯出しの日が、日曜に当たるときもあった。憲吉の陶器を求めて、大阪や京都や、時に東京から訪れてくる人びとがいた。恵子は、そんな日は心忙しく手伝った<sup>92</sup>。

このように、一枝を頼って日曜日に安堵村を訪れる奈良女高師の学生たちが次第に増えていった。丸岡もそうであったように、そのなかには、出自や家庭環境に悩みをもつ者、将来に不安を抱く者、社会や政治に不満をもつ者も含まれていたであろう。誰しもがそれぞれに苦しみを抱え、そこから抜け出そうとしていた十代後半の女たちであったにちがいない。男尊女卑が支配する社会にあって、対等の存在としてみなされていない彼女たちにとっては、その救いを、男性に求めることはなく、勢い同性に向けてゆく。一枝もそれは、よく承知していたであろう。そうしたなかから、男女の恋愛に擬されるような、同性間の愛の交流が芽生えたとしても、それはそれで、何ら不思議はなかった。

一九二三（大正一二）年の夏のことであった。そのとき丸岡は、奈良女高師の四年生になっていた。卒業すると、来年は、どこに住んでいるかわからない。安堵村へ来ることができかどうかもわからない。そこで「恵子は、二人の迷惑も考えないで、この夏の〔富本家の〕尾道行きにすがりついた。……そのころの尾道は、〔恵子が生まれ育った〕信濃の山村とは、まるでちがう活況があった。漁業を中心とする町だった。そこからポンポン蒸気で渡る小さな島にある一軒家を借りて、約一か月を過ごした」<sup>93</sup>。

そのとき、ひとつの出来事が起こった。丸岡はその場面を、一枝の喜びと憲吉の寂しさを対比しながら、こう描く。

「その間にも、訪問客があった。ことに一枝をあこがれ、一枝もまたとくべつの好意を寄せていた、奈良の学校の先輩が島を訪れた。恵子の上級生でもあり、特別な美貌でもあり、当時この家への出入りも繁くなっていた。恵子の友人の一人でもあった。一枝は喜び、彼女と水着に着替えて、毎日、彼女と二人で海に入った。こちらの島から向こうに見える島まで泳ぎの競争をするのだと、はしゃいでいた。憲吉は、寂しそうに、二人の子どもたちと、いっしょに海に入った。恵子は、岸边でそれを見送りながら、幸福を満喫して大きく泳いでいる一枝と、いつもそれを許してきた憲吉の孤独を、同時に、ひそかに思っていた」<sup>94</sup>。

憲吉にとって、直接自分の目ではじめて見る、美しい女性に心をときめかず一枝の歓喜の姿であった。このとき憲吉は、四年前に一枝が「海の砂」（『解放』一二号）のなかで自己分析していた、『『不良心』で『不徳義』で『不道徳』であったこれまでの自分』が、いまなお一枝のなかに生きていたことに気づかされたであろう。丸岡が観察しているように、憲吉の「孤独」は深かったにちがいない。あるいはそれ以上に、激しい虚しさや不信感が憲吉を襲ったかもしれない。また一方、幼い陽と陶は、母親が「とくべつの好意を寄せていた」人と一緒に、「幸福を満喫して大きく泳いでいる」様子を見て、どのような思いに駆られていったであろうか――。

それからしばらくして、またひとつの出来事が起こった。丸岡にとって、これもまた、いままでに経験したことのないような衝撃だったにちがいない。その場面を丸岡は、こう

描写する。

ある日のこと、恵子は独りポンポン蒸気に乗り、尾道まで食糧を仕入れに行き帰ったが、まだみんなが海だったので、昨日の日記をつけようと机の上のノートを開いた。ところが、そこに一枝の伸びやかな文字が長々と書きこまれてあった。それが目に入ったとき、恵子は飛び上がって驚いた。

「許してください。黙って、あなたの日記を見たことを許してください。それは、あなたがどんなに苦しい思いをしているのか、いつも心配していたからです。ことに M さんが島を訪れたときのあなたの表情を見ていたからです。たしかに、わたしは M さんに心を傾けていました。M さんを愛してもいます。だが、そのかげで、あなたの心を傷つけてしまったのではなかったかと、恐れていたのです。

ところが、あなたの日記には、どこにもその影さえ見当たらなかったのです。感謝しています」と、恵子の日記の終わったページに、一枝は書いていた<sup>95</sup>。

こうして夏の休みの日々が過ぎ、九月一日、帰村のときが来た。その途中で一行は、関東大震災のことを知った。

尾道から船で渡ったこの向島での海水浴は、一枝にとってみれば、『神秘なる同性愛 下巻』のなかで同性愛の治療法として紹介されていた戸外運動の一環だったにちがいない。また、憲吉の陶器の愛好家であった小川正矩が、一行の宿泊宿などの滞在期間中の世話をしているが、小川はこの島の開業医であり、富本夫妻は、妻のセクシュアリティについて少しでも意見を聞きたいと思っていたのかもよれなかつた。しかし、それもこれもすべてが、「M さん」の出現によって水泡に帰すこととなってしまった。「M さん」とは、どのような女性なのだろうか。手掛かりは、「一枝もまたとくべつの好意を寄せていた……恵子の [奈良女高師の] 上級生でもあり、特別な美貌でもあり、[学生のころ] 当時この家への出入りも繁くなっていた」という、上で引用した丸岡の記述しかいまのところない。

年が明けた、一九二四（大正一三）年の四月、「小さな学校」に新しい教師が着任した。着任してしばらくすると、『婦人之友』八月号の「私たちの小さな学校に就て」という特集のための執筆がはじまった。一枝は「1. 母親の欲ふ教育」を、新任の小林信は「2. 稚い人達のお友達となつて」を、そして憲吉は「3. 生徒ふたりの教室」を書いて寄稿した。一枝は「1. 母親の欲ふ教育」のなかで、これまでの陽と陶に対する家庭内での教育実践の様子を詳細に語り、続けて、村の小学校に子どもを通わすことを断念し、「小さな学校」を開設するまでに至った経緯を書き、そして、最後の「附記」のなかで、新任の小林についてこう記した。「小林信氏は私の若き友人として、今子供達のために全力を盡してゐて下さる。氏によつて私達の仕事は第二期に入ろうとしてゐます。學識ある氏によつて私達の學校の基礎が固められつゝある事を悦び感謝します」<sup>96</sup>。

富本家の菩提寺である円通院につくられた「小さな学校」の先生は、初代が伊藤、二代目が立石で、この四月から小林信に引き継がれ、一枝は、これをもって「第二期」に入り、「基礎が固められつゝある」ことに喜びを隠さない。一方の小林はどうかというと、「2. 稚い人達のお友達となつて」のなかで、冒頭、陽と陶と自分とのこれまでの関係をまず紹介する。「私が陽ちやん陶ちやんと云ふ二人の稚い人のお友達となつて、此の學校に來ました

のは、つい此の四月で、未だほんの四ヶ月足らずにしかありません。けれど、私は此處三年程前、即ち姉さんである陽ちやんが、始めて恁ういふ特殊な教育を受け始めて以來、二人の母上を通して、その母上が二人の愛兒の上に抱いて居られる理想を覗ひ、二人の稚い人達の上を祕かに考へ、此の稚い人達の學校を見せて貰ひ、又一二時間の出鱈目な先生になつた事柄もありして、陽ちやんと陶ちやんとは、お互によく遊ぶお友達同志でありました」<sup>97</sup>。そして自分のことについては、このように書く。いまの悲しむべき学校社会から「せめて自分丈けでも……逃れたいと、常に願ひ乍らも、止むなく或る地方の女學校に赴任して一年。私の無經驗な、併しそれ丈けに純粹であり、又眞實だと信ずる私の考へが、事毎に、殆んどその種子下ろしさへも許されずに、無慘無慘と蹂躪むざむざふみにじられて行くのを、私は戦ひおほして突き進む力を失つて了ひました」<sup>98</sup>。さらに、小林の言葉は、ふたりの生徒の母親である一枝への感謝へと向かう。

小さくとも私自身の生きた教育がして見度い。勿論、私の描く夢が、果して眞實のものに近いか否かを、私は知りません。それを思ふと、私は常に自分の爲てゐる仕事が恐ろしくなり、二人の稚い人達の前に、涙で頭の上がらなくなるのを感じます。併し、私自身は、私を容して呉れる人の許で、私の信じる處を進むより仕方がないのです。幸にも、二人の稚い人たちの母上から、『兎も角も貴女の信じる處を遣つて見て下さい。』といふ寛い了解の許に三人が結び合つてからの、此の小さな學校は何にも換へ難い私の寶です<sup>99</sup>。

ここまで読み進めていくと、この小林信という新任教師は、先に紹介した、丸岡秀子の『ひとすじの道 第三部』において、尾道の対岸にある向島での海水浴の場面に登場する訪問客の「M さん」と同一人物ではないのだろうかとの推測がよぎる。主人公の「恵子」（つまり丸岡自身）の奈良女高師の先輩で友人でもあるその訪問客は、三年くらい前から一枝を慕って安堵へ足しげく通ひ、陽や陶の遊び相手にもなり、卒業後は、昨年の四月より地方の女學校に勤務するも、教師としての夢破れ、夏休みには、あこがれの一枝を頼って滞在先の向島を訪ね、毎日二人して泳ぎを楽しむ——この人物こそが、実は小林信という女性だったのではないだろうか。「信」の読みは、「まこと」「まさ」「みち」のどれかであったであろう。

そこで、奈良女子高等師範學校を前身校にもつ現在の奈良女子大学の學術情報センターに問い合わせたところ、次のような情報が返ってきた。小林信は、一九二三（大正一二）年三月に奈良女高師（文科）を卒業後、山口県にある德基高等女學校（現在の山口県立厚狭高等学校）に赴任、また、同大学同窓会の佐保会会員名簿の記載内容に従えば、一九二四（大正一三）年一月現在「生駒郡安堵村富本方」に在住、そして一九二五（大正一四）年一月現在「桑野信子」として在「東京」、ただし「信」の読み方については不明、ということであった。

富本憲吉の四人家族は、一九二六（大正一五）年の一〇月、これもまた、前回の東京から安堵村への転居同様に、突然にも、安堵村を出て東京へ移転する。小林信が「小さな學校」に赴任した一九二四（大正一三）年の四月から富本家が東京へ移転する一九二六（大正一五）年一〇月までの二年半のあいだに、何が起こったのであろうか。ここに謎に包ま

れた闇の時間が存在する。「M」を「まこと」「まさ」「みち」のどれかのイニシャルであると仮定したうえで、すでに挙げた、丸岡秀子が自伝小説のなかで描いている訪問者「Mさん」についての記述、小林信が「2. 稚い人達のお友達となつて」のなかで述べている自分自身の経歴についての内容、そして、奈良女子大学から提供された小林信に関する情報の三点を総合的に勘案すれば、ほぼ間違いなく小林信が実は「Mさん」だったのではないかとの推断を得ることができ、これをもって論証の前提として、東京移転までのこの空白の二年半を、以下に記述してみたいと思う。

一枝が「とくべつの好意を寄せていた」「特別な美貌で」「學識ある」女性が、この四月、円通院の「小さな学校」に赴任してきた。しかし、昨年夏の向島での海水浴で見たふたりの親密な同性関係が、もしこの「小さな学校」に今後そのまま持ち込まれることになるのであれば、それは一体どのような事態を招くことになるのであろうか。それについては、何ひとつ決定的な証拠となるものは残されておらず、想像するしかほか、手立てはない。しかし、「1. 母親の欲ふ教育」において一枝がいうように、「基礎が固められつゝある」なか、そして「3. 生徒ふたりの教室」なかで憲吉が述べているように、設備等の充実も一方で展望されているなか、なぜかくも短期間のうちに、確たる教育成果もなく、しかも後任や転校先が未定のまま、この学校は閉じられなければならなかったのか。極めて重大な何かが、このときこの学校に起こったことが想定される。それは何か。一枝と小林のあいだに愛を巡る何か深刻な問題が生じた——そのように考えるのが、やはり自然で順当なのではないだろうか。小林に向けられた一枝の一方的な愛だったのか、双方が許し求め合う愛だったのか、正確にはわからない。前者であれば、一枝の行動に驚いた小林は、逃げるようにして安堵村を去った可能性があるし、後者であれば、引き裂かれるような、意に反した強圧的な解雇だった可能性もある。そうでなければ、そののちの、深尾須磨子と荻野綾子、あるいは湯浅芳子と中條百合子にみられる事例に近いものがあつたのではないかとも考えられる。つまり、小林が結婚をすることによって、ふたりの関係が強制的に終了した可能性である。

いかなる結末であつたとしても、前任の女学校に自分の居場所を見出すことができず、一年で職を辞し、希望に満ちて安堵村の富本家に赴き、「此の小さな学校は何にも換へ難い私の寶です」と書いていた純真で若い小林は、このとき、教師としても女性としても、何らかの挫折と苦しみを経験したにちがひなかった。その後の彼女の消息を知る立場にあつたのは、奈良女高師の後輩で友人の丸岡秀子くらいだつたのではないかと思われる。のちに丸岡は、皮肉なり嫉妬なりを込めて、「ずいぶん浮気をなされたから、もう思い残すことはないでしょう」「あなたは美人がお好きでした。それはみとめていらっしゃるでしょう」<sup>100</sup>と、一枝を問い詰めている。

小林がいなくなった結果として、「小さな学校」は教師を失った。それ以降、富本一家が東京に移住するまでのあいだ、少なくとも一年間、あるいはそれ以上の期間、学習の機会が陽と陶に与えられることはなかつたものと思われる。というのも、いまのところ、それを明示する痕跡や資料を見出すことができないからである。

富本家の東京移転を知るうえで、残されている唯一ともいえる具体的な資料は、一枝が一九二七（昭和二）年の『婦人之友』の正月号に寄稿した「東京に住む」である。ここに一枝はどう書いているのか、検討しなければならない。一枝は、「思へば一九二六年の早春

から、如何に私達が悩み多い日を送つて来たことか」<sup>101</sup>と述懐する。そして「東京に住む」の冒頭において、一枝はこのように書く。

いくどか廻り来た大和國の四季に、住馴れた私達が、東京に移り住むやうになつたそこには様々の理由があつたが、そのなかでも特に大きく強い事柄があり、むしろ様々の理由といふよりそのこと一つが根本的の動きであつて、それ以外の私共のいふ理由は枝葉の問題に過ぎないが、その根本の問題にふれることは家庭的のことで、今は書くことがゆるされない。かいつまんで云ふなら人間同志のなかに必ずかもされる危機、その危険期に私達も亦等しく陥つた。さうして久しい間そこに悩み、嘆き、かなしみ、ありだけの人間らしい悲痛の感情の幾筋かの路を味ひ過ぎた。さうしてどうにかしてその境地から匍ひ出し、今後の生涯を立派に生き抜かうと決心し、そのためにこれまでの境遇、生活を見事にぶち破つて新しい生活を築きたてたいと思つた [.] その結果へ枝葉の理由が加へられ、東京に住むことゝなつた<sup>102</sup>。

一枝は、東京に移り住むようになった理由には「特に大きく強い事柄」である「根本の問題」があつて、それについては「家庭的のことで、今は書くことがゆるされない」という。この言葉は、自分のセクシュアリティについていまはカミング・アウトすることはできないという意味のことをいっているのであろうか。「どうにかしてその境地から匍ひ出し、今後の生涯を立派に生き抜かうと決心」ともいっているが、これは、転地による療法を暗に指しているのではあるまいか。小林が去つても、問題が根本的に解決したわけではなく、次の新任教師と同じ関係が生じる可能性も排除できないし、さらには、これから以降も奈良女高師の女学生たちが、一枝の魅力に惹かれて集まってくる可能性も、全く否定することができない。そう考えれば、一枝の性的指向を再度惹起させないためには、前回東京から安堵村へと転居したように、転地しか、道はない。荷造りがはじまつた。

かうして幾十日か過ぎた。自分に頼む心の弱々しさを知らねばその間すら過すことが出来ない程もろい自分であつた。夫に勵はげまされ、荷をつくりかけてみてすら、さて何處に落着くかその約束の地を見ることが出来なかつた。夫の仕事のためには陶器を造るために便宜多い土地を撰定しなければならなかつた。土を得るに、磁器の料を採るために、松薪を求めるためにも、その他仕事する上には繪を描く人、文筆をとる人々のやうに軽らかに新しい土地に轉ずることは出来ない色々の困難があつた<sup>103</sup>。

「夫に勵はげまされ」、荷造りをしているところから判断すれば、憲吉の一枝に対する同情の気持ちが見えてくる。一方の一枝は、転地先を選ぶにあたって、製陶に必要な薪や土などの入手に際しての利便性について憲吉を思いやる。そうした夫の仕事上の特殊な条件を考えると、落ち着くべき約束の地がなかなか見つからない。それに、娘たちの今後の教育のことも、考慮に入れる必要があつた。一枝は、こう続ける。

夫の仕事のことだけを念頭に置いてゆくなら、琉球にでも北部朝鮮にでも、九州の山深くある片田舎にでも容易に決定することが出来た。さうして私は夫を愛してゐる。

その仕事を思ふことは夫についてあるものである。しかしながら、すでに女學校へ入學しやうとする程たけのびた上の子供、まもなく姉の後につかうとする妹兒 [、] それも四 [、] 五年の間家庭にあつて特殊な方法で教育されて来た子供達であつたから、今後の教育方法について考へることが實に多かつた<sup>104</sup>。

解決すべき問題が複雑に絡みあっているのである。なかなか結論へはたどり着けない。話しあう場を変えるために、山陰の奥の湯宿へ向かった。

夫は夜は荷をつくり晝は生活費を受るために土をのぼし呉州をすり、つめたい素焼の壺を膝にのせたり、窯に火を投げた。さうして少しの金を得たので、私達はいよいよ最後の決心をつけるために何處に居住すべきかを決めるために、その金をもつて短い間の旅ではあつたが秋はじめ山陰の奥まで出かけて来た。古風な湯宿で過した十日程の日數、しかしそこでもまだあざやかな決心がつかかねたまゝ再び悩み深い歸路をとらねばならなかつた<sup>105</sup>。

場所を変えて話しあつても、どこへ転居すればよいのか、決心がつかない。さらにそのうえに、「金の問題と、子供を無駄に過させてゐる心配、生活に落ち着きのないところからくる焦燥」<sup>106</sup>が一枝の心に重くのしかかる。ついに一枝は、そのとき神を見た。

神を見る心、ひたすらに信頼する世界、祈り、これを失してゐたことがすべての悩みの根源であることを強く思つた。私は自分の心を捨てゝ神の意志を尊く思ひ、そこで新しく生まれてこない限り自分達の生活は何度建て直しても駄目であることを知つた。

こゝに歸依したことは同時に小さい自我を捨てたことである。世界が限りなく廣く私達の前に幕をあげた<sup>107</sup>。

ここに至つて一枝は、宗教心に歸依した。すでに述べているように、息子の精神的不安定を心配した中江百合子は、当時教会に通つていた。一枝は、自分の悩みを中江に打ち明けて、一緒に教会に足を運んだのではないだろうか。一九一四（大正三）年発行の当時の新約聖書「ロマ書（ロマンへの書）」（現在訳の「ローマンへの手紙」）第一章の第二六節と第二七節には、同性愛について、こう書かれてあつた。

二六 之によりて神は彼らを恥づべき慾に付し給へり、即ち女は順性の用を易へて逆性の用となし、二七 男もまた同じく女の順性の用を棄てて互い情慾を燃し、男と男と恥づることを行ひて、その迷に値すべき報を己が身に受けたり<sup>108</sup>。

また、異性装については、舊約聖書「申命記」第二二章第五節に、こう書かれてあつた。

五 女は男の衣服を纏ふべからずまた男は女の衣裳を着べからず凡て斯する者は汝の神エホバこれを憎みたまふなり○<sup>109</sup>。

一枝は、聖書のこれらの言葉を信じた。こうして一枝は、憲吉とともに、考えに考えを重ね、疲労と涙にあえぎながら、最後には神の存在に気づくことによって「神の意志を尊く思ひ」、「自分の心」や「小さい自我」を捨て、眼前に広がる新しい世界にとうとうたどり着いたのである。ついに、新しく生まれ変わるべく「生活の建て直し」の道が開いた。

そこで、陶器を焼くためには不十分でありむしろ不適の土地ではあるが、それでも焼いて焼けないことはあるまい。要は制作するものゝ心の持方一つである。ただ材料その他の點の不足は物質で解決がつくことだから、仕事のために助力してくれる人があるなら必ず焼いてみせるといふ夫の話も、その人を得て、それでは子供のためにも都合よく行くし、また自分達にしても決して好んで住みたい土地ではないが、欠點だらけな人間の性質は同様その弱點をもつ人間社會の中に飛び込んでお互にもまれ合ひ争闘しあひ相互扶助しあつて、はじめて完全に近いものともならう<sup>110</sup>。

そういう思いに至るなかから、生活再生のために落ち着くべき約束の地として、最終的に東京が選ばれた。幸い、憲吉へ資金を援助してくれる人たちも見つかった。子どもたちは、中江家の子どもたちと同じく、成城学園に入れることにした。それでも心配なのは、人が多く集まる東京の地で、根本となる問題は再燃しないのであろうか。「欠點だらけな人間の性質は同様その弱點をもつ人間社會の中に飛び込んでお互にもまれ合ひ争闘しあひ相互扶助しあつて、はじめて完全に近いものともならう」——こう信じるほかなかつた。

一枝の、この「東京に住む」のなかに、わずかではあるが、自分のセクシュアリティについて間接的に言及している箇所がある。そのひとつが、こうした文言である。

この久しい間の争闘、理性と感情この二つのものはいまだにその闘を中止しようとはしない。そうしてそのどちらも組しきることが出来ない人間のあはれな煩悶を冷酷にも見下してゐる。平氣である感情に行ききれないのは自分が自分に似合はず道徳的なものにひかれてゐるからで、といて理性を捨切つて感情に走ることをゆるさないのは根本でまだ×に對して憎悪や反感と結びついてゐるために違いない。……本當にこの心の底には憎悪しかないのか、それでは偽だ。あんまり苦しい<sup>111</sup>。

この文章を読み解くうえで最大のポイントとなるのは、伏字となっている「×」にどの一字をあてるかということになろう。あえて「性」をあててみたい。自分のセクシュアリティを憎悪する。しかし、それだけでは、偽りであるし、あまりも苦しすぎる。ここに、セクシュアリティの解放を巡る理性と感情の激しい対立の一端をかいま見ることができよう。自己の特異なセクシュアリティに向けられた憎しみと、憎みきれない苦しみとが、混然一体となって一枝の心身を襲う。一枝が神を見るのは、そのときのことであつた。

別の箇所には、こうした文言も見出すことができる。

かつて若かつた頃、なにかにつけて心の轉移といふ言葉を使つたものであるが、まことの轉移といふものは、並大抵の力では出来るものではなく、身と心をかかまでも

深く深く痛め悩まして、身をすてゝかゝつてはじめて出會ふものであり行へるものであることを沁染と知ることが出来た<sup>112</sup>。

一枝は「心の轉移」という言葉を用いている。一枝が、自身を女性間の同性愛者（当時の通称では「レスビアン」など）として認識していたとすれば、彼女にとってこの言葉は、同性愛から異性愛へと性的指向を「轉移」させる試みを示唆する心的な用語法だったのかもしれない。それとは違って、一枝が、肉体的には明らかに女性でありながらも、心の性を男性として自己認識するトランスジェンダー（当時の通称では「男女」など）であると思っていたとするならば、この言葉は、心の性を体の性へと「轉移」させことを意味する彼女の内に秘められたキーワードだったにちがいない。しかし、どちらにしてもそれは、「並大抵の力では出来るものではなく」、過度の心身の葛藤と衰弱を伴うものであった。

この東京移住は、ふたりにとって、まさしく二度目の賭けであり、もはやこれ以上はない背水の陣とでもいえる、生活の再生へ向けての悲壯感漂う、療法としての転地だったものと思われる。それにしても、あまりにもあっけない安堵村での生活の終焉であった<sup>113</sup>。

かくして、一九二六（大正一五）年の一〇月の半ばを過ぎたある日、一家は、四人それぞれが深刻で複雑な思いを胸に抱えながら、本宅の「舊い家に母を残し、私達の小さい住居の庭木の一本一本にも挨拶の言葉をかけ、美しい遠山をめぐらした平原のなかの暖い小村、土塀と柿の木の多い安堵村」<sup>114</sup>をあとにし、東京へと上っていった。おおよそ一年半の安堵村生活であった。このとき、満年齢で憲吉四〇歳、一枝三三歳、陽一一歳、そして陶は、まもなく九歳になろうとしていた。東京から安堵村に来たときには、一枝のお腹には陽がいた。今度の上京には、まもなく生まれてくる壮吉が一緒である。大正から昭和へと改元される二箇月ほど前の秋の日の出来事であった。

## 第六章 東京に住む

### ——ひとりで祖師谷に行ってはいけないよ

一九二七（昭和二）年一月刊行の『婦人之友』（第二一卷第一号）を開くと、平塚らいてうの「砧村に建てた私たちの家」と富本一枝が書いた「東京に住む」が偶然にも一緒に掲載されている。らいてうは、一九一一（明治四四）年に『青鞥』を発刊して以降、婦人運動の分野で積極的に行動し、常に世間からの注目を浴びていたし、手紙のやり取りや安堵村訪問を通じて、しばらく途絶えていた一枝との交流も、再開されていた。

らいてうは、長女の曙生<sup>あけみ</sup>を一九二三（大正一二）年の春に、長男の敦史<sup>あつぶみ</sup>を翌年の春に、牛込原町の成城中学校の敷地内にあった成城小学校に入学させていた。校長が沢柳政太郎で、主事が小原国芳であった。その小学校が、一九二五（大正一四）年に牛込から砧<sup>きぬた</sup>村に移ることになり、それにあわせて、らいてう一家は、この地に家を建てたのであった。らいてうはこう回想する。「当時の砧村は、高台一帯が赤松林と草っ原で、萩や芒や葛などが生い茂る、文字どおりの草分けの地でした。番地こそあっても、あたりは野原のなかの一軒家で、小田急の成城学園駅は……家の窓からプラット・ホームと改札口が一目で見渡せます」<sup>115</sup>。

一枝の娘の陽と陶も、成城学園へ転入した。陽と同学年だった井上美子は、後年『私たちの成城物語』のなかで、このように振り返っている。「富本家は、昭和二年に小田急線が開通する一年近く前、郷里の大和安堵村から家族とともに上京、窯を祖師谷の丘に築く準備をされた。住居と窯ができ上がるまでのしばらく、高田馬場の線路の近くに仮住居があった。長女陽、次女陶の姉妹が成城学園に入学、目白に家があった私とは、毎日電車の時間を決めて一緒に通学していた」<sup>116</sup>。いよいよ新居が完成し、富本一家は、高田馬場の借家から千歳村へと引っ越した。建築地は、「東京市外北多摩郡千歳村下祖師谷八三五」であった。井上美子の回想はさらに続く。「小田急線開通の晩夏、昭和二年にわが家が建ったのと同じころ、富本家の新居と窯も完全に完成して北側の奥、成城田んぼの突き当たりの丘に移られた。その年生まれた壮吉君と、一家は五人に増えていた。陽ちゃんと私もこの年の三月小学校を卒業して女学校一年となった」<sup>117</sup>。小田急線が開通したのも、成城学園女学校が創設されたのも、この一九二七（昭和二）年の春のことであった。

中江百合子と三人の息子たちは、らいてう一家や富本家よりも一足先に成城の地に引っ越してきており、借家住まいをしていた。のちに三男の昭男は、同じくこの時期の成城への移住者であった植村家の娘の泰子と結婚する。こうして中江家の嫁となった泰子は、さらにそののちに執筆する井上美子との共著の『私たちの成城物語』のなかで、そのころの様子について、このように語っている。「中江家が借家住まいをやめて、いよいよこの地に土地を買って求め家の新築に取りかかることにしたのは、私が成城小学校に入学したころである。まだまだ空き地は沢山あったが、舅が決めたのは成城もはずれの雑木林と竹藪の二千坪ほどの土地……田んぼをはさんで祖師谷寄りの高台には、手を振れば見える距離に大和の安堵村から上京された富本憲吉氏の家がある」<sup>118</sup>。

このように、この時期の成城地区は、雑木林と田畑に囲まれた武蔵野の面影がいまなお残る自然環境を背景として、成城学園の移転や小田急線の開設に伴いながら、新しい文化

人村としてその姿を現わそうとしていたのであった。

千歳村での新生活がはじまって一年が過ぎようとしていたころ、長谷川時雨が主宰する『女人藝術』の創刊が進められていた。創刊にあたって長谷川は、かつての『青鞥』の社員にも、協力を求めたものと思われる。神近市子はこちら振り返る。「世田谷のボロ家に、ある日、長谷川時雨女史が生田花世女史を伴って来訪され、婦人が作品を発表するための文芸雑誌をつくりたいが協力してくれないか、といわれた。私には『青鞥』や『番紅花』の思い出や経験があり、一も二もなく賛成した」<sup>119</sup>。さらに続けて神近は、この『女人藝術』を次のように振り返る。「『女人芸術』は、昭和三年七月に創刊された。編集会議は長谷川女史のお宅で開かれ、資金面は夫君の三上於菟吉氏がカバーしてくれた。当時の婦人文筆家で、この雑誌に執筆しない人はいないだろう。表紙も絵も女流画家に依頼し、創刊号の巻頭写真にはソ連に旅行中の中条（宮本）百合子の近影が選ばれた。私は山川菊栄女史といっしょに、主として評論を書いた。林芙美子が『放浪記』を連載して一躍流行作家の列に入り、上田（円地）文子が戯曲『晩春騒夜』を発表して小山内薫に認められたのもこの『女人芸術』である。この雑誌では、上記の人々のほかに生田花世、岡田禎子、板垣直子、大田洋子、中本たか子、矢田津世子、真杉静枝らが活躍した」<sup>120</sup>。

まだ一歳半にしかならない小さな壮吉を抱えながらも、一枝もまた、この雑誌の創刊に協力したにちがいない。そしてそれ以降、関係方面への運動資金の提供容疑で検挙されるまでの約五年間、『女人藝術』以外にも、『火の鳥』や『婦人公論』において、短編の小説や評論文を発表した。また、『婦人画報』に目を向けると、一枝が関係した座談会形式の記事が掲載されている。一方、『東京朝日新聞』へは書評を寄稿し、「女性のための批判」というコラムも担当した<sup>121</sup>。

安堵村にいるときは、一枝は、自分のセクシュアリティについての苦悩について書き、その一方で、それをいやすかのように自然の美しさや子どもの純真さをたたえる文を書き、加えて小説「貧しき隣人」や「鮎」を執筆していた。しかし、千歳村に移ると、そうした傾向の文章は影を潜め、時代の潮流に乗るかのように、徐々にプロレタリア文学に惹かれていった。

一九三三（昭和八）年八月一三日の『週刊婦女新聞』の「富本一枝女史検挙——警視廳に留置、転向を誓ふ」という見出し記事によると、一枝の検挙の理由は、「湯浅女史を中心とする女流作家の左翼グループの一員として約百圓の資金を提供した事」であった。この記事を読む限りでは、確かに、執筆活動やその他の支援活動は、検挙の主たる理由とはなっていないが、同年八月一九日の『讀賣新聞』には、「すべてを認めたいへ従來の行動一切の清算を誓約した」と書かれている。そこで、参考までに、検挙に至るまでの一枝の主だった「従來の行動」について、ここで少し描写しておきたいと思う。

東京に移転してのちの一枝は、徐々にプロレタリア文学に傾倒してゆく。一九二九（昭和四）年七月号の『女人藝術』に寄稿した「夜明けに吸はれた煙草——一九二九年の夢」は、マルクス主義へ足を踏み入れてみたいという誘惑に駆られながらも、躊躇して思いとどまるという、いまだ思想的に混乱した一枝の心的風景を描写した最初期の作品であった。次の一九三〇（昭和五）年九月号の『火の鳥』に掲載された短編小説の「米を量る」は、当時プロレタリア作家に求められていた生活感や社会観が直接的に投影された生硬な内容となっていたし、同年一月号の『婦人公論』掲載の批評文「共同炊事について」も、「米

を量る」と同じく、幾分表層的な認識に止まり、社会革命と同時に家庭革命が必然的に起きることを前提に、解放された婦人による共同炊事が近づいていることを楽観的に展望するものとなっていた。次の年の一九三一（昭和六）年に一枝が発表した作品は、『火の鳥』四月号に寄稿した短編小説「哀れな男」と『女人藝術』七月号に掲載された批評文「女人藝術よ、後れたる前衛になるな」の二編であったが、明らかにどちらも、さらに色濃くマルクス主義的な思想傾向が全面に出ていた。

一枝のマルクス主義の「階級的視点」から書かれた小説や批評文は、以上に紹介した五編が、おそらくそのすべてであったと思われる。そして、一九三一（昭和六）年七月号の『女人藝術』に掲載された批評文「女人藝術よ、後れたる前衛になるな」が潮目となって、これ以降、検挙されるまでの約二年間に書いたものは、すべて座談会形式での発言か、新聞紙上の書評ないしは短いコラム記事で、明白な思想的な観点に立って構成された本格的な小説あるいは批評文の執筆から一枝は完全に距離を置くことになる。どのような理由によるものか、それはよくわからない。官憲によるマルクス主義への弾圧を恐れた結果だったのかもしれないし、あるいは、自らの文学的ないしは思想的能力を確信することができない表われだったのかもしれない。

そうしたなか、一九三〇（昭和五）年一月、高群逸枝は平塚らいてうとともに無産婦人芸術連盟を結成した。らいてうは、そのときの様子を、自伝『元始、女性は太陽であった③』のなかで、こう回顧する。

昭和五年に、わたくしは高群逸枝さんの呼びかけをうけて、高群さんを中心にして結成された「無産婦人芸術連盟」のメンバーに加わりました。……その機関誌として、雑誌「婦人戦線」第一号が、この年の三月号から刊行されました。……無産婦人連盟の綱領は、次のようなものでした。

- 一 われらは強権主義を排し自治社会の実現を期す。標語 強権主義否定！
- 二 われらは男性専制の日常的事実の曝露清算を以て、一般婦人を社会的自覚にまで機縁するための現実的戦術とする。標語 男性清算！
- 三 われらは新文化建設および新社会発展のために、女性の立場より新思想新問題を提出する義務を感ずる。標語 女性新生！

そのころ——いいえ、その後も終始、高群逸枝さんほど、わたくしを惹きつけたひととはありません。ただ、もう無性に好きなひとでした<sup>122</sup>。

このときらいてうは、高群のもつ人間としての情熱の豊かさ、感情表現の自由さに魅了された。それは、青鞥時代の紅吉（一枝）がもっていた魅力と、どこか通底するところがあった。らいてうは、続けてこう書く。

高群さんを発見したよろこびのあまり、そのころわたくしが手紙形式で描いた文章——それは名前は出していませんが、宛名に富本一枝さんを想定したものでした——のなかで、こんなふうに言っています。

「わたしはまあなんと高群さんを知ることが遅すぎたのでせう。この国に、しかも同性の中にかういふ人があられたとは。わたしの心はまるで久しく求めて、求めて求

め得なかった姉妹を今こそ見出したやうな大きな悦びに波打つてみます。そしてそれはどうやら十数年前、あなたをはじめて知った時のわたしのあの悦びと好奇心とにどこか似通うもののあるのを感じます。……」<sup>123</sup>。

らいてうは、ここではっきりと、青鞥時代に「あなたをはじめて知った時のわたしのあの悦びと好奇心」に触れ、それがいまや高群に向っていることを告白する。振り返ると、当時紅吉（一枝）は、新聞記者の質問に答えて、こういつている。

紅「煤煙を通じて平塚の性格をみますと或る微妙な點が私と似通つたところがあるのです、世間の人から見ると一寸不思議に思へるやうな興味を持つてゐるやうですから會つて見ると果たしてさうでした」

記「その興味といふのは例へばドンナものです」

紅「それは今は言へません、私は子供の時分から面白い氣分を持つてゐますが夫れは自ら獨り楽しむ氣分であつて決して口に出して話す氣分ではないのです、死ぬる時に遺言状の中には書くかしれませんが」<sup>124</sup>

ここで注目すべきことは、紅吉は、らいてうが、自分と似通つた、「世間の人から見ると一寸不思議に思へるやうな興味を持つてゐる」ことをはっきりと見抜いていることである。そして自分については、「子供の時分から面白い氣分を持つてゐます」という。らいてうに備わる「興味」と紅吉が有する「面白い氣分」——これは、性に対する同質の心的認識が両者に存在していることを指しているのではないだろうか。十分な証拠がないままの、少々独断的な見立てになるかもしれないが、らいてうにも、紅吉と同じように、身体的には女でありながらも、心の性としては、極めてあいまいながら、十割とはいわないまでも数割程度は「男」を自認していたのではあるまいか。もしこの判断が正しいければ、らいてうと紅吉のあいだには、性自認における「男」同士の恋愛関係、つまりは、疑似的男色の関係が成立していたことになる。つまりこの場合、外見的には「女性間の同性愛」に見えても、実質においては、「男性間の同性愛」に近いものが発現されていた可能性が残る。そのように考えてゆくと、一枝の性的指向には、性自認を「女」とする女性へ向けられる性愛の場合と、性自認を「男」とする女性へ向けられる性愛の場合とのふたつの方向性が混在していたことになる。前者が、小林信、横田文子、大谷藤子のような人たちとのあいだにみられるもので、一枝の性自認の観点に立てば「異性愛」の関係になるであろうし、他方後者が、平塚らいてう、深尾須磨子、軽部清子のような人たちとのあいだにみられるもので、一枝の性自認の観点に立てば「同性愛」の関係になるであろうか。もっとも、実際の性自認や性的指向というものは、このように安易に類型化できるものではなく、そのときの状況に応じて複雑で越境的な動きをするのかもしれないのではあるが。

「無産婦人芸術連盟」の結成にかかわつた高群逸枝とは別に、当時、無産婦人の労働者としての意識を覚醒させる教育と組織つくりとに携わつていた帯刀貞代は、一枝との出会いを次のように振り返る。

私が富本さんにはじめておめにかかつたのは、昭和のはじめだった。そのころ私は

江東の亀戸で、女子労働者のためのささやかな塾をひらいていて、富本さんは神近市子さんを誘って、そこをみにこられたのだった。

そのつぎのあざやかな記憶は、昭和大恐慌のさなかで、塾にきていた女子労働者たちの六十日にわたる合理化・工場閉鎖とのたたかいが惨敗したあと、こんどは、こちらから富本さんをお訪ねしたときのことである。……まだそのころ丘の上にただ一軒しかなかった富本さんの家は、空気も樹木も、花の色もキラキラ輝いてみえた。それいご四十年ちかく、病弱な私は言葉につくせないお世話になった<sup>125</sup>。

一九三一（昭和六）年四月のある夜のことであった。前年の七月に、当時の共産党中央委員会の命令のもと非公然とソ連に渡り、モスクワで開かれたプロフィンテルン（労働組合国際組織）の第五回大会に出席したのち、党の事情でそつこの二月に日本に帰ってきていた蔵原惟人が、村山<sup>かずこ</sup>籌子の案内で、畑のなかの暗い道を通して密かに富本家を訪れた。蔵原は、当時の日本にあってプロレタリア文化運動を理論面で支える中心的な人物であった。一方、蔵原を富本宅へ案内した村山籌子は、舞台芸術の演出家の村山知義の妻であり、当時童話作家で詩人として活躍していた。おそらく『女人藝術』を通じて、一枝と籌子は親しくなっていたのであろう。もっとも、籌子の最初の富本夫妻との出会いは、羽仁もと子が園長を務める自由学園高等科の一期生として関西へ卒業旅行に出かけたおりに、安堵村の富本家を訪問したときのことであった。蔵原は約一箇月間、富本家にかくまわれた。後年、そのときの様子を、こう回想する。「富本さん夫婦は心よく私を迎え入れ、とくに私のためにお嬢さんの使っていた一室をあけて下さった」<sup>126</sup>。さらに蔵原が回想するところによると、帯刀貞代が「数日間この家に泊まっていた。……私は警戒する必要はなかった。しかし貞代さんは『あまり長居をすると御迷惑をかけるから』とって帰っていかれた」<sup>127</sup>。滞在の目的は、闘争敗北の報告だったのであろうか。あるいは、闘争後の心身の疲れを回復させるための滞在だったのかもしれない。

村山知義の二度目の収監が、一九三二（昭和七）年の二月で、蔵原惟人が獄窓の人になるのが、同年の七月のことであった。そして、次の年（一九三三年）の二月二〇日に、今度は小林多喜二が逮捕され、同日、拷問により死亡する。当時のプロレタリア文化運動にとって、最大の受難の時代であった。

この時期一枝は、『東京朝日新聞』において書評を書き、「女性のための批判」というコラムも担当した。書評としては、一九三三（昭和八）年三月二五日に、文化学院教授の河崎なつの『新女性讀本』（文藝春秋社）をとり上げている。「女性のための批判」というコラムには、続く五月八日に「轉落の資格 毒煙と三井と三菱と」を、五月一五日に「心を打たれた二つの悲惨事」を、五月二二日に「膽のすわり 犯罪にも明朗性」を、五月二九日に「生活苦諸相 生きるための罪々」を、そして六月五日に最後となる「男爵夫人 馬鹿さを持つ女性」を書いた。

それからちょうど二箇月後の八月五日、官憲の手により一枝は連行される。一九三三（昭和八）年八月一三日の『週刊婦女新聞』は、「富本一枝女史檢舉——警視廳に留置、転向を誓ふ」という見出しをつけて、次のように報じた。

青鞞社時代の新婦人として尾竹紅吉の名で買った現在女流評論家であり美術陶器製作

家富本憲吉氏夫人富本一枝女史は過日來夫君と軽井澤に避暑中の處、去る五日單身歸京した所を警視廳特高課野中警部に連行され留置取調べを受けてゐるが、女史は先週本欄報道の女流作家湯浅芳子氏と交流關係ある所から、湯浅女史を中心とする女流作家の左翼グループの一員として約百圓の資金を提供した事が暴露したもので、富本女史は野中警部の取調べに對して去る七日過去を清算轉向する事を誓つたと<sup>128</sup>。

一枝と湯浅芳子が、面識をもつようになったのは、ほぼ間違いなく『女人藝術』を通じてのことであつたろうと思われる。当時、『女人藝術』は、文学を志す女たちのマルクス主義を介する人間關係の構築の場となつていたようである。一枝と湯浅のふたりが運動資金を巡つてどのような政治的友好關係にあつたのか、さらには、ふたりに共通していたであろうセクシュアリティの問題について、兩人がどう胸を開いて語つていたのか、資料上何もわからない。その一方で、この時期一枝が教会に通うことを示す資料も残されていない。当時の思想上の関心が教会を遠ざけてしまつたのか、あるいは、宗教では自分の心的問題は解決されえないことを悟つたために足が遠のいてしまつたのか、その理由に関してもまた、想像するしかほかない。いずれにせよ、固く誓つて禁じていた、美しく才能ある女性へ向かう関心が、このころから再燃するのである。つまりは、『女人藝術』は、マルクス主義に立つて人間の解放と改革を目指す文学への確信を一枝に芽生えさせる土壌になつただけではなく、その一方で、大変皮肉なことに、女性が多く集まる空間だつたがゆえに、一枝が抱えるセクシュアリティの問題を結果的に誘発する場ともなつたのであつた。

『女人藝術』を主宰し、引き続き『輝ク』の刊行に尽力した長谷川時雨が、一九四一（昭和一六）年八月に亡くなつた。その後、近代文学研究者の尾形明子は、『女人藝術』を調査するうえから、この雑誌の編集に携わつていた熱田優子に聞き取りを行なう機会をもつた。以下は、尾形が聞き書きした、一枝に関する熱田の発話内容である。

すらつとしていたけれど筋肉質でしっかりした体型でね。芸術家の奥さんというより、富本さん自身が芸術家。着物をきりつと粋に着こなして、感性が鋭くて趣味もよかつた。……女の人が好きで、横田文子がかわいがられていたわね。それで長谷川さん、私たちにひとりで祖師谷に行つてはいけないよつて言つていたけど、大谷藤子さんも親しかつたのではないかしら<sup>129</sup>。

上の発話内容は、熱田と尾形のふたりが伝達者として中間に入つており、いわゆる「伝言ゲーム」の危険性が全くないわけではないが、それでも、もし長谷川が、「ひとりで[一枝の自宅のある]祖師谷に行つてはいけないよ」といつて、生前に周囲の人間に注意を促していたことが本当に事実であるとするならば、一枝のセクシュアリティは、すでに「公然の秘密」となつていただけではなく、美貌と才能をもつ女性にとっては、「危険な存在」になつていた可能性さえ残る。

前章においてすでに引用のかたちで紹介しているように、確かに一枝は「東京に住む」の文中で、「こゝ[神]に歸依したことは同時に小さい自我を捨てたことである」と書いた。しかし、「小さい自我」は、間違いなく生き残つていたのである。

## 第七章 転向を誓う

——そうした化粧の乙女を見たいと希つて、夜な夜な街を歩く

一九三三（昭和八）年八月の検挙をひとつの境として、一枝の書く文章から政治色が消え、座談会の集録記事での発言、新聞のコラム記事、それに加えて、特徴的なことに、特定の女性についての人物評が増えていった<sup>130</sup>。

一九三四（昭和九）年の秋季皇霊祭の日（現在の秋分の日）の午後、『婦人画報』の企画により、平塚らいてうの夫の奥村博史のアトリエを会場として、奥村家の家族（四名）と富本家の家族（五名）、それに洋画家の安宅安五郎の娘の良子も加わり、「家族會議」が催された。安宅安五郎は、一枝の妹の福美の夫である。奥村家の長女曙生と富本家の長女の陽は、成城学園の小学校で同学年であったが、ともに成長し、曙生は小学校は成城、女学校は自由学園、そしていまは東洋英和の幼稚園師範科に通い、陽は小学校も女学校も成城、日本女子大学を中途退学後、いまは文化学院の高等部に在籍していた。この日の「家族會議」は、「今日は曙生ちゃんや陽子ちゃんの職業や結婚に對するお考へをうかゞひその考へ方の基礎になつてゐる教育、学校教育や家庭教育も一應検討し、一方お父様お母様の御意見もうかゞひ度いと思います」<sup>131</sup>という、記者からの導入の言葉ではじまった。座談会の内容は横に置くとして、特筆すべきは、その座談会の終わり方である。以下のような一枝とふたりの娘の言葉のやり取りで終わっている。何か締めりの悪い幕切れの観は拭えないだろう。

富本夫人 お母さんなんか何時も自分は母親の資格がないと思つて——。

陶子 お母さんつたら何時もあんなことを云ふんだもの——。

陽 さう云はれたら子供はどうすればいゝの——。

記者 ではこれで——どうも色々有難うございました<sup>132</sup>。

すでに述べているように、大和時代、一枝は、このときと同じように、「自分は母親の資格がない」ことをしばしば口にしていた。この座談会での最後の発話は、そうした意識が一枝から消え去っていないことを示している。こうした言葉がもたらす子どもたちの困惑は、極めて大きいものがあつたにちがひなかつた。

母親に対する困惑は、翌年（一九三五年）の『行動』（第三卷第三号）の三月号に陽が寄稿した「明日」にもよく表われている。これは、自伝的な小説の形式をとっており、「瑛子」が陽自身であろう。そのなかに、このような表現箇所がある。

二十いく年か前、「新しい女」と世間からはやされた女達の、なかでもジャーナリズムが持ちあげた代表的數人のうちの一人を瑛子は母にしてゐた。そのペンネームが男のやうな變つたものであつたせいか、その時代のひとを親に持つ友達から瑛子は「あなたのお母さんは×××吉とおつしやつたんですね」といふやうにきかれる事がたびたびであつた。……女学校の若い國語の教師が授業中、瑛子の母のことを矢張りきき嚙りのまゝにふりまはす時など瑛子は消え入りたいほどの思いであつた。……男ものゝと間違ふやうな着物にセルの袴といふいでちでそこいら中をのし歩いてゐたと

いふその教師の言葉で母の姿を想像して情けながる瑛子に同情する友達もあつた<sup>133</sup>。

この「明日」を読む限りでは、「瑛子」は、教師が発する言葉を聞いて、かつて母親が衣装や筆名に表わした異性性に当惑はするものの、しかし、そうした性別表現が明示する母親のセクシュアリティに関する問題にまで思いが至っている様子はない。

さらにその年の暮れ、『讀賣新聞』の記者の質問に対して、陽は、母親（一枝）については、「とても女らしい人で、割合に気が弱く臆病で想像とは反対です……ある点まで判つてそこから先が判らない…… [若いころ] あんな出発をした人が今は決して新しい人でないことは瞭りしてますね」と答え、両親（憲吉と一枝）については、「ああ云ふ懸け離れた特別な人達が普通の結婚生活をして家庭を共にするのは難しいのぢやないかと思ふんです」と語り、そして自分については、「私なんかいゝ貞淑な世話女房になれゝばいゝと思ひます、反動なのかも知れませんが。だからものを書くのも自分のためにもなり、好きも好きでやるので決して職業的にする気はありません。結果的に同じことになつても心持の上ではね」と話している<sup>134</sup>。

次の年の、一九三六（昭和一一）年の『婦人公論』三月号に目を向けると、座談会とは異なる、これまでにない新しい形式の企画が掲載されている。「働く婦人と離婚の問題」という課題に対して、司会の嶋中雄作が、出席している一二人の婦人を順に指名して、即興的に感想を述べさせるという形式であった。参加者の一二名のなかには、今井邦子、宇野千代、奥むめお、市川房枝が含まれていた。一枝は六番目に指名された。与えられた課題についてのこのときの一枝の返答の一部は、次のようなものであった。まず、妻として。

私はやつぱり自分の夫が、たとへばシャツのボタンが除れてあたりすることは自分の恥だと思ひます。それから皺しわになつたハンカチをポケットから見つけた時にはやつぱり自分の恥だと思ふんです<sup>135</sup>。

母親としては、あるいは家族の一員としては、どうだろうか。

それから子供に対しては、自分としてはおそらく一杯の力でやつてるんです、子供に淋しい思ひをさせたくないといふことで。もちろん私は仕事をもつてゐなかつたものですから、たとへば小説を讀むとか、ちよつとしたものを書くとかいつてもそれはすべて家の中だけで出来たことですから、さう皆さんの思つてゐらつしやるやうな苦しみはなかつたんですけれども、それぢや家の中で自分が家族の一人として、妻君としてちゃんとやつているかといへば、どこか自分は變つた人間で、なにか申譯ないやうな気持ちが終始してゐるものですから、さういふ點でいつも變な気持ちになつてばかりゐたんです<sup>136</sup>。

上のふたつの引用から読み取れることは、良妻賢母にかかわる一枝の全き精神であろうか。しかし、「どこか自分は變つた人間で、なにか申譯ないやうな気持ちが終始してゐる」という言葉に隠されている内容は、何だろうか。自分のセクシュアリティにかかわることであろうか。具体的には何も伝わってこない。続けて一枝は、このようにいう。「子供に

對しては一生懸命で、自分の夫に對しても一生懸命で、それで濟めばいゝんですけど、その上自分に對しても一生懸命というやうな氣持がいつもついて廻つてゐる。これを捨てきらうと思つてどれだけ苦勞してきたかわからないんですけど、どうしても殺しきれなくて……」<sup>137</sup>。一枝が「殺しきれなくて」心身にいまだ宿している願望や欲求のやうなものとは、一体何なのであろうか。本格的な小説を書くことであらうか。あるいは、マルクス主義のことであらうか。ここからは特段何も読み取れない。しかし、続けて一枝は、このようにいう。「……と云つて、それぢや他のものを少々削つたらよからうと思ふんですけども、それがさつき言つたやうにボタンが一つ除ててみても自分の責任のやうに思ふと來てるもんですから今はもう首でも縊らなきや始末がつかないやうな氣持で……」<sup>138</sup>。ここまで読むと、「殺しきれなくて」と一枝がいつている言葉の意味は、実は、女性が女性を愛する性的指向のことではないかとの思いが一瞬脳裏をよぎる。つまり、「ボタンが一つ除ててみても自分の責任のやうに思ふ」氣持が邪魔をして、「自分に對しても一生懸命というやうな氣持」、つまり「殺しきれなくて」自分の心身を強く支配する性的指向に、素直に向き合うことができないいらだちを暗に告白しているのではないだろうか。もしこの判断が正しいとするならば、小説執筆の願望も、マルクス主義への憧憬も、いずれもこの段階で、すなわちプロレタリア文学の衰退と軌を一にして、一枝の心身から消えかかっていることを意味するであらう。裏返していえば、確かにこの時期あたりから、積極的に女性を求め、愛し、支える一枝の姿が、さらに一段と際立ち始めるのである。「首でも縊らなきや始末がつかないやうな氣持」を自覚しながらも……。

すでに安堵村時代に一枝は、一九二一（大正一〇）年の『婦人公論』四月号（六四号）に、公開状というかたちをとって、歌人としての白蓮のあり方に疑問を呈する「伊藤白蓮氏に」を書いているので、個人を対象とした批評文の事例は確かにある。しかしながら、千歳村に移ったのち、とりわけ検挙体験以降のこの時期に至ってからは、一転して一枝は、特定の女性についての印象や作品を好意的に紹介する機会を多くもつようになった。たとえば、「福田晴子さん」（『婦人文藝』一九三五年一月号）、「宇野千代の印象」（『中央公論』一九三六年二月号）、「仲町貞子の作品と印象 手紙」（『麵麴』一九三六年二月号）、「原節子の印象」（『婦人公論』一九三七年四月号）などがそれに相当する。

それでは、各誌に掲載された人物評について、以下に簡単に紹介しておきたい。『婦人文藝』に掲載された人物評のタイトルは誤植されて「福田時子さん」という表記になっており、また同号の目次を見ると、「福田晴子氏」となっている。入稿時の実際の一枝の原稿はどうなっていたのかわからないが、ここでは「福田晴子さん」という題で表記しておきたい。ちなみに、この号には、福田晴子による「文藝時評」も掲載されている。「福田晴子さん」のなかで、一枝は、三年前の正月の初対面のときに、福田に次のような言葉をかけたことを書いている。「あなたは文藝批評家になられるといい。あなたの書かれるものには躊躇と饒舌がない。總括的にいく場合とかく機械的に出たがる女の悪い點があなたにはないやうに思へる。ものを書く女の中にあなたのやうな人は一寸見当たらない」<sup>139</sup>。

一枝は、『中央公論』の「宇野千代の印象」で、「ウソつきのウノさん」とか「ウノさんはイケナイ女」とかいつて自己を侮蔑する宇野の、その本質部分に存する、あるがままに生きる美質をほめる。「私が宇野さんに正直さを感じるのは、嘘をついても、人に迷惑をかけても、いくど別の男のひとと暮しても、夫婦でないのに寝ても、拵へごとでない氣がし

て、その宇野さんとは別に、ひどく誠實で、自己反省の強い宇野さんが感じられてならない」<sup>140</sup>。

『麵麩』に掲載の「仲町貞子の作品と印象 手紙」は、仲町に宛てた手紙形式による一文である。仲町が訪ねて来たときの印象について、一枝はこう書いている。「あなたは静かな方でした。あなたは日本の女の人ではないやうな皮膚や眼や眉をもつてゐました。私は、普通から見て癖をもつ人間にいつも好意をもつたりひかれるせいか、あなたの髪のかたちまでよく覺へてゐます」<sup>141</sup>。

『婦人公論』に寄稿した「原節子の印象」は、原の美しさを絶賛する言葉でもってほじまる。次は冒頭の一節である。「原節子の美しい顔と美しい整ひをもつからだを見て、何か書かねばならないことは、夢で見た美しいひとのことを想ひ起して書くことがむづかしいことと同じだ。生れながら美しいひとは、得難い寶石で、どこをどんなにほめてよいか、それはただ人の心をうつとりさせ、眺めてゐるだけで充ちたりる」<sup>142</sup>。

それでは、自分の顔については、どうか。「原節子の印象」が掲載された翌月の『婦人公論』に「私の顔」(写真と文)と題した一枝の一文を読むことができる。自身の顔について一枝は、次のような思いをもっていた。「つまらない顔です。私は、自分の顔に確信がないので、寫眞をとることが嫌ひです。凸凹のすくない平たい顔といふものは、陰影がなくてつまらないものです。色艶のわるい、お洒落なんかしてもし甲斐のない顔で、濃い長い睫毛も、微笑を浮べるにいい、そんな唇ももつてゐません」<sup>143</sup>。

この一九三〇年代後半に書かれた一連の女性評は、その論調において、安堵村時代に書かれた「伊藤白蓮氏に」とは明らかに大きく異なる。たとえば一枝は、白蓮をこう評していた。「私は、あなたを、實にあはれな人だと思ひました。苦しいだらうと思ひました。あなたは何故生きてゐらっしゃるのですとききたくなりました。あなたは死んでゐられるのか、生きてゐられるのか、わからないのです」<sup>144</sup>。この「伊藤白蓮氏に」が書かれた一九二一(大正一〇)年は、一枝は必死に自分のセクシュアリティと闘っていたときである。それだけに、他の女性の言動にも厳しく、妥協のない批判的な視線を浴びせたのであろう。しかしこの三〇年代後半に発表された女性評を読むと、どれもが肯定的であり、それぞれの美点を最大限に賞讃しているのである。ここから考えられることは何か。理性や宗教、夫の助言などの周りの価値に自分のセクシュアリティを合致させようとする虚しい苦闘を放棄して、持って生まれた自分のセクシュアリティをそのまま容認する——そうした自分へと、すでにこの時期、百八十度転換してしまっていたのではないだろうか。「不良心」で「不徳義」で「不道德」なる自己はもはやいない。あるのは、あるがままの自己、ただそれだけである。それを例証するかのような文が、次の文章である。一九三八(昭和一三)年十一月に双雅房から『新装 きもの随筆』が発行された。そのなかに、長谷川時雨、宇野千代、福田晴子、佐藤俊子を含む多数の執筆陣の随筆に交じって、一枝の「春と化粧」を見出すことができる。擱筆日は「十二年四月」とある。そして、以下に引用するものが、最後の一節である。

私は化粧を否みはしない。却つて化粧せぬことを嫌ひさへする。しかし、化粧といふものは、いよいよ美しくするためのものである。或ひはむしろ、缺點を覆ひ、美點を一層に補ふものだといふ方が、本當かも知れない。流行の如何ではないのである。

それに、流行といふものは、一つのヒントだと考へていゝだらう。支配されるべきものでも追ふものでもない。それは終始、自分の持ち味といふものを助長し生かすことのためにとり容れられ、従はされる筈のものにちがひない。

私はそうした化粧の乙女を見たいと希つて、ある夜も、またある夜も街を歩くのである<sup>145</sup>。

「私はそうした化粧の乙女を見たいと希つて、ある夜も、またある夜も街を歩くのである」という最後の語句は、どういう意味なのであろうか。「私は、夜街を歩くときはいつも、そうした化粧の乙女に出会うことを密かに願っている」くらいの軽い意味であらうか。それとも、「私は、そうした化粧の乙女を見たいという思いをどうしても抑えきれず、夜になると街に出て、歩き回る」といった、積極的な意味が含まれているのであろうか。一枝の女性への関心の度合いがどの程度にもとれる、解釈の幅の広い表現であるといえる。しかし、いずれにせよ、この言い回しは、自分のセクシュアリティについての、とりわけ性的指向についてのこれまでに全く明かされることのなかった具体的な行動様式を自ら進んで開示するものであった。

## 第八章 母親発見

### ——今は古い母親の道／かけ離れた両親

尾形明子が、一枝に関して熱田優子から聞き取った内容は、自著の『「女人芸術」の世界——長谷川時雨とその周辺』のなかにも、見出すことができる。以下は、その一部である。

[富本一枝さんは] 戦後は共産党の方へ傾いて、憲吉さんが相変わらず陶器を作っていると、あなたいつまでもそんなものを作っているとドン・キホーテになるわよと言ったり、もう喧嘩ばかり。別居はそうしたことも原因していたのでしょうね。戦後一時少年ものの出版をしようとしたらしく円地文子さんや私に声を掛けてきましたが、結局そのままでした<sup>146</sup>。

尾形は貴重な聞き取り調査をしているものの、惜しむらくは、熱田の発話内容が正確に読み手に伝わってこない。「憲吉さんが相変わらず陶器を作っていると、あなたいつまでもそんなものを作っているとドン・キホーテになるわよと言ったり、もう喧嘩ばかり」と書かれてあるが、このような富本夫婦の不和を熱田が目にしたのはいつの時期のことであろうか。文頭に「戦後は」とあるので、一般的にはそのように読むのが自然であろうが、しかし、書かれている内容からすれば、その可能性は低く、やはり実際にそうした現場を熱田が直接目撃することができた、『女人芸術』の発行期間中の出来事だったのではないだろうか。また熱田は、この夫婦喧嘩の横にいて、一枝の「ドン・キホーテになるわよ」の言葉の意味をどのように理解したのであるだろうか。残念なことに、最も重要であると思われる喧嘩の理由について、尾形は聞いていないようであるし、熱田は語っていない。さらに加えれば、「別居はそうしたことも原因していたのでしょうね」とあるが、この「別居」についても、一枝が検挙される前後の一時期の「別居」を指しているのか、それとも、戦後すぐからの永遠の「別居」を指しているのか、これもまた、判然としない。そのあとすぐに「戦後一時」という文字が続くので、先の「戦後は」は、ひょっとしたら「戦前は」の単純な誤植ということはないだろうか。そうであろうとなかろうと、いずれにしても、熱田の証言からわかることは、不仲の時期や理由はともかくとして、憲吉と一枝の喧嘩はしばしば周囲の人びとの目に留まり、それが「別居」の一因になったと考えられていたということであろう。

大和時代の一枝と東京時代の一枝とを比べてみた場合、すでに前々章（第六章）と前章（第七章）のなかにおいても指摘しているように、ある側面では、はっきりとした変化ないしは違いがあるものの、別の側面では、一定の連続性も認められる。改めて整理をするならば、おおかた次のようになるだろう。

まず、自己のセクシュアリティについて——。大和時代にあつては、悩み、苦しみ、専門書籍や聖書などを頼りに、夫の助けも借りて、その問題を克服するために全身全霊を傾注していた。しかし、東京に来てからは、そうした努力をすべて放棄してしまったかのように見える。専門的な知識を得ようとする姿も、教会に通う姿も、いまだ、いっさい資料に見出されていない。逆に、禁じられなければならないはずの、多くの女性が集ま

る場所への出入りについては、『女人藝術』に加わることによって、あっけなく、解禁されてしまった。かくして、女性に向けられた一枝の性的指向が顕在化するのである。転地療法を目的とした東京移転だったのではなかったのか——。結果から見れば、その目的は反故にされたことになる。憲吉はそれをどう思ったであろうか。この時期の不和の原因のひとつが、そのことであった可能性もある。もっとも一枝の立場に立てば、自分の心の性は、自らの好みによってのちになって選択したものではなく、出生に伴って、体の性と同様に、最初から自分に備わった性である以上、その性を葬り捨てることも、また、体の性に一致させることも、ともにできない。これが、一枝の悲痛な叫びだったにちがいない。しかしながら大和時代と違って、東京時代にあっては、妻の性に対する憲吉の気持ちも、自身の性についての一枝の叫びも、それらを例証するにふさわしい資料は、現時点で存在しない。

一方に妻の性に対する夫の思いやりがあり、一方に窯の再築という困難があり、そうした状況のなかにあって、何とか決行できた東京移住だったのではなかったのか。一枝は、このような現実を十分にわかっているのであろうか——。憲吉がそう思ったとしても、不思議ではない。さらにそれとは別に、『青鞥』、『番紅花』に続く、女性のための編集による後継文芸雑誌ともいえる『女人藝術』が発刊された際、一枝にとっては極めて危険な女性集団になることがあらかじめ予想されたとしても、そこに一枝が自己表現の場を確保しようとするのであれば、それをむやみに止めることも、憲吉には躊躇されたであろう。しかしそれがきっかけとなって、一枝の落ち着きのない心が誘発されることはないであろうか——。こうした思いが、憲吉の胸に幾重にも渦巻いていたにちがいなかった。『女人藝術』の主宰者である長谷川時雨が発する、「ひとりで[一枝の自宅のある]祖師谷に行ってはいけないよ」という、若い女性たちへの注意を喚起する言葉を信じるならば、憲吉が懸念したとおりの実態を伴って、現実には推移していったことになる。これでは、新婚旅行後の東京生活の終焉の再来であり、安堵村での結婚生活の破綻の再現ではないか。しかし、『女人藝術』の創刊の早い段階から寄稿したり、編集に加わったりしているところを見ると、自分の性自認も性的指向も、いかなる療法によろうとも、あるいは、できうる限りの強靱な宗教心や克己心をもってしても、もはや変更することは不可能であることに、東京移住後さほど間を置くことなく、一枝自身、はっきりと気づいたのかもしれない。そうであれば、女へと向かう一枝の愛の行為は、憲吉の心情を超えて、決して引き返すことのない、自然で神聖な生と性の営みにすでになっていたにちがいなかった。

第五章において、安堵村生活の終焉について詳細を述べているが、そのことを記述するなかで、一枝が『婦人之友』（一九二七年一月号）に寄稿した「東京に住む」から、何箇所かを引用した。そのうちのひとつの引用文が、以下のものであった。

かつて若かつた頃、なにかにつけて心の轉移といふ言葉を使つたものであるが、まことの轉移といふものは、並大抵の力では出来るものではなく、身と心をかかまでも深く深く痛め悩まして、身をすてゝかゝつてはじめて出會ふものであり行へるものであることを沁染と知ることが出来た。

用いられている「心の轉移」という言葉は、一枝が、自身を女性間の同性愛者（当時の通称では「レスビアン」など）として認識していたとすれば、同性愛から異性愛へと性的

指向を「轉移」させる試みを示唆する心的な用語法だったであろうし、それとは違って、一枝が、肉体的には明らかに女性でありながらも、心の性を男性として自己認識するトランスジェンダー（当時の通称では「男女」など）であると思っていたとするならば、この言葉は、心の性を体の性へと「轉移」させことを意味する彼女の内に秘められたキーワードだったにちがいがなかった。しかし、どちらにしてもそれは、「並大抵の力では出来るものではなく」、過度の心身の葛藤と衰弱を伴うものであった。そうした「轉移」の試みを一方で繰り返しながらも、それでもやはり、美しい女性へ向かう一枝のまなざしは、一貫して変わらなかったようである。富本一家が安堵村を離れて東京へ移転するのは、一九二六（大正一五）年の一〇月半ばである。その半月ほど前の『讀賣新聞』（一九二六年九月二八日発行の七頁）に目を向けると、一風変わった、叔父の竹坡か國觀が聞き手役となったインタビュー記事があり、そのなかで一枝は、このように語っているのである。

たまにこうして奈良の田舎から上京しますと都會の若い婦人達の新鮮な美しさが際立つて目に映ります、大阪へも折々出る事がありますが大阪では東京の若い婦人から受けるやうな新鮮な美的の感じを受ける事ができません、やはり東京は流行の本源地です、健康らしいあの美的感やはり東京の若い婦人がも [つ] 一つ一つの誇りであると沁々感じさせられます

久しぶりの上京で目にする最初の感動が、婦人の「健康らしいあの美的感」なのであるうか。ほぼ一年間を費やし、苦しみにあえぎながらやっとの思いで決断した東京移転だったのではないのか。その実行を間近に控えたこの時期の発話の内容としては、あまりにも気楽で、軽薄にすぎることはないであろうか。状況に対する深刻さが全く感じられないのである。その一方で、これもすでに引用で示している文言ではあるが、同じく「東京に住む」のなかで、一枝は、田舎と違って多くの美しい女性が住むであろう東京で、新たな生活をはじめると際して、このような決意を述べているのである。「欠点だらけな人間の性質は同様その弱点をもつ人間社会の中に飛び込んでお互にもまれ合ひ争闘しあひ相互扶助しあつて、はじめて完全に近いものともなう」。確かにここには、それ相応の緊迫感が漂っている。転居を挟んでその前後のほぼ同じ時期に語られた、このふたつの言辭を読み比べれば、多くの人は、その落差の大きさに驚くであろう。しかし、こうした落差の高低こそが、一枝の人間像をかたちづくる彫りの深さであり、同時にそこから生じる陰影や虚実の二面性であり、さらには、像全体が醸し出す謎や不可思議さに通じる独自の肌合いだったのかもしれない。

それでは、夫である憲吉に対する一枝の姿勢には、何か変化のようなものが認められるであろうか。安堵村での生活にあつては、すでに第四章において引用を使って示したように、たとえば、次のような一枝の言葉が残されている。「お父さんの苦しい氣持や、出来てゆくお仕事をいつも間近で見たり、きいたり出来てゆくあなた方や母さんは、どんなにしあわせでめぐまれてあるかしれません」。ところが、東京へ移ると、それがこう変わる。「あなたいつまでもそんなものを作っているとドン・キホーテになるわよ」。これらの言説から判断すると、夫の仕事への一枝の接し方は、大和時代と東京時代とでは、大きく変化しているように感じられる。しかし、「ドン・キホーテ」になぞらえるような粗暴な発話は

一転して、従順な妻の姿も、一方でかいま見せる。これもすでに前章（第七章）において引用している部分である。「私はやつぱり自分の夫が、たとへばシャツのボタンが除れてあたりすることは自分の恥だと思ひます」。もっとも一枝は、他方で、こうもいつている。「自分が家族の一人として、妻君としてちやんとやつているかといへば、どこか自分は變つた人間で、なにか申譯ないやうな氣持ちが終始してゐる」。前者の言説から「良妻」が、他方、後者の言説からその逆の様相が連想される。どうやら一枝は、異なるふたつの「衣装」をまとう「妻」だったようである。明らかにひとつは、母から受け継いだ古い伝統的な生き方をする妻であり、そしてもうひとつが、「どこか自分は變つた人間」という自己認識から推論して、心の性に従うところの男のごとき振る舞いをする妻だったということになるか。もっとも、後者の場合にまどっていたであろう内面の「衣装」の詳しい実態はわからないものの、一枝の憲吉に対するその場合の心身の接し方は、「妻」というはっきりとした感覺によるものではなく、「同居人」といった程度のあいまいなものだった可能性も残る。

他方、変わらない側面もあった。それは、子どもに対する態度であった。安堵村にあつても、東京にあつても、いつも一枝は、「自分は母親の資格がない」といつては、子どもたちを当惑させていた。この語句に隠された本当の意味は、何だったのであろうか。心の性が男だったことに起因して、どうしても母性のようなものが芽生えず、結果として、それを実感できなかったのではないだろうか。「親」として子育てをしているという感覺は、おそらく一枝にあつたとしても、「母」としての感覺は、どの段階かですでに喪失しており、そのことを自覚したうえで、「自分は母親の資格がない」とか、「なにか申譯ないやうな氣持ちが終始してゐる」とか、いつているのかもしれない。家庭内での会話に使われる言葉としては、明らかに不自然さが残るものの、その根本となる理由については口を開かないことを、つまりは、カミング・アウトしないことを最初から一枝が決めていたとするならば、その不自然さは、子どもたちの心のなかに、そのまま不自然なかたちでもってその後も堆積していったにちがいがなかつた。母親について陽は、これもすでに引用で示しているが、「ある點まで判つてそこから先が判らない」といつている。その「判らない」部分に、そうした不自然な発語も含まれていたのではないだろうか。

これに関連して、さらに加えるとすれば、「判らない」部分に属すると思われる一枝の発話が、『讀賣新聞』（一九二六年九月二八日発行の七頁）にも残されている。「私も結婚生活をしてもう十二年になり、善良なマザーとして生涯を終へそうです」という言葉がそれである。実にこれは、東京移転を二週間後に控えた言説である。東京移転の直接の原因となつたのは、「小さな学校」の崩壊にあつたのではないか。その惨劇へと導いた母親が、どうして「善良なマザー」を自認することができるのであろうか。仮にそれは、いまは横に置くとしても、長女の陽が生まれてまだ一年と数箇月しか立っておらず、また、次女の陶が誕生してやっとそろそろ九年になろうとするこの時点で、どうして、「善良なマザーとして生涯を終へそうです」と、いえるのだろうか。もしこの記事を子どもたちが読んだとするならば、日ごろの「自分は母親の資格がない」という言葉との開きを、どう受け止めたであろうか。もっとも、ここに掲載されている記事は、親族が聞き手役となつたインタビュー記事である。何がしかの意図が働いて、どこかの段階で脚色がなされてしまった可能性がないわけではない。しかしながら、当然そこまでは確かめようがない。もしこの言葉が、本当に一枝によるそのままの発話であるとするならば、これもまた、謎めいて不

可思議なる「判らない」部分に属する言説といわざるを得ないのではないだろうか。

最後になるが、「新しい女」の側面についても言及しておきたい。青鞥の社員だったおよそ一年間、その行動が従来の女性の規範を逸脱するものであったがゆえに、驚きとともに、批判と揶揄とをにじませて、「新しい女」とも「新しがる女」とも、世間から執拗に呼ばれたことがあったが、一枝は、このときも、それ以降も、自ら「新しい女」を声高に叫ぶようなことはなく、むしろ、「旧い女」の美質に共感さえもっていた。結婚後、家庭生活を営むにあたって、旧い封建的な価値から新しい近代的な価値への転換が夫によって進められ、一枝もそれに倣おうとした形跡はあるものの、しかしながら、こうした努力が東京時代も続いていたことを示す何がしかの足跡のようなものは、いまのところとくに何も見当たらない。

青鞥時代にあって「新しい女」と呼ばれるものの、それはあくまでも空にして疎なる呼称であり、そこに何か一枝の新しい思想の実質なり自覚なりが見出されるわけではない。多くの人たちにとっては、母親から教えられた「良妻賢母」の思想から巢立って、いつ、どのような経緯をたどって「近代」の思想を一枝は習得するのとか、単に世間を騒がせるだけの「新しい女」ではなく、生き方や考え方のレベルでの真の「新しい女」へと到達するのは、どのような社会的文化的背景からなのとか、その場合の一枝の「新しい女」としての主義主張の内実はどのようなものなのとか、そうした諸点について、関心があるのではないかと思われるが、かかる期待にもかかわらず、この時期の一枝は、娘の陽が語るところによれば、「ちよつと左翼にも引つ掛つたり」しながらも、「今は古き母親の道」を邁進していたのである。前後の文脈から判断して、「今は」という用語には、「若き日の青鞥時代に見受けられた言動や呼称は別にして」という意味が念頭に置かれている。

以上に述べてきたような一枝の「新しい女」にかかわる分析を踏まえながら、この時期の一枝が、自らの女性としての生き方や立ち位置についてどのように感じ取っていたのかを想像しようとする、どのようになるであろうか。ほとんどその可能性は低い、出発点である青鞥時代の「新しい女」に何がしかのこだわりをいまだもっていたとすれば、こうなるかもしれない。

《青鞥時代の自分の言動は、シャボン玉のような、単なる見せかけにすぎず、「新しい女」という空疎なる名辞の出現を先行させてしまっただけで終わってしまいました。しかし私は、「新しい女」を信じています。そこで、その責任を全うするうえからも、封建的で、前近代的で、家父長的な考えを超えた地平に見えてくる、真に「新しい女性」像をいち早く論理的に提示し、その一方で、自らも主体的に実践しなければならない、と強く考えてきました。そしてその一環として、東京に移った一時期、社会革命の世界に強い関心をもち、その立場から小説や評論を書いてみました。また、運動資金の面で支援したり、ある活動家を自宅にかくまったりしこともありました。ところが、家事を含め、なすべきことがあまりにも多いため、いまだにその責任を十分に果たせていない状況にあります。それでもいまは、『讀賣新聞』の「女の立場から」というコラムに連載エッセイを書いたり、また各種雑誌において、美しくて能力のある女性を取り上げて讃辞を送ったりしては、自分なりに同性への支援を心がけています。》

しかし実際には、それとはニュアンスの異なる見解をもっていた可能性の方が高い。というのも、青鞥時代の「新しい女」にかかわる自信や矜持が、そもそも一枝にはなかった

か、あるいは、その後すっかり一枝から抜け落ちてしまったのではないかという想定ができるからである。それであれば、おおよそこのようにまとめることができるであろう。

《私にとっての青鞥時代は、シャボン玉にも似た、一年足らずの短い在籍で、とくにこれといったことをしたわけではありません。「新しい女」も、勝手に周囲がつけた名称で、私には関係ありません。私はむしろ、母親譲りの「旧い女」なのです。東京に住むようになって、自分の内側にある義侠心あるいは正義感のようなものに火がつき、一時期、社会革命の世界に強い関心をもったこともありましたが、どうもそれにも徹しきれず、いまでは、あるべき社会とそこに生きる人たちを、文字によって創造的に描写することからも、あるいは、資金の面で積極的に支援することからも、もはや距離を保っています。やはり私は、夫のシャツのボタンがひとつ取れていてもとても気になる性分で、そこで最近では、今風ではなく昔の女の、その生き方を信じながら、家事を含め、多くのなすべきことをなし、その一方で、『讀賣新聞』の「女の立場から」というコラムに連載エッセイを書いたり、また各種雑誌において、美しくて能力のある女性を取り上げて讃辞を送ったりしては、自分なりに同性への支援を心がけています。》

一九三五（昭和一〇）年一二月一日の『讀賣新聞』の「母親発見 今は古き母親の道 かけ離れた両親」（九頁）という見出しがかったインタビュー記事のなかで、陽は、こう表現している。「お母さん達も時代が更へたんでせう。ちよつと左翼にも引つ掛つたりして。そこへゆくとお父さんは昔から同じですわ」。この言葉から、時代や環境の変化によって生き方が変わる一枝と、時代や環境が変わろうとも自分の生き方に変わりが無い憲吉——こうしたふたりの姿が浮かび上がってくる。若いころの母親については、こう語る。「あの頃の人としてはさうであつたらうと思ふの。だがあんな出発をした人が今は決して新らしい人でないことは瞭りしてますね」。さらに陽は、両親について、「二人とも間違ひだつたのぢやないかしら、生きてゆく態度が全然違ふ人たちなんです」と述べる。最後に、母親に望むことを聞かれると、陽は次のように記者に返答している。「も少し時間を上げて本質的な勉強をして欲しいと思ひます。家の事や何かで餘り一杯仕事があり過ぎますから」。

陽は、母親に対して、「本質的な勉強をして欲しい」と願う。一枝に、正確な学術的知識が欠落していることに気づいているのであろう。そのとき陽の頭にあったのは、どのような「勉強」だったのであろうか。歴史、文学、語学、それとも思想——それについては、とくに触れていない。一方このとき、両親の不仲についても、冷静な分析をして、臆することなく記者の前で披瀝していた。二〇歳の陽が語る両親の素顔であった。

一九三二（昭和七）年の六月号をもって『女人藝術』が廃刊となると、一枝は、ひとつの重要な発表の場を失い、続く、一九三三（昭和八）年の八月に検挙されると、「従來の行動の一切を清算」して「轉向」を誓うことになる。そうしたことが、全体としてその後の一枝の生きる姿勢に影響を及ぼしたのではないかと考えられる。プロレタリア文学が衰退し、言論に対する統制が一段と強化されてゆくこの時期、以前にみられた一枝の文学に対する純粋な活力は次第に衰微してゆき、そしてそれに代わって、あたかもそれを補うかのように、現在手もとに残る資料の限りにおいては、おおかたそれ以降、あえかにして才能豊かな女性に対する関心が弥増すことになるのである。

そうしたなか、一九三九（昭和一四）年の『婦人公論』新年号（二八二号）に掲載された、自分の小さいころの思い出話を綴った「探偵になりそこねた話」を最後に一枝の筆が

著作集 1 1 『研究余録——富本一枝の人間像』

第一編 富本一枝という生き方——性的少数者としての悲痛を宿す

第八章 母親発見——今は古い母親の道／かけ離れた両親

止まる。一九四一（昭和一六）年一二月、日本はアジア・太平洋戦争へと突き進む。

## 第九章 戦時体制下にあつて

——憲吉さん、お気のどくだと思うだろう

アジア・太平洋戦争は、一九四一（昭和一六）年一二月八日、マレー半島への上陸とともに、ハワイの真珠湾攻撃にはじまり、その後日本軍の戦線は拡大し続けた。しかし、一九四二（昭和一七）年六月のミッドウェー海戦で大敗を喫すると、戦局は大きく傾き、南太平洋の日本軍は次々と壊滅の道をたどっていった。神近市子は、米軍による本土空襲が近づく気配を感じていた。「昭和十八年にはいると、英軍がベルリンを夜間攻撃しはじめた。もはやドイツの敗色は濃厚であった。日本では学徒兵が動員され、国民兵の兵役が四十五歳まで延長されて、“決戦はこれからだ”と叫ばれていたが、私は早晩東京もベルリンのように絨毯爆撃の猛威にさらされると考えた」<sup>147</sup>。疎開の開始である。神近の回想は続く。

そんなとき、私の頭に浮かんだのが、旧知の中溝家のある府下（都制が敷かれたのが昭和十八年）の鶴川だった。そこには、富本憲吉氏が、「ひとりで静かに絵を描きたい」ということで一軒の茅葺き小屋を借りておられたが、氏は、その家をまだ見ていず、家賃の交渉もしていない段階だった。そこで私は富本氏にたのんで、その家を譲ってもらうことになった<sup>148</sup>。

こうして本郷の下宿間を出て、鶴川での神近の疎開生活がはじまった。

詩人の深尾須磨子が祖師谷へ疎開するのも、一枝との縁であった。その経緯から疎開生活中の一枝との交流までが、『わが青春・深尾須磨子』の第三章「祖師ヶ谷時代 [前期]」のなかに描かれている。著者は高野芳子。高野は深尾との出会いを、こう回想する。「私をはじめて深尾須磨子に会ったのは、昭和十八年二月七日、太平洋戦争がはじまって間もない頃のことであった。誰からの紹介もなしに、おさげ髪の方にリボンを結んだ十七歳の少女は、期待と畏れに胸をはずませて、その扉をたたいた。九州の片田舎の女学校から、女子大に入ってまだ一年もたたない女の子にしては、いささか生意気に過ぎたであろうか」<sup>149</sup>。深尾、五四歳、詩人としてすでに社会に認められた存在であった。若くして深尾の詩に強い感動を経験していた高野は、この日をきっかけに、しばしば休日になると、高田馬場駅に近い「寂光荘」と呼ばれる深尾の家を訪れるようになった。しかし、「いよいよ、東京空襲がはじまりそうだというので、誰もが疎開をしだした。……『神近市子が鶴川にしたらよいというんだけどねえ』など、考えあぐんでいるうちに、耳よりな情報が入ってきた。富本一枝さん……が知らせてくれた。富本家のすぐ近くに手頃な小屋があいているというのである」<sup>150</sup>。この小屋には、入り口の引き戸を開けると土間があり、その土間を挟んだ右手に五畳半の和室、左手に八畳の和室がついていた。裏手には、錆びついた手押しポンプとほこりだらけのゴエモン風呂があった。深尾は、一九四四（昭和一九）年の春もまだ浅いある日、この小屋に引っ越し、こうして疎開生活がはじまった。女子大の寮に住んでいた高野も、ほとんど週末にはここへ来て、深尾と一緒に過ごした。

次の挿話は、疎開中の出来事についての高野の回想である。このときまでに高野は、深尾のことを「マダム」と呼ぶようになっていた。

「何か、たきつけにつかう紙くずないかしら」「いいものが、ある、ある」マダムは行李いっぱいにつめこまれた手紙類を持ちだしてきた。おどろいたことに、その殆んどが富本一枝さんからのものであった。私は、焚き口に手紙をポンポン投入して火をつけた。読んでみたい誘惑にかられた。胸をドキドキさせながら、文面に目をはしらせると、「どうじゃ、ようもえとるか」マダムがのぞきにきた。「そんなものを読んではいけない。いいか、封筒に入れたままもすんだ」私はワルサをみつつけられた子供みたいに小さくなって、その上に枯枝をくべ、古い柱のきれっぱしをのせた。実によく燃えた。メラメラと燃えあがるほのおをみつめながら、私は、一枝さんの情熱がゴエモン風呂をわかしていることにあわれさを感じた<sup>151</sup>。

また、疎開生活のなかでは、こんなこともあった。深尾は高野芳子のことを「ヨシコ」と呼んでいた。

「深尾さん、まだ起きていらっしゃいます？一枝です、ちょっとここ あけて頂けないかしら」……白い着物をゾロリと着流して、一枝さんは素手に大きな魚を一匹、高々とかかげるようにぶらさげて立っていた。一枝さんの目は少しつりあがり、うるんでみえた。月の光に、青ぐるくヌメヌメと魚のうろこが光り、尾っぽをつかんだ手がこきざみにふるえている。……マダムは殊さらにとりすましたうけこたえをしているが、いっこうに手をだそうとはしない。素手で受けとるには、何やら気味がわるすぎるのだ。私はあかりをつけて急いで大皿を探した。皿にのせてもらった魚は、ずっしりと意外な重さで、なまぐさい匂いが立ちこめた。……「あの方、どうかなさったのかしら」「さっきから 魚をさげて じっとその辺に立っていたのかもしれないよ」「まさか」「ヨシコのことが気になって 気になってしょうがないのかもしれない」「どうして？ どうしてなの？」「そんなことは分らなくなっちゃいいんだよ。さあおやすみ」と言われても、おいそれと眠れるものではなかった<sup>152</sup>。

その出来事から一夜が明けた。ヨシコは、マダムから同性愛について話を聞いた。ヨシコの回想は、こう続く。

翌日 女と女が愛しあう、いわゆる同性愛について、ギリシヤの女詩人サッフオあたりまでさかのぼって解説してもらえたのは、もうけものだったが、「ほら、以前同居していらした荻野綾子さん、あの方とはどうだったの？」「何が？」「何がって、その…今のおはなしみたいな…」と、ためらいがちに投げしてみた質問も、「アホーやなあ、そんな噂を真にうけとったのか」と、軽くいなされた。そうであったのかもしれない、なかったのかもしれない、確証はない。だが、「何もびっくりするには及ばない。そんなこともあるというだけの話だよ。ゆうべのことだって…」といわれても、前夜のできごとが、それとどう結びつくのか、私には判じ難かった<sup>153</sup>。

それにしても、ヨシコは、マダムと荻野綾子を知っていた。どのような経緯で知

ったのであろうか。それはわからない。しかし、このふたりの関係は、すでに多くの人が知るところとなっていた。というのも、すでに一九三〇（昭和五）年五月号の『婦人公論』に「同棲愛の家庭訪問」と題した記事が掲載されており、深尾須磨子と荻野綾子、吉屋信子と門馬千代子、金子しげりと市川房枝の三組のカップルの「同棲愛」家庭が紹介されていたからである。深尾須磨子と荻野綾子のカップルについて、訪問者であるその記事の記者は、冒頭、このように書いていた。「一枚の表札に『深尾』と『荻野』が仲よく並んである。晝間なのに格子戸の鍵がかゝっているのは、女ばかりの住居の用心のためであろう。案内を乞ふ聲に應へて出て来たのはステージでお馴染みの荻野さんだ」<sup>154</sup>。この雑誌が発売されたときは、ヨシコはまだ五歳前後の幼子だったことを勘案すれば、ヨシコがこのことに気づききっかけは、長じてその後に誰かに聞かされたことによるものであろう。

マダムとヨシコの会話は続く。マダムは、憲吉の心情を察して、「憲吉さん、お気のどくだと思うだろう」と、ヨシコに問いかけてみた。

「憲吉さん、お気のどくだと思うだろう」と同意を求められても、何がどうお気のどくなのか見当もつかず、私には返事のしようがなかった。その大きな魚は、“もったいながりや”のマダムも、さすがに食べてみようとは言いださず、庭の隅のいちぢくの木の下に穴を掘って埋めてしまった<sup>155</sup>。

富本家につながる坂を上っていく女たちの姿が、この時期しばしば見受けられた。陽の息子の岱助も、一九四四（昭和一九）年の六月の誕生日で、七歳にまで成長していた。ヨシコと岱助は、なかなかの仲よしだった。「女子大生といっても、一人娘でのんびり育った子供気分のぬけきらない私と、年にしてはオシャマなこの男の子はヘンに気があった」<sup>156</sup>。あるときのことである。

岱ちゃんと畦道でもち草をつんでいると、富本邸へ上がっていく坂道に、小ぶとりの男の姿が見えた。「あの人ね、男みたいだけど、本当は女なんだよ。名前は、オモベ・ワルコ」もどってから大真面目でマダムにその話をすると、彼女ははじけたように笑いだした。「バカだねえ、岱助にかつがれたりして、あれは、軽部清子なんだよ」と、この風変りな女性の話を一くさりきかされた。作家の大谷藤子さんも、しばしば富本邸への道を上っていった<sup>157</sup>。

そののちヨシコは、画家の堀文子との会話のなかで、「祖師ヶ谷の話が出て、ちょうどその頃、堀さんも何回か富本邸へ訪ねてきたことがあるとききおどろいた」<sup>158</sup>ことも、回想している。

このころヨシコや岱助が目撃した女性はその一部で、一枝が特別に親しくしていた多くの女性たちが、このように、富本家へと続く坂道を上っていったものと思われる。大和の安堵村から東京の千歳村へ移住してこのかた、その真の実態はどうであれ、すでに言及している資料に明確に残っている名前に限って列挙しても、それなりの数になる——深尾須磨子、軽部清子、横田文子、堀文子、そして大谷藤子。

一九三五（昭和一〇）年の『中央公論』一二月号の「新人傑作集」に所収されている「血

縁」が、大谷藤子の作家としてのデビュー作のひとつであろう。一九六三（昭和三八）年に憲吉が亡くなると、ただちに筆を執り、「失われた風景」と題するエッセイに仕上げ、富本家を訪問していた当時を懐かしんだ。「私は戦争中から戦後にかけて、しげしげと富本家を訪ねた。陶芸家として第一人者である先生を訪ねたのではなく、夫人と親しくしていたからだ。ときどき泊まり込んだりした」<sup>159</sup>。大谷は、泊まり込んだ翌日のある朝のことを鮮明に記憶していた。

私はいまでも思い出すが、富本家に泊った翌朝早く、近くの雑木林を歩きまわったことがある。朝霧が丘にたなびいて、すがすがしい初夏の季節だった。私の着物は朝露にしっとり濡れ、みづみづしく照り映えた若葉の香りがあたりにたちこめていた。私はその香りをなつかしみ、ほっとひと息つくような思いだった。なんという静かな自然のたたずまいだろう。私は心のやすまるのをおぼえた。そのとき先生〔憲吉〕の仕事場になっている建物のあたりに人影が見えた。遠くから眼を凝らすと、それはたしか先生だった。こんなに朝早く、中止しているはずの仕事場に先生は入っていくのだろうか。邸から道を距てたところにある小づくりな建物が先生の仕事場になっていた。私が近づくと、先生はうつむいて、ろくろをまわしておられた<sup>160</sup>。

ところで長男の壮吉も、一九四四（昭和一九）年の一月の誕生日で、一七歳にまで成長していた。七歳の孫の岱助が、軽部清子のことを「オモベ・ワルコ」と呼ぶくらいだから、当然息子の壮吉も、母親一枝を頻りに訪ねてくる女友だちについて、さらには、修復の見込みがもはや期待できそうにない憲吉と一枝の夫婦関係について、何らかの強い思いを抱いていたであろう。学友に、西部グループの創業者の堤康次郎を父にもつ堤清二がいた。清二は、自分の出生にかかわって悩みをもっていた。そうしたことから、壮吉と清二のふたりは接近し、終生の友となる。壮吉は、自分の苦しみを清二に打ち明ける機会をしばしばもったことであろう。清二は、それを自分の問題と重ね合わせて、共有しようとしたにちがいない。戦後大学を出ると、壮吉は映画監督の道を選び、一方清二は、実業家として腕を振るうとともに、「辻井喬」の筆名で文芸の世界に入り、壮吉が亡くなると、その鎮魂歌ともいべき作品「終りなき祝祭」を上梓するのである。著者の辻井喬は、その「終りなき祝祭」の「序章」で、「壮吉は終生、両親の関係を映像化することを願っていた」<sup>161</sup>と述べ、壮吉の助監督を長年務めていた人物から聞いた話として、以下のことを紹介する。

その助監督の話とは彼〔壮吉〕が三島由紀夫の短篇を素材にした作品を撮っていた時のことである。夜、ロケーションの先の宿舎で酒が入った時、

「僕ね、同じ三島由紀夫の原作でも『午後の曳航』の方を撮りたかったんだ」と言い出した。この『午後の曳航』のクライマックスは、母の情事を少年が隣室の腰板の穴から覗く場面なのである。助監督が「自分も読んで」と答えると、

「あの少年と同じ経験しているんだ。もっとも僕の場合、相手は女性なんだよ、男じゃない、父親はほったらかしにされて、一晚中部屋の中を歩いている。そんな両親の様子を僕が見ている」と彼〔壮吉〕は言った<sup>162</sup>。

それでは、三島由紀夫の「午後の曳航」のクライマックスの場面に対応して、辻井喬の「終りなき祝祭」では、その場面が、どのように描かれているのであろうか。主人公は田能村壮吉。その父親は善吉、母親は文。勤務していた学校の生徒を連れて飛騨高山に疎開していた善吉が、途中で一度東京の自宅にもどる。着いたのは夏の夜の一〇時に近かった。玄関から入ろうとしたが、家のなかは静まりかえっている。秩父の知り合い先へ疎開したのかと思い、善吉はそっと庭先に回ってみた。

床まである上部がガラスの戸が開いたままになっている。善吉は留守のあいだに草がずいぶん伸びたと思った。部屋のなかには中空に上った月の光の奥になってよく見えない。蚊帳が吊ってあるのが分った。夜具が白く浮上ってくる。人が浴衣を着て寝ている姿がぼんやりと見えてきた。声を掛けようと一步踏み出して善吉は思いとどまった。彼女の動きが不自然なのだ。と、腕のようなものが、白い浴衣の肩を捕えた。寝ているのは一人ではない。小さい呻き声が聞え、それを制止するような囁きが続いた。……「誰ですか、あんたは」文の怯えた声があがった。……隣の部屋から誰かが起きたらしく、そっと、部屋の奥に入ってきた。壮吉らしかった<sup>163</sup>。

著者の述べるところによれば、「終りなき祝祭」は、壮吉が死に向かう病床で書き残した手記が土台になっている。手記自体は公表されていないので、正確には何もわからない。これまでの自分の人生のなかにあつて壮吉が受け止めた、消しがたい強固な思いが反映されているだろうと想像される反面、心身の衰弱とあいまって、正確な記憶が徐々に溶解した内容となっている可能性もあるのではないだろうか、とも思われる。いずれにしても、手記の実態は別にして、「純文学書下ろし特別作品」という文字が添えられたこの「終りなき祝祭」は、あくまでも創作という虚構空間での出来事の描写であり、したがって、描かれている内容がすべて真実あるとは限らない。おそらくは、そのほとんどが絵空事であろう。しかしながら、内容や形式はどうであれ、生前公に口に出せなかった苦悩の実相を、あるいは逆に、何としてでも口に出したかった苦悩の残像を、没後、本人に代わって、友人の筆をして語らしめた真の力は、それは一体何だったのであろうか。「手記を読み終った時、私には田能村善吉と妻の文の愛憎の構造をはっきりさせることが、旧友の心を慰める一番の方法のような感じがしてきた」<sup>164</sup>。この言葉で「序章」は終わり、「第一章」の田能村文の検挙の場面から物語ははじまる。

一枝と俳人の中村汀女が知り合うのも、戦争末期の耐乏生活を強いられていた、ちょうどこの時期であった。汀女は、自伝『汀女自画像』のなかで、こう書き記している。

作家の大谷藤子氏とは近所だから知り合い、そして紹介してもらったのが富本一枝氏である。さっそく買い出しに連れられた。小田急線の鶴川に住まっておられる神近市子氏を「たよる」というのであった。初対面、わが家にあつたビールを二本おみやげにした。神近家にはいろいろな人たちが来ていられたようだ。その日もさっそくビールをあけられていたが、富本一枝氏が、「あら、私にも飲ませて下さいよ」と言われたのに、私はちょっと驚いた。「女にもやはり飲む人がいるのだなあ」といった感じであった。神近家の中つぎにしてそこから三里入ったところの農家へ行く。ひたすら

に歩けばよかった<sup>165</sup>。

こうした一枝の買い出しと一緒に行ったのは、汀女だけではなかった。しばしば大谷藤子も一枝に同伴することがあった。一枝の戦時スタイルがおしゃれだったことが、大谷の記憶に残っているし、何よりも一枝は、大谷にとって不思議な魅力をもつ存在であった。

私は夫人に誘われて食糧の買い出しに出かける日が多かった。電車で三十分ばかり乗り、それから一里の道を歩くのである。低い山々の間にある村の街道を、長身の夫人は網袋をしょって軽快な足どりで歩いて行った。私は夫人がそのころ人々の日用品になっていたリュックサックをしょっているのを見たことがない。麻のしゃれた網袋の中には食糧を包むための風呂敷や袋がいられたのだ。……夫人は不思議な魅力があつて、そばにいと私を合わせな気持ちにさせた。「神近さんのところへ寄りますよ」<sup>166</sup>。

往復二里の買い出しの帰りに、ふたりして神近市子の家に立ち寄り、一休みすることもあつた。「『お茶だけでなく、何かお出しなさいよ』夫人は神近氏にこう言つたりして、のびのびとした。……『これいつあげましたか』夫人はそんなことを言いながら、お菓子皿をとりあげてつくづく眺めたりした。……その〔神近の住む〕農家も、後になって空襲で焼けた。……『ほんとうに丸焼けですよ』夫人は気の毒そうに言つて、とりあえず衣類などを行李につめて届けるのだ」<sup>167</sup>。

一枝が大谷と一緒に買い出しに行った帰りに立ち寄るとき、神近は、若き日の自分と尾竹紅吉（一枝）との女同士の親密なかかわりを思い出したかもしれなかつた。のちに神近は、雑誌のインタビューに答えて、このようなことを告白している。

また、尾竹紅吉のことですが、平塚〔らいてう〕さんと同性愛だつたというお話があります。それで奥村博さんの出現かなにかで、尾竹さんが平塚さんに反感をもつことがあるんです。そのときに、精神的な同性愛というようなものでしょうね、尾竹さんが私に密着していたことがあつたのです。で、あそこに来いとか、あそこに移つてこいとか、だから私は彼女の家に、一ヶ月ぐらい泊まっていたことがあります<sup>168</sup>。

空襲が激しくなつてくると、村々を訪ねて食料を調達するこうした買い出しの生活も限界に達し、米軍が投下する焼夷弾から命を守るために、富本家も、祖師谷の家を離れ、疎開を余儀なくされた。大谷は回想する。「富本さん、家中で秩父の私の実家に疎開してみえたりしました」<sup>169</sup>。

一九四五（昭和二〇）年四月、米軍、沖縄本土に上陸。八月、広島と長崎に原爆投下。そしてポツダム宣言を受諾し、日本は敗戦した。八月一五日、終戦のこの日を、当時東京美術学校の教授をしていた憲吉は、疎開で出張していた岐阜県の飛騨高山で迎えた。一枝と子どもたちは、大谷の実家のある埼玉県秩父で——。すべてが終わった。憲吉五九歳、一枝五二歳の暑い夏だつた。

## 第一〇章 憲吉の出奔と戦後生活

### ——死のうと思って、身の回りのものを焼き捨てた

戦争が終わった。憲吉と一枝の、戦争にも似た関係も、そのとき終わった。寒冷地における焼き物の試作のために残留していた飛騨高山から、一九四六（昭和二一）年の一月に祖師谷にもどると、六月には家を出て、単身憲吉は、安堵村へ帰って行った。のちに憲吉は、『日本経済新聞』に掲載された「私の履歴書」のなかで、こう綴っている。

私にしてみれば、二十年間の東京生活の間に、船腹の貝殻のようにまといついたすべての社会的羈絆や生活のしみを、敗戦を契機に一举に洗い落としてしまったかったのである。すでに郷里の大和へ一人で引き揚げる覚悟もついていた。私は陶淵明の帰去来の辞の詩文を胸中ひそかに口ずさみながら大和へ発った。……あれもこれも投げ捨てて、とにかく裸一貫で私は大和へ帰った。東京でなにものかに敗れたというような、みじめな思いはちりほどもない。耳順六十歳にして、私はむしろ軒昂たる意気込みだった。ロクロ一台、彩管一本をかたわらに私は新しい制作への意欲に燃えていたともいえよう<sup>170</sup>。

ここには、離別の具体的な理由については、何も書かれていない。なぜ憲吉は、家を出る必要があったのであろうか。一九六九（昭和四四）年九月の『婦人公論』（第五四巻第九号）に掲載された、女性史研究家の井手文子による「華麗なる余白・富本一枝の生涯」のなかに、以下のようなことが書かれてある。

なぜ、憲吉は一枝のもとを去ったのであろう。その別離の理由を水沢澄夫はある日彼から聞いた。長くためらったのち、憲吉は「あの人はレスビアンだった」と言ったという<sup>171</sup>。

水沢澄夫は美術評論家であり、憲吉との交友は長いものの、一九五七（昭和三二）年一〇月の『三彩』（第九二号）に「富本憲吉模様選集」と題してその書評を寄稿しているので、憲吉からこのことを聞かされたとすれば、おそらくはこのころの時期だったのでないかと思われる。憲吉が語ったとされる「あの人はレスビアンだった」という言葉が表に出るまでには、水沢と井手というふたりもの人物が介在する。したがって、この言説が絶対的に正確かどうかについての確証は何もない。しかしながら、憲吉も一枝も、本人たちは直接何も語っておらず、この水沢と井手を経由した憲吉の言葉が、現段階にあって唯一、ふたりの離別の理由を知るうえでの手掛かりを与えているのである。これが事実であるとするならば、憲吉は、結婚以来の一枝のセクシュアリティにかかわる問題に、もはや耐えかねて家を出たことになる。

家を出るにあたっては、財産の分割は、どのように行なわれたのであろうか。離別の原因が一枝にあるのであれば、贈与の必要性も生じなかったであろうし、逆に慰謝料さえ請求することができたのかもしれない。しかし憲吉は、そのようにはしていない。その

ことをうかがい知ることができる一通の手紙が残されている。この手紙は、一九四八（昭和二三）年の夏に、陶の夫の海藤日出男に宛てて、憲吉から出されたものである。以前憲吉が仕事場としていた工場<sup>こうば</sup>を少し改装して、自分たちの生活空間として使わせてもらえないかという陶夫婦の問い合わせに対する返事らしい。

要事から書きます 工場は勿論 あの家に附属したもの故、諸君のうち誰が使用され様とも結構であります 私は去年八月申し送りました通り家の半分を一枝に その残りの半分を三人におくりましたから私のものではありません、あの家には私の書物や衣服がありますが帰へって行くのがいやでモウ一切捨てるつもりで居ます<sup>172</sup>

この手紙から、家の半分を一枝に、残りの半分を陽、陶、壮吉の三人の子どもに分与したいとする意向が、すでに家族に伝えられていたことがわかる。これにより、祖師谷の家屋敷と工場はもちろんのこと、家具調度品から作者留め置き作品に至るまで、さらには預貯金や野尻湖の別荘も含めて、すべて家族に残したまま憲吉は東京を離れたものと推察される。まさに裸一貫、生まれたままの姿で、生まれ故郷に帰ったことになる。これが、原因や理由はどうであろうとも、自分独りの一方的な判断で東京を去り、その結果稼ぎ手を失うことになった家族への、憲吉なりの償い方、ないしは責任のとり方だったのかもしれない。あるいは、一枝とのいっさいの関係を断とうとする、離縁にあたっての憲吉の強い意志の表われだったのかもしれない。さらには、折半さえもしなかった理由には、今後の壮吉の養育費や教育費などへの配慮が含まれていたのかもしれない。このとき憲吉は、東京美術学校にも帝国芸術院にも辞表を提出した。こうして憲吉は、家族だけではなく、すべての社会的地位も、そしてすべての財産も放棄したのだった。

生まれ故郷の安堵村に帰還したものの、もはや瀬戸物を焼く窯はなく、懐の不如意に耐える。一九四七（昭和二二）年の秋も深まり、寂寥感が憲吉の胸に忍び寄る。このとき憲吉は、次のような切々たる詩を書いた。

半ば枯れたる萩  
風になびき倒れむとして倒れず  
あゝ秋風になびく萩  
窯なく放浪のわれに似たる  
あゝ秋風になびく萩  
われに似たる<sup>173</sup>

このあとに「昭和二十二年立冬 大和國安堵村舊宅にて 憲吉寫並文」の文字列が続く。この詩片と茶碗の絵が、水原秋櫻子が主宰する句誌『馬酔木』の一九四八（昭和二三）年正月号の巻頭詩に用いられた。その後憲吉は京都に移り住み、ここを起点として晩年の製陶活動が開始されてゆく。

それでは、一方の一枝の戦後の生活は、どのようにしてはじまったのであろうか。これについて神近市子が、次のように語っている。

晩年は夫君と別居され、青春時代の華やかな紅吉を思うと涙をそそられるような淋しい日々だったが、花森安治氏が彼女をかばって、いつまでも『暮しの手帖』に執筆を依頼した。中村汀女氏も彼女を選者に迎えて、最後まで彼女の才能を評価された。その意味では、一枝さんは幸せな人であった。私たちの友情も終生変わらなかった<sup>174</sup>。

前述したように、一枝と汀女が知り合うのは、戦争末期のころで、大谷藤子の紹介であった。戦時下の買い出しや疎開を通して女性たちは協力し合い、それに伴い交流の輪も広がっていった。汀女は、こう書く。「この縁故で、私たちは神近家に疎開荷をあずけ、また農家にも荷をあずける日が来た。また、二十二年に創刊した、主宰誌『風花』の編集も富本一枝氏がやって下さることになったのである」<sup>175</sup>。

『風花』創刊号が発行されたのは、奥付によると、一九四七（昭和二二）年の五月一日であった。さらにこの創刊号の奥付には、編輯者に富本一枝、發行者に中村汀女の名前が記載され、發行所は風花書房で、所在地の住所は、汀女の自宅の「東京都世田谷區代田二ノ九六三」となっている。また、「本號特價十八圓」の文字も並ぶ。目次に目を移すと、最初の行に「表紙・扉・カット」として富本憲吉の名前が明記されている。この創刊号には、九人の執筆者が寄稿し、そのなかには、武者小路實篤の「畫をかく事で」、室生犀星の「（俳句）露の臺」、そして河盛好蔵の「何を讀むべきか」などが含まれていた。汀女は、このような著名人への原稿の依頼について、「こうしたお願いなども編集をやって下さった富本一枝氏の配慮であった。諸先生にはほとんど稿料というものもさしあげ得なかった」<sup>176</sup>と、自伝のなかで回顧している。そして巻末の「後記」に、編集を担当した一枝の言葉を読むことができる。一枝は、このように書き出す。

創刊號の編輯後記を書かうとして、私は感慨深い思ひです。昨年十二月から約半歳、本誌を發刊するにつけて苦勞しました。中村さんも私も、出版事情が日に日に悪い時期に、雑誌を出すといふことがどんなに困難な仕事であるかと云ふことは充分計算にいれておりましたが、さて仕事にかかってみると、豫期しない障害が次々にやつてきて、幾度か引き返したくなりました。それでもとにかく此處まで辿りつきました。それだけに嬉しさ格別です<sup>177</sup>。

一枝は、「私は感慨深い思ひです」と書く。その思いは、単に、大きな苦勞のうちに何とか創刊することができたという達成感だけに止まらず、この句誌の第一号の「後記」を書くにあたって、かつての『青鞥』や『紅番花』のときのことにはわかには蘇り、そうした過去の思い出とない交ぜになって、感慨は一層の複雑さを増していたものと思われる。あのときは、憲吉を知ったばかりの時期だった。他方いまは、憲吉が家を出たばかりの時期である。その間の結婚生活は、自分にとって一体何だったのであろうかと、ふと自問したとしても不思議ではない。憲吉に表紙のデザインを依頼したのは、いつだったのであろうか。一枝がいうように「昨年十二月から約半歳」が編集期間であったとするならば、すでに憲吉は祖師谷を出て、家にはいない。もしこの期間に依頼しているとすれば、一枝は安堵村の憲吉に、この件で連絡をとったことになる。思い起こすと一枝は、『青鞥』や『紅番花』のときも、安堵村にいる憲吉に連絡をとり、木版に使う下絵や表紙を飾る原

画の製作を依頼していた。くしくも一枝は、この『風花』の編集作業を通して、若い日のあのと全く同じような内容と方法により、憲吉との交流を再体験したのであった。しかし違うのは、『青鞥』や『番紅花』のときは、ふたりの関係のはじまりを意味したが、『風花』の場合は、その終わりを意味していた。

一九四八（昭和二三）年の二月一日に発行された『風花』第一〇号を開くと、「風花集」に、平塚明子（らいてう）と中江百合（百合子）の作品が、そろってそれぞれ三句、掲載されている。しかしながら、それ以上に目を引くのは、この号に「少年少女圖書出版山の木書店」の広告が掲載されていることである。広告されている書籍は、吉野源三郎著『人間の尊さを守ろう』（定価一二〇円）、久保田万太郎著『一に十二をかけるのと 十二に一をかけるのと』（定価一三五円）、中澤不二雄著『ぼくらの野球』（定価七〇円）の三冊で、出版社の所在地は「東京都世田谷区祖師谷町二ノ八二九」となっている。一枝は、この時期あたりから、『風花』の編集業務から少しずつ離れ、「山の木書店」という出版社を立ち上げると、児童圖書の刊行事業に全力を注ぐようになっていったものと思われる。

この「山の木書店」については、ほとんど資料がなく、陽の息子の富本岱助が後年書いた「祖母 富本一枝の追憶」が貴重な手掛かりを与えている。それによると、このような背景から「山の木書店」は生まれた。

祖母についての思い出は、数多くあるが、とりわけ印象的な事と言えば終戦直後に設立した「少年少女図書出版・山の木書店」もその一つであろうか。

戦争が終って間もなく昭和二十二年、祖母は私の母、陽と共に児童向け専門の出版社を設立する爲に準備を進めていた。スタッフは祖母と母の二人しか居らず、資金の調達を始めとして、当時統制下にあった紙の調達や、原稿の執筆依頼、印刷所の手配、と言った慌しい日々を送っていたが、或る日、祖師谷の家に出資金が大きなトランクで持ち込まれた事があった。当時は五銭・十銭といった少額の貨幣がまだ充分通用する時代であったから、その百円札の束が山になっている様子は子供心にもかなり迫力を感じ、家が随分と金持ちになった様に思ったものだった。

この出版社に出資された方は、祖母の友人の甥で、秩父の山林業を手広く営んでおり、そこから「山の木書店」と名付けられたそうである<sup>178</sup>。

「山の木書店」は、このような経緯をたどって、一枝と陽の親子の手によって誕生した。岱助が一〇歳になるころの話ではないだろうか。ところで、ここに岱助が書いている、この新会社に出資をした、秩父で手広く山林業を営む祖母の友人の甥とは、どのような人物だったのであろうか。すでに述べているとおり、戦争末期、憲吉は東京美術学校の「高山疎開」に伴い、飛騨高山で学生たちと一緒に生活をしていたが、一方、残された一枝たちは、大谷藤子の実家のある秩父へ戦火を逃れて疎開した。おそらくこのときに、甥として大谷から紹介され、面識を得た人物なのであろう。憲吉が家を出ると、一枝と陽は、児童圖書の出版会社の設立を思い立ち、そのための資金援助をこの大谷の甥に求めたものと思われる。こうして出版事業に理解を示し、出資してくれる人も現われ、一枝と陽にとっての戦後生活は、一見順調に滑り出したように見えた。しかし、「山の木書店」の経営は、

その後決して順調に推移したわけではなかった。岱助の追憶は、次のように続く。

紆余曲折のすえ昭和二十三年十一月に第一冊の『人間の尊さを守ろう』（吉野源三郎著）が発行された。

戦後の混乱期の最中に、あえて児童向けの本を出版する事は、単に生計の爲だけになされたのではなく、子供達に良質の本を与えたい、と言う祖母の思いが強く働いていた様で、さかのぼって見ると、幼かった娘達と共に夫婦合作の手づくりの家族小冊子『小さな泉』にその原点があったのではないだろうか。その二十数年にわたる思いが、「山の木書店」に結びついて行き、第一冊目が発行されたのだが、幼い私が、広間に積まれた返本の山の中で遊んだ記憶がある程なのだから、あまり売れ行きは良くなかった様であった<sup>179</sup>。

ちょうどこのころ、一枝の身の回りでひとつの出来事が起きた。作家の近藤富枝が、一九八二（昭和五七）年発刊の自著『相聞 文学者たちの愛の軌跡』のなかで記述している話である。記述内容に即してその出来事へ至る背景を要約すると、だいたい次のようになる。一九四四（昭和一九）年の八月、富本一枝から「特別の交際」を求められた大谷藤子は、一枝には過去に多くの女性と関係を重ねていた経緯があったため、躊躇するところがあったものの、ついにそれに応じる関係になり、一九四五（昭和二〇）年春からの疎開中も、藤子の母方の実家で一緒に共同生活をするほどの親しい仲になっていたが、戦争が終わり東京にもどると、一九四八（昭和二三）年ころ、S女にその大切な愛を奪われてしまった。こうした背景から、この出来事は生まれた。

あるとき藤子は一枝の家でS女と出会い、争ってもみあいとなり、眼鏡をとぼしてメチャメチャにするという事件があった。藤子もS女も和服一本槍なので、八つ口はさげ、帯はほどけ、どちらも惨澹たる姿だったにちがいない。S女とて藤子より一歳年長の世帯持ちなのである……。

藤子は一枝の経営する少年少女出版、山ノ木書房に、秩父の山持ちの甥を動かして出資し、S女は自分の主宰する歌誌に、一枝の随筆やカットを採用して生活を授けた。どちらも一枝を独占しようとして懸命であった。しかしこの闘いは世なれぬ藤子の負けであった<sup>180</sup>。

富本一枝と大谷藤子は実名が使われている。この一文が世に出たとき、ふたりはすでに世を去っていた。明らかに「S女」とは、当時存命していた中村汀女のことであろう。旧姓が斎藤なので、そこから採られたイニシャルだったのかもしれない。「歌誌」とは、句誌の『風花』を指しているものと思われる。著者の近藤富枝は、一枝が大谷に求めた関係を「特別な交際」という表現を使っている。もし一枝がこの時期、自分の心の性を「男」としてはっきりと認識していたのであれば、「特別な交際」は、たとえ女同士であろうとも、決して「同性愛」などではなく、それは、れっきとした「異性愛」を意味する。一枝とS女とのあいだにも、同様の「特別な交際」が存在していたかどうかはわからない。しかし、双方に何らかの好意的感情が働いていたことは疑いを入れないだろうから、この三

者は、いわゆる「三角関係」に近い間柄にあったわけであり、つまり、この出来事は、一枝という「男」を巡る、ふたりの女による奪い合いだったということになるのか。

以上のような判断が可能となるのは、何はともあれ、近藤の描写内容が、いっさい疑う余地のない真実であることが前提となる。創作的な手が加えられていたり、あるいは別の何か思惑によって脚色されていたりしていれば、話はすべて振り出しにもどる。

『女人藝術』についての本を執筆していた尾形明子は、大谷藤子が亡くなる年（一九七七年一月没）の夏に直接本人に電話をし、一枝についての回想を聞き出している。

戦争の少し前ごろから親しくなりまして、富本さん、家中で秩父の私の実家に疎開してみえたりしました。感覚の鋭い魅力的な人でした。背が高くて、ちょっと首をかしげるのが癖でした。一時ちょっとしたことから気まづくなってしまいました。晩年はお気の毒でした。富本憲吉さんが別の女の人と暮らしていろいろ辛いこともあったようです。淋しがり屋で子供っぽさの脱げきらない人でしたから<sup>181</sup>。

大谷のいう「一時ちょっとしたことから気まづくなってしまいました」の意味する内容が、この出来事を指しているのであろうか。もっとも、それだけでは、この出来事が事実であった決定的な証拠とはなりえないが。

この時期、別のもうひとつの出来事が、一枝を襲った。一九四九（昭和二四）年一〇月二五日の『毎日新聞』（大阪）に目を移すと、「秋深む温泉郷 女弟子と精進の絵筆 夫人と別居の陶匠富本憲吉氏」という見出しをつけて、憲吉が石田寿枝とともに奥津温泉に遊ぶ様子を報じている。長文の記事であるため、以下の引用はその一部分である。一〇月五日ころから滞在し、街を散策するふたりの姿が、いつしか人のうわさになりはじめた。記者が、滞在先の河鹿園を訪ねた。記事は、次の一節からはじまる。

吉井川上流の温泉郷“奥大津”のホテル、河鹿園の奥まった二階の一室に絵皿をならべてしきりに絵筆を運ぶ老陶匠とそのかたわらで毛糸の編物をしながら食事から一切の身のまわりの世話をしているその女弟子との厳しい師弟の規律の中にも和やかな愛情あるひたむきな生活が去る五日ごろからはじまった。……時折りこの奥津村（岡山県苫田郡）の湯の街に散策の歩を運ぶ二人の姿はいつしか人のうわさを生みはじめた。……一昨年夏以来、東京世田谷区祖師谷二丁目の自宅から姿を消し夫人一枝さん（五六）とは別居して京都の清水寺近くの五条坂の陶工松風栄一氏の一室を借りうけた富本憲吉氏は近く出版する「富本憲吉作品集」の原稿執筆のためとはいえ、ひよつこりこの河鹿園に女弟子とともに姿をみせたのだった<sup>182</sup>。

記事のなかには、憲吉が記者に語った談話の内容が、次のように引用されている。

石田君は郷里が島根県なので帰り道に一寸寄ってもらい仕事の手助けを頼んだのがつい長くなってしまった。妻とは性格が合わぬので別居したが戸籍はまだ切れていない。東京の祖師谷で“山の木書店”というのを経営しているらしいが生活は相当苦しいと聞いている。石田君とは仕事の上だけのつながりであるが私が石田君と奥津に来てい

ることがわかれば世間は決してそうは思わぬだろう。二、三年のうちにははつきりしたいと考えている<sup>183</sup>。

島根県の出身の石田とは帰省の帰り道にここで合流し、仕事の手助けをしてもらいながら、長期の滞在になったようである。「先生」「石田君」と互い呼び、かいがいしく世話をする夕食の際の石田の振る舞いを織り込みながら、さらに記事は続き、石田の経歴について、こう記述する。

東京の女子美術を中退。当時官吏であつた父と一緒に朝鮮の京城に渡り戦後引揚げて来た石田さんは在籍中からずっと絵画の創作を続けていたという。いまでは父母とも他界し三高を卒業して大学受験準備中の弟さんと京都で一緒に暮しながら現在富本氏が仮寓している松風氏の元で陶芸の勉強をしているそうだ……石田さんは名を寿枝といい年は三十三、京都左京区川端丸太町に住む人で昭和二十三年、富本氏が京都松風陶歯会社内に窯を築いたとき、松風工業研究所で輸出陶器の研究を続けていた石田さんは助手になり、同年十二月松風工業を退いて富本氏の身のまわりの世話などをするにいたつたもの、一方、一枝夫人は平塚雷鳥女史の青鞥社に尾竹紅吉のペンネームで活躍した女性解放運動の先駆者である<sup>184</sup>。

ある意味でこの記事は憲吉にとって都合のよいものであつたかもしれない。というのも、著名既婚男性が若い女性と温泉地に長期滞在していれば、仕事上のつながりといえども、「世間は決してそうは思わぬ」わけであり、石田との関係をいつ、どのような方法で世間に公表するかを、この滞在に至るまでのあいだに、憲吉は思案していたとも考えられるからである。翌春には、京都市立美術大学における教授採用の発令も待っていた。そうした観点に立てば、この記事は、率直に記者の質問に応じていることなどから判断して、必ずしも不意を突かれた暴露記事ではなく、因果を含めて懇意の記者に書かせたものだったのかもしれない。

以上がこの記事の本文であり、そのあとに、「別れようと思わぬ」という小見出しをつけて、次のような一枝の談話が続く。

ことしの三月ころ松風さんから主人が助手の女の方と結婚する意志があるらしいと聞きましたが信用しませんでした。私は別れようとは夢にも考えたことはありません。朝夕、富本の作品を眺めて暮しておりますが、富本の心の奥には私があることと確信しています。富本の幸福のためによく話合つて見ましょう<sup>185</sup>

本文記事のなかの「二、三年のうちにははつきりしたい」という憲吉の言葉は、今後離婚にかかわる協議に決着をつけ、正式に籍を入れて、石田と結婚したいという意味のことを示唆しているのであろう。ところが一枝は、「私は別れようとは夢にも考えたことはありません」という明確な意思表示をする。なぜ別れようとならないのであろうか。また一枝は、「朝夕、富本の作品を眺めて暮しております」ともいう。憲吉が、「妻とは性格が合わぬので別居した」と、性格の不一致を離別の理由に挙げ、率直に記者に語っているのに

対して、一方の一枝は、「富本の心の奥には私があることと確信しています」と言明する。どこからそのような自信は生まれてくるのであろうか。いずれにしても、事の推移から判断すれば、談話のなかで、「富本の幸福のためによく話合つて見ましょう」とはいいながらも、結局のところ、離婚という結末へ向かうことはなかった。「憲吉の幸福」とは、一枝にとっては、たとえ現実には破綻していても、いつまでも自分との夫婦関係を、形式的ではあれ維持し続けることだったのかもしれない。しかしそれは、真の「憲吉の幸福」ではなく、あくまでも「一枝の幸福」にすぎなかったのではあるまいか。一枝のいとこの尾竹親は、自著の『尾竹竹坡傳——その反骨と挫折』（一九六八年刊）のなかで、次のように書く。「その間に三人もの子をもうけながら、実質的な夫婦関係のないままに、戸籍の上だけの反古のような妻の座を引きずっていた一枝の心情は今もって私のわかりかねることの一つである」<sup>186</sup>。

それでは、石田寿枝という女性は、そもそも、どのような人物だったのであろうか。そして、憲吉はこの女性といつ、どのような経緯で知り合い、その後、どのような暮らしをしたのであろうか。正確にはほとんど何もわからない。伝聞や風評は別にして、先に紹介した、奥津温泉での憲吉と石田の様子を伝える『毎日新聞』の記事が、現時点におけるおそらく唯一の両者の間柄を示す文書資料となっており、それ以外には、手掛かりになる有効な資料が見出せていないのである。しかしながら、神近市子の言説のなかに、そのことに少し触れるような内容の箇所が残されている。「富本一枝 相見しは夢なりけり」と題したエッセイにおいて、神近は、このようなことを記述しているのである。一枝が亡くなった翌年の一九六七（昭和四二）年の一文である。

ある日憲吉氏は、小さなカバン一つ持ってフラリと家を出られ、その儘帰られなかった。若き彼女が京都に待っていたかどうか、それは私には分からない<sup>187</sup>。

さらに神近は、別のエッセイ「朋友富本一枝」では、こう回顧する。こちらは、それから六年後の一九七三（昭和四八）年に執筆されたものである。

彼女〔一枝〕の末路は悲しかった。それはどうしたことか、富本氏が別の女の人のところに行ってしまうたからだった。岐阜あたりのどこかで出張焼物をしておられた時季に知合った婦人だとかで、富本氏は夫人のところに戻らず、行き切りになってしまった。そしてその行先で死亡された<sup>188</sup>。

上のふたつの引用文は、何を語っているのであろうか。生前一枝が神近に漏らした内容に基づいて書かれたものであることは、ほぼ間違いないであろう。そうであれば、このことについての一枝の理解は、東京美術学校の教授をしていたときの岐阜県（飛騨高山）への出張の際に憲吉はこの女性と知り合い、戦争が終わると、駆け落ちでもするかのように小さな荷物ひとつを手にしたままふらりと家を出て、この女性の住む京都に向かい、それ以降一度も帰宅することなくその地で死亡した、ということになるだろうか。しかし、前述の『毎日新聞』の記事は、「当時官吏であつた父と一緒に朝鮮の京城に渡り戦後引揚げて来た」あとの「昭和二十三年、富本氏が京都松風陶歯会社内に窯を築いたとき、松風工業研究所

で輸出陶器の研究を続けていた石田さんは助手になり、同年十二月松風工業を退いて富本氏の身のまわりの世話などをするにいたった」と、伝えている。この記事の記載内容が全き事実であるとするならば、戦時中の疎開先の飛騨高山でふたりが出会っていた可能性は、皆無に等しいであろう。であるならば、飛騨高山で知り合った女性を追って憲吉は家を出たとする一枝の理解内容は、あろうことか、創作された虚偽なるものとなる。なぜ一枝は、真実と異なる理由でもって憲吉の大和出奔を説明しなければならなかっただろうか。自己のセクシュアリティに関してカミング・アウトできなかったことに起因する、やむを得ない発話だったのではないかと推量されるものの、朋友の神近市子をしてそう信じ込ませてしまった一枝の妄言の罪は極めて重いものとなろう。

山の本書店も最終的に行き詰ってしまった。この時期一枝は、まさしく寒風が身をたたく荒れ地の片隅に、独り無言のまま立っていたものと思われる。いとこの尾竹親は、晩年の一枝がこう漏らした、と記す。「戦後、私は一時死のうと思って、古い手紙など、身のまわりのものを焼き捨てたことがありました……」<sup>189</sup>。この挿話が、憲吉が祖師谷の家を出た一九四六（昭和二一）年ころのことなのか、大谷藤子と中村汀女と一枝とのあいだにいがみ合いが生じた一九四八（昭和二三）年ころのことなのか、憲吉と石田寿枝が同居をはじめたと思われる一九四九（昭和二四）年ころのことなのか、それとも、「山の本書店」の倒産が決定的になった一九五〇（昭和二五）年ころのことなのか、「戦後」というだけであって、正確な時期を、必ずしも特定することはできないものの、数々の失意に見舞われるなか、一時、一枝の心情が死へ向かおうとしていたことは確かであろう。

## 第一章 再起と憲吉の死

——逢うことを夢なりけりと思ひ分く心の今朝は恨めしきかな

「山の木書店」の倒産に際しては、一体何が、あるいは誰が、一枝を支えたのであろうか、それを語らせるにふさわしい資料は、いまなお見出せない。高井陽と折井美耶子は、「山の木書店が残した負債を、肩代わりしたのは、暮しの手帳の花森安治だった」<sup>190</sup>と書いている。とはいえ、いかなる根拠も示されていないために、もはや再検証はできない。たとえそれが事実であったとしても、負債総額、肩代わりした時期や条件、花森がその役を買って出た理由や経緯について、いっさい言及がなされておらず、それゆえに、それらのこともまた、すべて不明のままとなっている。しかしながら、結果から判断してはつきりいえることは、一枝の再起は、花森安治がつくる季刊雑誌である『暮しの手帖』に執筆の場を得ることによって果たされた、ということになる。

一枝の第一作は、「奥さんと鶏」と題されたエッセイで、掲載号は、一九五一（昭和二六）年六月発刊の第一二号であった。近所に住む鶏を飼う夫婦の話が、その内容である。次は、「村の保育所」（一九五二年六月、第一六号）で、内容は、岡山県御津郡野谷村の保育所についての現地報告である。凶版も多く、臨場感が漂う。出出しは、こうである。

「朝霧の中を、山から田からこどもたちは野菜をさげやってくる。大根の子、人参の子、蕪、葱、玉葱、南瓜を頭にのせた子。こどもたちは毎朝こうして給食に使う野菜を家から運んでくる」<sup>191</sup>。そのあと、この村の子どもや母親たちの生活の一部が具体的にレポートされ、最後を一枝はこうした言葉で結ぶ。「言葉や形だけでなく、眞の意味で次ぎの世代をになう日本の子どもたちを健やかに守り育てるこそ、いい加減なことでごまかしてはならない事業であろう。そのためにも、二度とふたたび戦争にひきづりこまれたくないとこの村の托児所を見ながら私は心から願わずにはいられなかった」<sup>192</sup>。

エッセイとしては、さらにもう一編、「春未だ遠く」（一九五三年三月、第一九号）が続く。これは、母親がつくってくれた味噌汁についての回想である。冒頭、このような言葉ではじまる。「早春といつても、まだまだ朝のつめたさは、きびしい。ひとりで炊事仕事をやっていると、なにかにつけ台所に立つて亡つた母のことが思われる。とりわけ冬の日の朝晩、家族のために母が心を盡してこしらえた味噌汁のおいしさが思い出されて、気がつくといつのか私には母のつくってくれた味噌汁をこしらえていることが多かつた」<sup>193</sup>。このとき、母も父も一枝は亡くして久しかった。自身も満で六〇になろうとしていた。亡き母や父の面影が去来する日が、最晩年に向うなか、次第に多くなってゆく。

一枝がエッセイ（取材報告を含む）として『暮しの手帖』に書いたのは、以上の三編であった。しかし、一枝の才能は、これ以降、童話作家として開花してゆくことになる。「お母さまが読んできかせるお話」を『暮しの手帖』に連載しはじめるのは、「春未だ遠く」の一号前の第一八号（一九五二年一二月発刊）からであった。それまで、この「お母さまが読んできかせるお話」は、第一号から第三号までを木田久が、第四号から第一二号までを町田仁が、第一三号から第一六号までを山下毅雄が担当していたので、一枝は四代目の執筆者ということになる。第一七号は休載され、第一八号から、書き手に一枝を得て連載が再開された。この号に掲載された一枝にとって最初となる童話作品は、「おくびょうな

兎」であった。それよりのち、死去する一年前の第八〇号（一九六五年七月発刊）掲載の「遠い国のみえる銀の皿」に至るまで、国内外の御伽噺や寓話、民話や昔話などを題材にした「お母さまが読んできかせるお話」が、一枝の手によって紡ぎ出されてゆくのである。各号の「お話」につける影絵は、毎回藤城清治が担当した。かくして、少年少女図書出版「山の本書店」の理念は、長期間にわたる「お話」の連載という姿に身を変えて、残りの生を燃やし続けながら、再生への道をひた進むことになる。

神近市子が衆議院議員に当選した翌年の一九五四（昭和二九）年三月、アメリカの水爆実験により、南太平洋のビキニ環礁で操業していた日本のまぐろ漁船の第五福竜丸が被災し、その事件をきっかけに、原水爆禁止運動のうねりが高まっていった。ユージェニー・コットン夫人が会長を務める国際民主婦人連盟は、副会長であった平塚らいてうから送られてきた原子兵器に反対する訴えを受けて、世界母親大会を一九五五（昭和三〇）年七月にスイスのローザンヌで開催することを決定した。日本側はそれに呼応し、積極的な連帯の意思を示した。世界母親大会に一箇月先立つ、日本母親大会（第一回東京大会）は、豊島公会堂を全体会場として、二、〇〇〇人の参加者を得た。一枝も、そこにいた。ある参加者は、感動のあまり、そのときの一枝の姿がのちのちまで忘れられなかった。

第一回母親大会が豊島公会堂でひらかれたとき、あの大きな黒い瞳で、満員の会場を見つめながら「日本の女の歴史が一ページめくれたのよ、たいへんなことよ」とくり返していた〔富本一枝の〕姿が忘れられない<sup>194</sup>。

翌一九五六（昭和三一）年は、婦人参政権実施一〇周年にあたった。雑誌『世界』は、「日本における自由のための闘い」という視点から、『青鞥社』のころ——明治・大正初期の婦人運動——と題する座談会を組み、その収録記事を、この年の二月号（第一二二号）と三月号（一二三号）に分載した。出席者は、平塚らいてう（婦人団体連合会長）、山川菊栄（評論家）、富本一枝、村田静子（東京大学史料編纂所所員）の四名で、司会を林茂（東京大学助教授・政治学）が務めた。一枝の肩書きは、記載がない。この座談会は、おそらく生きた青鞥の本格的な最初の（あるいは最後の）口述であり、このころから、もはや単なる風聞や伝承の域を超えて、青鞥についての歴史分析が、時を得て加速することになる。

次の年の一九五七（昭和三二）年には、『世界』と同じ版元の岩波書店から、帯刀貞代の『日本の婦人——婦人運動の発展をめぐって』が出版される。ここには、明治末年以降の日本の婦人の解放へ向けての闘いの歴史が主として記述されていた。

続いて一九五八（昭和三三）年には、三一書房から松島栄一編による『講座女性5 女性の歴史』が刊行された。本書は、第一部において「女性の歴史——近代日本の女性の歩み——」が本論として記述され、第二部が「史料編」という、二部構成になっている。この「史料編」に、一枝の「青鞥前後の私」も所収されており、巻末の「あとがき」には、編者の松島栄一によって、「またこの本のために、貴重な体験の一端を話して下さり、激励してくださった富本一枝さんや帯刀貞代さんや三井礼子さんに深く感謝するものである」<sup>195</sup>という謝辞が述べられていた。

一九六一（昭和三六）年は、『青鞥』創刊五〇周年を祝う記念すべき年となった。この

年の九月三日に発刊された『朝日ジャーナル』（第三卷第三六号）は、座談会「婦人運動・今と昔——この半世紀の苦難の歩み——」を掲載した。編集子いわく。「婦人解放のあけぼのを告げた女性だけの雑誌『青鞥』が発刊されたのは、明治四四年九月一日。今年は、ちょうど五〇年目にあたる。その半世紀の間、いわば“新しい女”たちは、どのような道を歩んできたのであろうか。婦人運動の草分けの平塚らいてうさんらに『今と昔』を語ってもらった」<sup>196</sup>。この座談会へは、平塚らいてう、山川菊栄、富本一枝、市川房枝が出席し、井手文子が司会を担当した。一枝は、戦後の動向について、こう語っている。

そんなふうに女の発言権が、自分でも知らないうちに強まってきたのは、やはりもう戦争をしたくないという強い気持ちでしょうね。戦争中に、いろいろな意味で苦労してきたお母さんには、一番これが強かったわけですね。子どもを守る会、母親大会は、戦争はいやだ、子どもは死なせたくないというお母さんの気持ちが集まったので、新憲法は大いにそれを役立たせる基礎にはなっていたと思います<sup>197</sup>。

そして一枝は、これからの若い女性たちに期待を寄せる。

いまの母親大会とか、そういうものが、一つのデモに終わってはならないということもありますが、社会主義社会でないと、本当の解放はあり得ないにしても、いまの世では無理なことがたくさんあって、放っておいてはダメですから、やはりやっていたかなければならない。その意味では、これからの若い人たちに信頼する以外に手がなし、また恐らくうまくやるだろうと思っています<sup>198</sup>。

このときの座談会の司会を務めた若い井手は、出席者の美しい老いの姿に圧倒された。のちに、以下のようにそのときを振り返り、とりわけ一枝の身のこなしを、「日本女性の近代的完成の姿」という言葉でもって評した。

平塚らいてうが青磁色のキモノに白髪、白い扇をひろげた姿も優雅だったが、とくに富本一枝の黒い麻のキモノに白い博多帯、そして何よりも男もののような桐の正目の分厚い下駄が目に残った。その丸い形の木履物が、厚い絨毯の上をコトコトととおるのを見たとき、編集者は、あの人がいちばん素敵だといったものである。そこに日本女性の近代的完成の姿があった。彼女は柔軟な態度で、しきりに若い世代に期待し、「社会主義にならなければ」と言っていた<sup>199</sup>。

「富本一枝の黒い麻のキモノに白い博多帯、そして何よりも男もののような桐の正目の分厚い下駄」という装いが、どうして「日本女性の近代的完成の姿」として井手の目に映ったのであろうか。その説明はない。推測するに、井手は、「男尊女卑」から「男女同権」へと向かう近代的な性のあり方に照らして、一枝の着こなしをもって、男との十全たる対等性を表象している図像として認識したのではないだろうか。しかしながら、この図像は、近代化の過程を潜り抜け、時間をかけて徐々に完成したものではない。明らかに一枝にとって、この着こなしは、若き日の男物のセルの袴にマント姿にはじまる、一貫した、変わ

ることのない図像なのである。決して一枝は、生涯にわたって、ブラウスにスカート、そしてハイヒールといった女性性を表象する図像を自分の性別表現に用いることはなかった。あるいは、それを否定してきたとさえいえる。そのように考えるならば、この日の一枝の身のこなしは、「日本女性の近代的完成の姿」として理解するよりも、むしろ、「一枝個人の身体的性と異なる心の性を直截的に表現した進化形」として理解する方が、妥当ではないかと思われる。もっとも最後まで、一枝は、性自認に関して明確にカミング・アウトすることはなかった。

その一方で、この座談会で一枝は、「しきりに若い世代に期待し、『社会主義にならなければ』と言っていた」と、司会者の井手は回想している。しかしながら、自分がいかにして社会主義者になったのかとか、自分が思い描く社会主義とはどのようなものなのかとか、その実現のためにはどのような戦略と運動が必要なのかとか——こうした論点に一枝が明確に言及した資料は、いまのところいっさい見出せない。したがって、「社会主義にならなければ」という言葉は、若者に期待を寄せて、檄を飛ばしているようにも受け止められるものの、他方、一枝特有の空虚で観念的な一種呪文のようなものにも感じられる。もしその見方が正しければ、単純にも一枝は、自己の「心の轉移」にかかわって、「社会の変革」を展望していたことになる。

そうしたなか、翌一〇月、井手文子の『青鞥 元始女性は太陽であった』が、弘文堂から世に出た。「まえがき」の文頭において井手は、次のように書く。

「新しい女」の雑誌『青鞥』が発刊されてから、今年一九六一年はちょうど五〇年目にあたる。『青鞥』については、最近、思想史の面からも文学史の面からも、また婦人運動史の角度からも注目されはじめ、日本の近代化に果たした役割が評価されはじめた。しかしこの雑誌と、雑誌を核にした女性集団の動きの全貌は、まだ歴史のなかに正当に位置づけられていない<sup>200</sup>。

かくして本書において、半世紀の時の流れを経たいま、「この雑誌と、雑誌を核にした女性集団の動きの全貌」が、原資料に照らし出されて歴史のなかに配置された。他方「まえがき」の文末において井手は、「平塚らいてう、富本一枝その他の生存されている当事者の方々は、すべて温かい手をさしのべて下さった」<sup>201</sup> ことに対して感謝の意を表した。数年前に一枝から聞き取ったことが、第三章の「愛と性の自由」の執筆の際、その行間に反映されていったものと思われる。こうして、青鞥の尾竹紅吉にかかわる歴史研究の最初の原像が、井手文子というひとりの女性研究者の筆力を得て、ここに産み落とされたのであった。

それでは一枝は、井手のこの『青鞥 元始女性は太陽であった』を、どう読んだであろうか。その感想は、残されていない。想像するに、結婚直後に書いた「結婚する前と結婚してから」では、青鞥時代の自分をシャボン玉に例え、数年前に書いた「青鞥前後の私」では、下駄と草履を片方ずつはいた人生として、自分の歩んできた道を語った一枝である。必ずしも、自分がたどったこれまでの生き方に対して自信をもって全面的に肯定しているわけではない。そうした自分が、そのままのかたちで過去の人物として歴史のなかに納まることに、一枝は、何か焦りのようなものを感じたかもしれなかった。しかし、内容が事

実であれば、それはもはや消し去ることはできない。一枝が多く口を開かないのも、そうしたことに遠因があった可能性もある。その後、いとこの尾竹親は、一枝の青春とその後について、こうした見方を示した。

青春時代に受けた心の傷あとが、その後の彼女の人生のなかに後遺症として尾を引き、言葉というものに対する彼女の考え方を、大きく制約していたのではないかとと思われる。従って、一枝にあっては、青春というものが、遠い過去の形のままで凍結され、肉体だけが老化した感じを受け、彼女のなかには、明治と大正の女が、そのまま生き続けている印象が強かった<sup>202</sup>。

『青鞥』発刊五〇周年にあわせて一九六一年（昭和三六）年一〇月に出版された、『青鞥 元始女性は太陽であった』にあっては、その主題からして当然のことなのではあるが、一枝は「青鞥の紅吉」という一時代に留め置かれている。それでは、それ以降の一枝の実像は、どうだったのであろうか。親が観察するように、内面にあって「明治と大正の女が、そのまま生き続けている」、まさしく「遠い過去の形のままで凍結され、肉体だけが老化した」状態だったのであろうか。さらに親は、「私の知る晩年の一枝は、寡黙で、非常に用心深い女性であったように思う」<sup>203</sup>と書く。晩年の一枝がもしそうであったとするならば、それは何に由来していたのであろうか。ひとつには、いま述べてように、わずか一年あまりの短い青鞥時代に若い一九歳の娘が引き起こした自由奔放な過去の出来事にかかわって、発刊五〇周年を機会に再び照明が当てられた驚きや戸惑いに由来していたとも考えられる。またひとつには、一枝の場合、生まれながらにして体と心の性が一致していなかった可能性があり、もしそうであったとするならば、このことがもたらす精神的悲痛と混乱に由来していたのではないかと推測もできよう。それ以上に、いまひとつには、憲吉との結婚生活の破綻による離別がもたらした辛苦と孤独に由来していたことも十分に想像される。しかし、いずれもが基底にあって相互に関連し合っており、そのことを考慮に入れるならば、どれかひとつの事由がそうさせているのではなく、複雑に絡み合った重い心的状態が、一枝をして「寡黙で、非常に用心深い女性」に仕立て上げていたものと推量される。

一九六二（昭和三七）年の六月、「京都市東山区山科御陵檀ノ後七ノ三」に新築中であった住まいが完成し、憲吉と石田寿枝はそこへ引っ越した。転居通知は、東京の家族へも届けられた。そののがきを手にしたときに一枝の心中にはどのような思いが湧き上がったであろうか。それを確認できる資料はいまも見出すことはできない。このとき一枝は、満年齢にしてすでに六九歳になっていた。

年は一九六三（昭和三八）年に変わった。「父の病気が肺がんだと知ったとき、私は、離れ住む父のところへすぐにもゆきたいと思いました。……一月半ばの寒い日のことです。車窓にうつる風景が夜の明けはじめから白く変わってきて、その年はじめてみる雪げしきとなりました」<sup>204</sup>。陽は、以前に石田と会っていた。いつのことだったのか、どのような話をしたのか、そのことを正確に語らせる資料はないが、おそらくそのとき、父を母のもとに返してほしいと、石田に懇願していたのではないだろうか。そのため、京都へ行くのは、陽にとってつらかった。「父と暮らしているひとと、私はずっと昔、ひどくいい争ったことがあったのです。お互いに顔もみたくないといい切って別れて以来のことだったの

で、とりわけ気持ち重いのでした」<sup>205</sup>。陽は夫に同伴してもらっていた。そして、一枝から預かった手紙を携えていた。新居を訪ねるのも、はじめてであった。「私たちが通されたのは十畳の日本間で、そこにはいままで父が描いていたかと思われる絵巻きがひろげられ、絵筆のしたくが整っています。……庭に植えられた四方竹の細かい枝が時おり雪の重みをはじきとばしています。二、三時間もたったかと思われたころ、おりをみて父に母からの手紙を渡し、内緒ごとのように声を低めて、『お困りになれば私、もって帰りますから。』とつけ加えた」<sup>206</sup>。無惨な結果になった。「家に戻ってからも、私は持ち帰ってきた母の手紙のことをなかなか母にはいいだしにくいのでした。父が読んでくれたとは伝えたのですが、父の手で破かれたその閉じ目にはあわただしく引きさいたあとがあまりにも生々しい痕をとどめていたからです」<sup>207</sup>。

それは紺紙に認められた西行法師の歌でした。

——逢うことを夢なりけりと思ひ分く心の今朝は恨めしきかな——

余白に母の見舞いのことばが、二行ほど追記されてありました<sup>208</sup>。

らいてうが記するところによると、その見舞いの言葉は、「あたたかな春日のいちにちもはやくきて、おからだのためによい日となるようねんじて居ります。」<sup>209</sup>というものであった。らいてうは、この紺色に書かれた手紙について、このように述べている。「この紺色に一枝さんが、最後のおもいをしたためた手紙は、一枝さんの生前から、陽ちゃんが掛け軸に表装しておかれたそうですが、わたくしがこのことを聞いたのは、一枝さんが亡くなってのちのことです」<sup>210</sup>。憲吉によって引き裂かれた手紙ではあったが、陽にとっては、決して粗末にできず、母親の偽らざる真心を表わしたのものとして、大切に残しておきたかったのであろう。いずれにしても、破かれた手紙と、そのなかに書かれてあった内容——ここに憲吉と一枝の最後の思いが、明らかににじみ出ている。いうまでもなく、決して交わることはなかった。

『朝日新聞』が報じた憲吉死亡に関する複数の記事<sup>211</sup>を総合すると、一九六三（昭和三八）年六月八日夜の九時半に大阪府立成人病センターで肺がんにより憲吉は死去、その後、六月一〇日の午後、京都市東山区山科御陵檀ノ後七ノ三の自宅で密葬、一三日に天皇陛下により供物料が贈られると、続く一四日の閣議で政府は、従三位、勲二等旭日重光章を憲吉へ贈ることを決定、翌一五日の午後二時から奈良県生駒郡安堵村東安堵の生家において告別式が執り行われた。また、辻本勇が『近代の陶工・富本憲吉』のなかで記述しているところによれば、村道には奈良県の計らいで玉砂利が敷かれ、告別式は、故人の遺志を奉じての簡素極まるもので、喪主を壮吉、葬儀委員長を今村荒男が務め、五〇〇有余名による会葬とともに、四〇二通もの弔電が届き、恭しく霊骨は、菩提寺円通院の墓に埋葬された<sup>212</sup>。

## 第一二章 最晩年の「紅吉」との決別

——お母さんご心配ばかりかけてごめんなさい

『暮しの手帖』の「お母さまが読んできかせるお話」の第一作が掲載されたのが、第一八号（一九五二年一二月発刊）の「おくびょうな兎」であった。それから一三年間、第三〇号や第四二号などに休載はあるものの、一枝は走り続けた。しかし、第八〇号（一九六五年七月発刊）掲載の「遠い国のみえる銀の皿」をもって、筆が止まった。それからさらに一年が過ぎた。最期が近づいてきたことを、一枝は感じるようになったのであろうか。最晩年のこの時期になると、憲吉は父親の豊吉のことをしきりと思い出していたが、一枝は、母親のうたへ強い思いを寄せた。

伝統に倣い、娘らしく厳格に育てようとしてきた母親のうたは、「新しい女」としての一枝への批判が高まりはじめたときには、世間の人びとや親戚一同に対して申しわけないという思いで一杯になっていたし、一枝が結婚するときには、自分が嫁ぐときにもってきた先祖伝来の九寸五分の短刀を一枝に渡し、「帰りたくなれば、これで死ね」といい、「ごはんは三膳たべてはいけない。おつゆは一杯だけにしなさい」と教えていた。大和の旧家の長男に嫁がせる母親の気持ちには、おそらく言葉で表わせえないような実に複雑なものがあつたであろうし、一方、画家として跡取りを考えていた父親の一枝に寄せる思いも、この結婚により断たれることになった。以下は、一九六六（昭和四一）年六月号の『子どものしあわせ』に一枝が寄稿した「母の像 今日を悔いなく」の冒頭の一節である。

母は五十二才でなくなった。私は、母のその年から二十年もよけいに生きている今になって、母から訓し教えられていたことがやっとわかって、あらためて、母のしたこと、口癖のようについてきかせてもらっていたことが、骨身にこたえ、「お母さんご心配ばかりかけてごめんなさい」と、朝ごとに母の写真に手を合せ、母をなつかしみ、母に詫びている<sup>213</sup>。

そして、次の言葉が、「母の像 今日を悔いなく」の文末を飾る。「今日いちにちを悔いなく過ごした母を、私はなつかしく偲びつづけている」<sup>214</sup>。

ちょうどその前後のころのことであつたであろう、いとこの尾竹親が一枝を訪ねて来た。訪問の時期は、一九六六（昭和四一）年の「一度は春、一度は夏であつた」<sup>215</sup>。親は、『尾竹竹坡傳——その反骨と挫折』と題する、父親の伝記を執筆しようとしていた。それを聞いた一枝は、「えらいですねえー、私も、父のことを前から書きたいと思って、何度か、暇をみては書きかけたんですが、未だにそのままになっているんです。とにかく竹坡叔父さんが、余りにも素晴らしかったので、どうも父の印象が薄くなっちゃって……」<sup>216</sup>と、受け答えた。そのとき親の目には、こう映つた。「私のこの仕事を羨み、感心しながらも、その時の一枝は、遠く彼女自身の青春をのぞき込むような面持ちであつた」<sup>217</sup>。

このころ一枝は、『婦人民主新聞』の「小石」というコラムに、短い論評の連載をはじめていた。三月一三日に「米軍の迷走」、五月八日に「戦争とはいわずに」、そして七月一七日に「危ない街角」が掲載された。時事問題への関心は、決して衰えることはなかつ

た。しかし、それ以上に目を引くのは、この三編の末尾の署名が、「紅」の一字になっていることである。署名を入れるにあたって、「遠く彼女自身の青春をのぞき込むような面持ち」のなかから、まず「紅吉」の二文字が、頭に浮かんだものと思われる。しかし、一枝は躊躇した。そしてそこから、一方の「吉」を抹消した。想像するに、「紅吉」の「紅」が体の性で、「吉」が心の性を表象していたとすれば、最後の最後のこの段階で、つまり、死期が迫っていることの自覚のうえに立って、心の性を切り離し、何としてでも体と心を一体化させることによって、本来の体の性に帰依したいという強い衝動が、この瞬間に走ったのではないだろうか。自分の人生を悩ませ続けてきた性の不一致の決然たる否定を、この「紅」の一字は、表わしていたのかもしれない。

こうして、最晩年の筆名から完全に「青鞥の紅吉」は消えた。さらにこの時期、呼び名が「こうきち」から「べによし」へと変わった。これは何を表わしているのだろうか。尾竹親は、『尾竹竹坡傳——その反骨と挫折』のなかで、一枝について論じるにあたって独立したひとつの章を設け、章題を「紅吉考」としたうえで、「紅吉考」の「紅吉」に、「べによし」というルビをふっている。そして、このように書く。「紅吉という自分のペンネームを一枝はこう説明している。ちょっと見ただけでは、女の名とは思えない。それでも、〈べによし〉と読むと、やはりそこには女の感情が伝わってくる。自分では『あれで随分欲張った名』だと言っているところから推すと、彼女なりにある意味がこめられているのだろう」<sup>218</sup>。しかし、青鞥時代の一枝が、自分のことを「こうきち」と呼んでいたことは、「はじめに」においてすでに述べているように、平塚らいてうが確かに証言しているし、当時の新聞も、そうルビをつけている。それでは、なぜ一枝は、親の聞き取りに際して「べによし」という呼び名を告げたのであろうか。このとき、男性名と間違われる可能性を、少しでも和らげたいとの思いが働いた可能性を完全に否定することはできないであろう。『婦人民主新聞』のコラム「小石」に掲載された三編のエッセイの末尾の署名が「紅」の一字であることと、「べによし」という呼称とのあいだには、何か通底する一枝の精神的生まれ変わりのようなものが、このとき存在していたと見ることはできないであろうか。つまり、「青鞥の紅吉」から「母うたの娘」への生まれ変わりである。

「お母さんご心配ばかりかけてごめんなさい」という、母へのわびる思いが、そうさせたと考えることもできるだろうし、そしてまた、そうすることによって一枝は、「今日いちにちを悔いなく過ごした母」の生き方に倣おうとしたのかもしれない。しかし、一枝本人は何も語っていない。したがってこの解釈は、単なる私的な憶測の域を出るものではない。七月一七日の『婦人民主新聞』の「小石」欄に寄稿した「危ない街角」が、一枝の絶筆となった。

一九六六（昭和四一）年九月二日、肝臓がんにより、一枝は息を引き取った。七三年と五箇月の生涯であった。つい数箇月前に、一枝を自宅に訪問していた親にとって、「誰よりも先に、この竹坡の伝記を読んでもらいたいと思っていた人だけに、……その死は、非常なショックであった」<sup>219</sup>。その親は、一枝の葬儀について、こう書き記す。「一枝の葬儀は、簡素で、無造作であった。しかし美しかった。孫を相手にしているときのものだという、おばあちゃんになった晩年の一枝の、寂しく笑った写真が、大きく伸ばして壁にかけられ、祭壇もなく、大きな棺のまわりには、小さな花だけが美しく飾られた。通夜には、

平塚 [らいてう] 氏、神近 [市子] 氏、仲のよかった歌津ちゃんこと小林氏、それに中村汀女氏などの顔が見られた。……愛息の壮吉氏の、泣きくずれる姿が、彼女の死をいっそう悲しいものにしていった。小さな平塚氏のからだにも、神近氏の顔、押しだまった小林氏の表情にも、同じように得難い友を失った心の慟哭と実感とがあった。そして又、そこには、遠く過ぎ去った青春を感傷する女の情緒が匂っていた<sup>220</sup>。遺骨は、憲吉と同じく、安堵村の円通院の墓に埋葬された。

おわりに

平塚らいてう、神近市子、丸岡秀子、石垣綾子、中村汀女のような、身近に交流した多くの友人たちが自伝や自伝的小説を書き残しているにもかかわらず、そのなかであって最後まで一枝は、自分の生涯を一著にまとめることはなかった。なぜなのであろうか。一般的にいて、自伝には、自己の歩いてきた人生を、正当化したり、合理化したり、安定化させたりする傾向が、避けがたいこととして伴う。もし人間の言動を、秩序と無秩序、正常と異常、常識と非常識といったような二元論によって分割することが可能であるとする前提に立つならば、おおかたの自伝というものは、秩序、正常、常識という片方の極に立脚して記述されることになる。しかしながら、必ずしもすべての人間が、秩序、正常、常識の世界に生きているわけではなく、それとは別の世界にあって、あるいはふたつの世界を往復しながら、生と性を持続している人たちがいることも、また事実であろう。そうした人たちが、自らの人生を振り返ろうとした場合、どのようなことに出くわすであろうか。想像するに、かかる人は、過ぎ去りし道に置き忘れた品々のふたを開け、なかをのぞき込むにつけ、それがいかに不連続なものであり、矛盾に満ちたものであり、説明がつかないものであるのかに気づき、それを正当化したり、合理化したり、安定化させたりすることの困難さにすぐにでも直面するにちがいない。そしてそのことに基因して、伝記を書くという作業が、いつのまにかに雲散霧消するのではないだろうか。おそらく一枝も、それに近い生き方をしたひとりだったのではないかと思われる。

それでは、ここで少し、一枝本人が語る自己の内面分析について、耳を傾けてみたい。一九一二年（大正元）年の九月、約二箇月にわたる茅ヶ崎の南湖院での転地療養から東京へもどった紅吉（一枝）は、「歸へつてから」と題された一文を執筆し、『青鞥』一〇月号に寄稿する。このなかで紅吉は、自己の性格に触れ、このように率直に内面を分析していた。

私は誰も知らない、自分たった一人で大切にしている面白い気分があるのです。よく考えて見ると、その気分は幼い時からずっと今迄續いて来てみたのです。これから先きもどんなにそれが育つて行くことか楽しむでゐます。人が知つたら恐らく危険だとか狂人地味た奴だとか一種の病的だろうとか位いで済ましてしまふでしょう。私のその事が世間に出ると不眞面目なものに取扱はれて冷笑の内に葬らはて行くものだと考へてゐます。私が銘酒屋に行つたとか、吉原に出かけたとか酒場に通つて強い火酒に酔つたとか云ふことは其の大切にしている気分の指圖になつた悪戯わるふざけなのです、薄っ片らな上づつたあれらの幼稚な可哀しい気分を世間の人達は随分面白く解釋してゐます。私は自分を信じてゐます。それだけに自分以外の人達には平氣で偽をついてゐます。そのくせ私は人の言葉を妙に心配したり氣に懸けるのです<sup>2 2 1</sup>。

「自分たった一人で大切にしている面白い気分」——これが、この時期紅吉（一枝）に自覚された自己の心的断面であろう。この「面白い気分」は、周囲の秩序だった常識的な世界に混入されれば、多くの場合、「不眞面目なものに取扱はれて冷笑の内に葬らはて行く」

運命をたどることになる。しかし一方、人が容易に抵抗できないでいる旧弊な壁にこの「面白い気分」が投影されるならば、ときとしてその壁は相対化され、ものの見事に崩落する。徹底した純真性に潜む破壊力——そうした異界に作用する力としての「面白い気分」を紅吉は自覚したうえで、「私は自分を信じてみます」と、告白しているのであろうか。

他方、この「自分たった一人で大切にしている面白い気分」とは、「幼い時からずっと今迄續いて来てゐた」ものであり、それは、一枝のセクシュアリティにかかわる、ある身体的かつ心理的な側面を指しているのではないだろうか。一枝は、その現象を固く信じる一方で、しかしながら、「危険だとか狂人地味な奴だとか一種の病的だろう」と人に思われることを恐れるがあまりに、カミング・アウトすることはできず、「それだけに自分以外の人達には平気で偽をつけてみます。そのくせ私は人の言葉を妙に心配したり気に懸けるのです」と、告白しているようにも読める。

おそらく紅吉の内面に存する「面白い気分」は、前者の解釈と後者の解釈とのどちらかの一方によって成り立っていたのではなく、この二本の色糸によって編み込まれた、一面のものとして形成されていたのではないだろうか。「らいてうとの恋」に溺れ、「五色の酒」に酔い、「吉原遊興」に耽ったのも、紅吉によれば、「面白い気分」の「指圖になつた悪戯」にすぎないものを、「世間の人達は随分面白く解釋」する。一方で外面はというと、これも、「面白い気分」の「指圖になつた悪戯」だったのかもしれないが、男さながらの「紅吉」という名を発し、異性装のごときにセルの袴にマントを着用し、大声を上げながら得意然として市中を闊歩する。そこに、世の人びとは、「新しい女」の出現を見た。意図されたことではなかったかもしれないが、これが結果として、日本における婦人運動の最初の図像のひとつとなったことは、疑いを入れなくてあろう。しかし問題は、この「面白い気分」が「これから先きもどんなにそれが育つて行くことか楽しむでゐます」と、本人がいうように、その後の「面白い気分」の行方であり、「新しい女」がたどり着く行き先なのである。

それではもうひとつ、自身が語る、晩年の自己分析を紹介してみたい。一九五八（昭和三三）年に刊行された『講座女性5 女性の歴史』のなかの「史料編」に、一枝は「青鞜前後の私」を寄稿している。安堵での生活の当初、生活に対する習慣や考え方の違いに戸惑いながらも、それに反抗すべきすべも知らず、それに何とかあわせようとしていた、かつての自分の悲しい姿を語り、それを、こう分析する。

考えてみるまでもなく、これは幼い時から受けてきた母の教育や躾の結果、自分の考えの中の矛盾と戦う力が失われていたとも言えましょうし、また、自分も非常に古いものを持っていることを気づかずにいたのではないのでしょうか。自分の中の古さを知らずにいることは、何に反抗しなければならないのか、それさえわからないではないのかと、よく考えあぐんだものですが、それにしても幼い時からの母の教え、と言うより、その母の育った時代、そして私を育てた時代、その時代に生きた人たちの考え方の根強い古い大きな力の、あまりにも後々まで尾を曳くことを思うばかりです<sup>222</sup>。

安堵村で、実際に結婚生活をはじめてみて、はじめて、知らず知らずに母から受け継いでいた自分の「旧い女」の側面に気づいたのである。間違いなく、このとき一枝は、「その

母の育った時代、そして私を育てた時代、その時代に生きた人たちの考え方の根強い古い大きな力が根を下ろしている自分と、これから向き合い、闘っていかなければならないことを悟ったにちがいがなかった。しかしながら、ここで引用した言説は、明らかにその後の時代の流れに即した観点に立って、世相との整合性を保つために跡づけされたものであったにちががなく、結婚するまでのころにあっては、一枝は、決して「新しい女」の真の価値に気づくこともなく、それどころか、むしろ積極的に「旧い女」の価値を賞讃していたのであった。次の引用が、それを例証する。

取材のために自宅にやってきた『新潮』の青年（記者）が、「それで貴方は、貴方自分を世間の云ふ『新しい女』と自認して居ますか」と問うと、それに答えて尾竹紅吉（一枝）は、こういつている。「いゝえ、——世間で云ふ新しい女と云ふものは、よく分りませんが、不眞面目と云ふ意味が含まれて居るやうですね [。] 私は不眞面目と云ふことは大嫌ひです。私は寧ろ、世間で言はれて居るやうな『新しい女』と云ふものが実際にあるならば、『新しい女』を罵倒して遣り度く思ひます。『新しい』『舊い』と云ふことは意味の分らない事ですけども、舊い新しいの意味が、昔の女と今の女と云ふのなれば、私は昔の女が好きで且つそれを尊敬し、自分も昔の多くの傑れた女の様になりたいと思つて居ます。そして、私自身はどちらかと云ふと昔の女で、私の感情なり、行為なりは、道徳や、習慣に多く支配されて居る事を感じます」<sup>223</sup>。ここから明らかのように、なぎ倒してでも「新しい女」を乗り越えて、自分も昔の多くの優れた女のようにになりたい——これが、このときの一枝が求める女性像だったのである。問題は、一枝自身、いつ、どのような明確な自覚のうえに立って「新しい女性」に改心しようとしたのか、それとも、時の考えに流されるようにして、理想としていた「旧い女性」の原像をやむなく放棄せざるを得なくなっただけなのか——。一枝は、「青鞥前後の私」の結語として、次の言葉で締めくくる。

ですから、私自身、まるで草履と下駄を片方づつはいて道を歩いているような人間だと言えましょう。

それにしても、同じ明治のあの時代に生きながら、平塚 [らいてう] さんは全く別です。自分の考えを立派に育てて守り、見事に結実し、今日に至ってなお成長をとめることのない平塚さんを、私は友人として心から尊敬しています<sup>224</sup>。

一枝は、自分のことを「まるで草履と下駄を片方づつはいて道を歩いているような人間」だったという。「草履と下駄」の二足とは、旧い女性像と新しい女性像との葛藤を意味するのか、それとも、体の性と心の性の乖離を暗に意味するのであろうか。あるいはその双方を指しているのであろうか。いずれにしても、「草履と下駄」という表現から、四方に入り乱れて渦を巻く苦闘の実相が容易に連想できる。一枝は、この晩年にあつて、「自分の考えを立派に育てて守り、見事に結実し、今日に至ってなお成長をとめることのない」、らいてうにみられるような姿を、自己の姿として見出すことはなかった。一枝にとっては、己の生と性にかかわって、すべての問題が、まさしく未決着だったのである。ここに、らいてうをはじめ、周囲の交流があつた女性たちと違って、一枝が自伝を書かなかつた、あるいは書けなかつた理由が潜んでいたものと思われる。

このように、確かに一枝自身は、自分の生涯を文にまとめることはなかった。しかし、

その生涯にあって交流した友人たちが一枝について書いた。ある者は、命の恩人として一枝に感謝の思いを捧げ、またある者は、一枝が自分の人生の先導者であったことに敬意を表わし、そしてある者は、開花しなかった一枝の陰の芸術的才能をほめたたえた。それでは、平塚らいてう、神近市子、丸岡秀子、帯刀貞代、そして志村ふくみの文章のなかから該当する箇所を短く拾い集め、以下に紹介しておきたいと思う。

平塚らいてうがエピソードとして伝記に書き残しているのは、娘の曙生が急性盲腸炎を発症したときの様子である。留守中の出来事であった。らいてうは、このように書く。

「昭和五年十月に大阪でひらかれた、関西婦人連合大会に、わたくしは関東消費組合の無産者組合代表として出席しました。……その留守中に……当時曙生は、成城小学校を卒業したあと、自分の選択によって自由学園女子部に進み、二年に在学中でした。とつぜん腹痛がはじまったことについて、日ごろから我慢づよい性質の曙生は、父親にもそのことを告げず、一晩中痛みをこらえていたのです。そして、ようやく翌日になって招いた村の医者、決定的な誤診によって、まさに曙生は、死の淵をのぞくことになったのです。……報せで駆けつけてくれた富本一枝さんの機敏な働きで、曙生は赤十字病院に運ばれて手術を受け、すでに手遅れを案じられていた症状にもかかわらず、奇跡的に回復することができました」<sup>225</sup>。

しかし、その予後は思わしくなく、三回の手術を繰り返し、二年にわたる療養生活を強いられることになった。らいてうの文は続く。「曙生の発病以来、富本一枝さんの示してくれた温かい心遣いは、それによって曙生の生命が救われたばかりか、病児を守って看病に専念するわたくしを、大きく励ましてくれるものでした」<sup>226</sup>。

神近市子は、一枝の才能を評価した。一九六五（昭和四〇）年一一月号の『文學』に、「雑誌『青鞥』のころ」と題した神近への単独インタビュー記事が掲載されている。一枝が亡くなる前年である。そのなかで、神近は一枝に言及して、このようなことを述べている。

「あのめぐり合いも、不幸でしたね。このあいだ有名な占いの人が、あの人をみて、ひょっと言ったことがあるんです。この人は大天才の星がある、ところが家事星というのが、非常に大きく働きかけて、それに天才のほうがかわれてしまったって。あの子の生涯を見れば、絵描きとしては、もしもお父さんの後を継ぐということで一本でいけば、そうとう伸びています。今でも、とってもいい字を書きますしね。」「ですから、その占いの人が言ったという星の話はなるほどというところがあります。いまでも風采からしても、言うことからしても、相当変わっていますからね。その点富本〔憲吉〕先生のほうがかえって、才能的にはもって生まれたものは少なかつたかもしれません。先生の絵とか作品とかに対する彼女のアドバイスというものが、批評の役割を相当果たしていたでしょう。だから、富本先生の作品は、〔戦後一枝と別れて〕あちらにいかれてからの作品よりも、三十四、五から五十代までの作品がいちばんいいといえますね」<sup>227</sup>。

すでに、第五章の「夏の出来事と安堵村生活の終焉——わたしはMさんに心を傾けていました」において言及しているように、一枝と丸岡秀子のあいだには、かつてこのようなことがあった。一九二三（大正一二）年、奈良女高師の四年生であった秀子は、学生最後の夏を、富本家の海浜の休暇に加えてもらって尾道の向島で過ごした。そのときそこへ、秀子の先輩で友人でもあった美貌の「Mさん」が一枝を訪ねて来て、ふたりは、親密に泳

ぎを楽しんだ。その親密さに秀子が傷ついたのではないかと疑った一枝は、そのようなことが書いてあるかどうかを確かめるために秀子の日記を盗み見た。それから十数年の月日が流れた。その間、富本一家は安堵村から東京の千歳村へ移住し、一方の秀子は、就職、結婚、出産、夫の死、再就職と、若くして人生の過酷さを十分に味わっていた。正確に時期を特定することはできないが、秀子が一枝と一緒に成城の町中を歩いていたおりのことである。秀子がひとつの話題を切り出した。その場面が、一九八三（昭和四八）年に偕成社から出版された秀子の自伝的小説『ひとすじの道』に表われているので、そこから適宜引用するかたちで、以下に、その場面を再現したいと思う。本文中では「恵子」という名で登場するが、これが秀子であることはいままでもなく、したがってここでは、「秀子」に置き換えて表記することにする。

秀子には、「M さん」のことも、どこか頭の片隅にあったものと思われる。秀子は一枝に向かって、ずばりと切り出す。「ずいぶん浮気をなさったから、もう思い残すことはないでしょう」。このぶつけられた言葉にいらだつ一枝は、「それが私へのお返しですか」と反駁するも、秀子は、「あなたは美人がお好きでした。それはみとめていらっしやるでしょう」と、追い打ちをかける。一枝は「この奴」といった表情を見せた。この日別れたすぐあとに、一枝からの手紙を秀子は受け取る。それには、こう書かれてあった。「美人に生まれることは、よきかなです。しかし、心のむなしい美は、すぐに厭かれてしまいます。形ばかり美しくなっても、中身のない美人はごめんです。目をたのしませるのも、時間の問題です。ばかなことをいうものではありません。あなたの肉体が弱っているのです。そんなことがいえるのです。なぐさめではありません」。この手紙が届いた翌日、秀子は一枝を訪ねた。「昨日のお手紙で、わたしを慰めたり、納得させたとは、まさか思っただけでいらっしやらないでしょうね。わたしがいいたいのは、これまでのあいだ、さんざんご自身を浪費なさったことが残念でならないのです。誰にしても、あなたから愛されることは、喜びだったと思います。おなかの底からきれいな、あなただからです。だが、あなたご自身の仕事が、いくらでも、おできになれる環境にいらっしやしながら、その才能をお持ちになりながら、あなたは大切なエネルギーを浪費なさった、分散なさってしまったと思うことが残念なんです」。絵や書の製作あるいは小説の執筆こそが一枝が開花させるべき天与の仕事であると感じていた秀子の目には、同性へ向ける一枝の性的指向がエネルギーを浪費、分散させてしまい、その結果、本来の自分の仕事がおろそかになっているように映るのである。一枝はこの痛烈な指摘に抗議した。「あなたは、ひどい。あなたのことだけを思っていたこともあったのに……」。それに対して秀子は、一枝の美質を認めただけで、次のような言葉を使って、これまでに受け取った恩恵の数々に感謝の気持ちを示したのであった。「わかっています。わたしはあなたから、他の人のように溺愛はされませんでした。だが、どれだけ励まされたか、わからないんです。それだけでよかったのです。もし、あなたがいてくださらなかったら、わたしは生きていられなかった時もありました。わたしは、あなたから、どっさりのことを学びました」<sup>228</sup>。

第六章「東京に住む——ひとりで祖師谷に行っただけでいいよ」のなかで、すでに引用しているので、繰り返しの引用になるが、当時、無産婦人の労働者としての意識を覚醒させる教育と組織つくりとに携わっていた帯刀貞代は、一枝との出会いを次のように振り返る。

「私が富本さんにはじめておめにかかったのは、昭和のはじめだった。そのころ私は江東の亀戸で、女子労働者のためのささやかな塾をひらいていて、富本さんは神近市子さんを誘って、そこをみにこられたのだった。そのつぎのあざやかな記憶は、昭和の大恐慌のさなかで、塾にきていた女子労働者たちの六十日にわたる合理化・工場閉鎖とのたたかいが惨敗したあと、こんどは、こちらから富本さんをお訪ねしたときのことである。……まだそのころ丘の上にただ一軒しかなかった富本さんの家は、空気も樹木も、花の色もキラキラ輝いてみえた。それいご四十年ちかく、病弱な私は言葉につくせないお世話になった」<sup>229</sup>。

一九五七（昭和三二）年に帯刀は、岩波書店から『日本の婦人——婦人運動の発展をめぐる』を出版することになる。そのとき、その本の扉の裏に帯刀は、「この貧しき書を富本一枝様に捧ぐ」という献辞を添えた。

一枝は、夕陽丘高等女学校の出身で、妹の福美もこの女学校に通っていた。そのときの福美の同級生に小野豊<sup>とよ</sup>がいた。三人は、よく一緒になって遊んだ。その小野豊の娘が、染織家として大成する志村ふくみ（一九二四年生まれで、「ふくみ」の名は、一枝の妹の福美の名からとられているという）なのであるが、彼女のエッセイに、「母との出会い・織機との出会い」と題された一文があり、そのなかで、母である小野豊が、若き日に一枝と偶然にも再開し、その後安堵村に一枝を訪ねていたことを紹介している。

「やがて三児の母となった或る日、阪急電車の中で、音信の絶えて久しい尾竹一枝さんにばったり出会った。その時は既に結婚され、富本憲吉夫人になっていたのであるが、偶然の再会を喜び合い、その時より終生の深い友情で結ばれることになった。母はいまも小筥に一枝夫人の手紙を大切にしまっているが、巻紙にあふれるような豊かな筆致で、率直すぎるほどに母を戒め、いたわり、なかには三メートルに及ぶほどの手紙もある。先日、それをみせてもらっていると、はからずも再会の日の手紙が出てきた」<sup>230</sup>。

こうして、一枝と豊との交流がはじまった。ある日のこと、招かれて豊は、窯出しの日に安堵村を訪れた。『女かて、自分の思いを貫いて生きている人がいる』母は心を揺さぶられて帰ってきた。その日から夫人の死に至るまで、五十余年、『富本さんから受けた恩は語りつくせるものではない』と常々語っている」<sup>231</sup>。

上で紹介した、一枝を鑑仰する文は、わずかにその一部でしかない。本稿に登場している中江百合子や石垣綾子、そして蔵原惟人や中村汀女も、そうした気持ちを書き表わしているし、それ以外にも、よく見れば、多くの人たちが、その列に加わっているにちがいない。一枝は、その生涯を「草履と下駄」という異なるふたつの履き物をつけて渡り歩き、その間の多くの出来事が「面白い気分」の「指圖になつた悪戯」であった可能性を遺す。その結果自らの人生の大半が整合性を欠いた未決着なものになり、そうであったがゆえに、自伝のための筆を取ることはなかった。しかし上述のとおり、それに代わる、心温まる数々の文が、その裏側で、しっかりと息づいているのである。自伝が自己による評価であるとすれば、これらの文は、他者による評価である。そこで考えられることは、一枝がどう生きたのかにかかわるひとつの記述（評伝）の観点として、今後、この他者の評価を積極的に採り入れることが必須の要件となるのではないかということである。つまり、「本人が語る富本一枝という生き方」（自伝）を超えて、「他者が語る富本一枝という生き方」（評伝）へと向かうまなざしである。それでは、この「他者の評価」の核心部分を形成しているものは何か。よく読めばわかるように、上で紹介した誰の文においても共通して表われ

ているのは、一言でいえば、「俠氣的熱情」といったものではないであろうか。

これまでの研究のなかにあつての一枝（紅吉）は、「俠氣的熱情」という文脈において語られることはほとんどなく、多くの場合、「青鞞の女」や「新しい女」と結び付けられ、ある種特別の強調をもって記述がなされてきた<sup>232</sup>。しかしながら一枝本人は、本稿においても例証しているように、一生涯を通じて自らを「青鞞の女」とも「新しい女」とも名乗ることはなかった。そうした呼称は、もともとは当時のジャーナリズムか何かによって付与されたと思われる烙印であり、明らかに軽蔑と嘲笑とを含意するものであった。あまりにも鮮烈な青鞞時代の行動であったがために、そうした用語が、一枝の内面的実態をはるかに越えて憑依し、一方で、後世に至るまでその勢いは静まらず、本来実証主義的であるべき学術研究のなかにも、やすやすと取り込まれていったのであろう。

『青鞞』創刊五〇周年の一九六一（昭和三六）年に、女性史研究者の井手文子は『青鞞元始女性は太陽であった』を上梓するが、それに先立って井手は、一枝にインタビューを試みている。そのときの一枝の態度や発話のなかにも、自分にとって青鞞社がどのような存在であったのかが、表現されている。初対面の「富本一枝はパタパタとスリッパの音をたてて私の前に現われた。髪は無造作な櫛巻きで、あらい格子紡ぎのキモノをつけ、ひどく粹であった。彼女はハリのある大きな声で、つづげさまにこんな風に話した」<sup>233</sup>。

私はたいへん我儘もので、それに馬鹿もので、ただ、むしように青鞞社に憧れていたんです。ともかく青鞞社にいたといっても時間が短いでしたし、異質な人間で、自分一人で動いていたので、本当に青鞞社の精神を代表したものではないんです。だからわたくしのお話を聞いたってあまり役に立ちませんよ<sup>234</sup>。

自分の存在は「青鞞社の精神を代表したものではない」——おそらくこれが、一枝の偽らざる自己理解だったのではないだろうか。読む限り、かつて身を置いた青鞞社に、何か特別の帰属意識のようなものをもっている様子はない。そのことは、一枝（紅吉）が青鞞社を離れてゆくときの様子からも、十分に推量することができる。以下は、一九一三（大正二）年の『青鞞』八月号の「編輯室より」の一部である。

尾竹紅吉氏がまだ本社の社員であるかのやうに思つてゐる方もあるやうですが、同氏が自分から退社を公言されたのは今年の秋の末だつたかと思ひます。……同氏の特殊な性格を知つて居ますから社は大抵は黙許して参りました。けれども今日はもう社とも、社員とも全然何の関係もありません。従つて同氏の言動に就ては……社にとつてもらいてうにとつても誠に迷惑なものであります<sup>235</sup>

まさしく一枝（紅吉）は、厄介払いにも似た扱いで青鞞社を最終的に退社しているのである。ここから判断しても、その後の人生にあつて一枝が、自らを「青鞞の女」と呼ぶことがなかったとしても、それは当然のことであった。そのようなわけで、あくまでも一枝本人の気持ちに添って考えるならば、「青鞞の女」も「新しい女」も、決して一枝の内面に宿す本来のアイデンティティーを言い表わす用語ではなかった。したがって、この用語を強引にも、また無責任にも外野席からラベリングされることは、おそらく一枝にとっては、

不愉快なことだったにちがいない。そうであれば、「青鞥の女」や「新しい女」といった古い主題を一括して包摂したうえでそのすべてに取って代わる、一枝が真の自分を内発的に語るうえでの自己規定の概念となるようなものがあるとするならば、それは、一体何であろうか。それこそが実は、多くの他者が一枝を評価するに際して、彼女の美点として見抜いていた「俠氣的熱情」という、上述の概念だったのではないだろうか。ここに至って思うに、どうやらこれが、一枝というひとりの女の生涯を貫くアイデンティティとなるものであった。そしてそれは、疑いもなく、母から受け継いだものであった。

父親が越中富山藩の高禄武士であった母のうたは、祖先を敬い、親に尽くし、夫に従うことに徹した、厳格なしつけを娘たちに行なった。すでに前章（第二章）において引用で示したように、一枝は、うたについてこう述べている。「母は五十二才でなくなった。私は、母のその年から二十年もよけいに生きている今になって、母から訓し教えられていたことがやっとわかって、あらためて、母のしたこと、口癖のようにいつきかせてもらっていたことが、骨身にこたえ、『お母さんご心配ばかりかけてごめんなさい』と、朝ごとに母の写真に手を合せ、母をなつかしみ、母に詫びている」。うたの教えとは、次のようなものであった。

母は、うそをつくことと怠けることが大嫌いだった。へつらったり、自分さえよければ人はどうなろうと平気な人間を、とりわけ好きでなかった。……母がつねづね子どもにきかせていたことは、情のある人、思いやりのある人になることだった。一番はずかしいことは、困った人をたすけたことをいつまでも覚えていること。それと、「人のふり見て我がふり直せ」ということだった<sup>236</sup>。

この教えは、明らかに「俠氣的熱情」に近い心情を含み持つ。そこから推論すれば、このような内容をもつ、一種武士道的な「俠氣的熱情」が、明治以降の日本の「良妻賢母」思想の徳目の一部となって、前時代から引き継がれた可能性はないのか。そして、この「俠氣的熱情」の側面が発芽して、「新しい女」すなわち「女性解放」を出現させた可能性はないのか。もしそうであるならば、一枝の生涯を「俠氣的熱情」でもって今後再文脈化することは、結果として、「良妻賢母」思想の、生成、継承、変容を考えるうえでの、ひとつの事例史という優れた副産物を生み出すことにつながるのではないか、つまりそれは、「新しい女」あるいは「女性解放」の出現史（そして発展史）となるのではないか——いまは、そう思っている。もっとも、「俠氣的熱情」の発露、あるいは「良妻賢母」思想の受け渡しという文脈から一枝の生涯を再構築する場合においても、一方で、性的少数者としてのジェンダー／セクシュアリティの文脈から照明をあて続け、新たな主題との関係にあって、独創的な知見を発掘してゆく作業の重要性には変わりはなく、その意味で、一枝の一生を描写するに際しての複雑性ないしは多次元性は、これからも避けがたく続くものと思われる。さらに加えて、一方の性の立場に偏り、一方の性を顧みない旧来の「男性史」や「女性史」の限界を超えて、時代の諸力のなかにあつて展開されたある特定の男女の歴史的事態を対象として描く「家族史」（あるいは「男女関係史」）への移行の必然性について、そしてまた、母から娘への生命相続の流転にかかわる「母娘関係史」の学術的重要性についても、論証を抜きにして、ひとこと直感的にこの場にあつて指摘しておきたいと思う。

それでは最後に、本稿を閉じるにあたって、一枝が亡くなって三年後の一九六九（昭和四四）年に書かれた一枝研究の出発点となる井手文子の「華麗なる余白・富本一枝の生涯」から一節を引いておこう。

いわば富本一枝というひとりの女性は、ひとときわ華麗な余白を、明治・大正・昭和にかけて女の歴史に刻んだのである。華麗な未知数であったゆえに、人びとはいっそう彼女に愛惜と、ある悔恨の情を持ったのではなかったか。その愛惜と悔恨のためにも、いま一度、富本一枝の生涯を時代とともになぞってみる義務がわたくしたちにあるように思われる<sup>237</sup>。

らいてう、神近、丸岡、帯刀、そして志村が一枝について言及した上述の言説は、まさしく、井手が指摘する「華麗なる余白」に書き込まれた「愛惜と悔恨」のメッセージだったと理解することができよう。そして井手は、「その愛惜と悔恨のためにも、いま一度、富本一枝の生涯を時代とともになぞってみる義務」を課した。これは、一枝自身が自伝を書かなかったことに由来する、裏を返せば、カミング・アウトしなかったことに起因する、研究者に残された永遠の宿題ともいうべきものであった。半世紀が立とうとする現在にあって、稚拙ながらも本稿をもって私は、ひとりの研究者としてその責務に応え、いまここに、宿題を提出しようとしている。採点は、次世代の研究者の手にゆだねる。厳しくあってほしい。そしておそらく、井手が課したこの責務は、これからのちも多くの研究者に引き継がれ、女性史、家族史、女性解放運動史、近代文学、児童文学、ジェンダー／セクシュアリティ研究、そして、さらに加えることが許されるならば、上述の「母娘関係史」といった実に多様な学問的土壌のなかから、研究成果という麗しき芽が姿を現わし、一枝の遺した「華麗なる余白」に静かに彩りを添えてゆくにちがいない。あたかも、憲吉が焼いた大きな白磁の壺に、「紅吉」の名にふさわしく、一枝が愛した紅いバラが一本一本投げ入れられていくように——。

跋

女性史の専門家でもない私が、なぜこのように富本憲吉の妻である富本一枝を単独で取り上げ、その生き方にかかわって執筆したのか、その理由をここに少し書いておきたいと思います。

かつて私は、ジャン・マーシュさんが書いた *Jane and May Morris: A Biographical Story 1839-1938*, Pandora Press, London, 1986 を友人と一緒に翻訳し、『ウィリアム・モリスの妻と娘』（晶文社、一九九三年）という訳書題で上梓したことがありました。その本の「序文」でマーシュさんは、次のように述べていました。縁をたどれば、本稿「富本一枝という生き方——性的少数者としての悲痛を宿す」の執筆の動機と多少とも関係がありますので、少し長い文章ですが、その一部をまずここで引用させていただきます。

この本は不公平に対する義憤の念から執筆されたものである。本屋や図書館の書棚に行けば、この物語に登場する三人の主要な男性であるウィリアム・モリス、ダンテ・ゲイブリエル・ロセッティ、ジョージ・バーナード・ショーの著作や彼らについての研究書を多数見ることができる。彼らは極端に注目されすぎていると考える人もいるかもしれないが、彼らが注目されるのはそれなりにわかる。彼らが生きた時代の文化史を考えれば、これらの男性は重要で著名な人物であるし、彼らはそれぞれ研究に値する莫大な芸術上の仕事をしているのである。彼らの絵画、デザイン、演劇はいまでも展示され、複製され、上演されているし、学術的な批評や論文、著作やテレビ番組の主題ともなっている。また彼らの伝記はいまなお執筆され、出版されている<sup>238</sup>。

さらにマーシュさんは、これまでの歴史家や研究者は、男性の人生に比べて、女性の役割については副次的で隷属的なものとして無視に近い扱いをしてきたこと指摘したうえで、次のように続けます。

この数年のあいだ、女性の経験と業績を再生させ、その歴史叙述のなかで女性の地位を回復させようとして、大量の仕事がなされてきた——パンドラ出版社の存在自体がその意思の表われである。これほどまでに男性の役割だけが特権視されてきた事情を説明し分析するだけでなく、これまで覆い隠されてきた女性の貢献が再発見され、再提示され、再評価されてきているのである。これは単に、傑出した女性を不当な忘却から救い出す作業にとどまるものではない。この作業の大半は、どこにでもある普通の生活や、家庭での個人の経験のあり様や、家庭や職場における労働のあり様を扱うものであった<sup>239</sup>。

そしてマーシュさんは、こうも書いていました。「周知のように、女性の人生は社会的、イデオロギ的諸力によって抑圧され、制約されてきた。しかしそうだからといって、女性の人生が本質的に興味のあるものになるわけではない。名声と『偉大な』作品が唯一の測定基準というわけではないのである」<sup>240</sup>。

このマーシュさんの著書の翻訳の仕事を与えてくださったのは、私の主たる研究の対象がウィリアム・モリスであることをご存じであった、当時晶文社の編集者として活躍されていた島崎勉さんで、私がブリティッシュ・カウンシルのフェローとして英国へ赴く直前のことでした。機内でこの本に目を通すと、この「序文」の一連の文言が強く私の心を突き動かしました。ロンドンに着くとマーシュさんに面会を求め、ご自宅でお目にかかりました。一九八八（昭和六三）年の年明けのことでした。

月日が巡って、私は、モリスの思想と作品に関心をもって日本人として最初にイギリスに渡ったのは誰だったのか、その人に出会いたいと思って、自分の学問的系譜の先祖を探しました。それが、あの富本憲吉という工芸家だったのです。憲吉さんがモリスの何を見、それを日本に持ち帰って、どう展開したのか、その全貌を自分の目で直接確かめるために、私は憲吉さんの伝記を書きたいと思いました。そのとき私の脳裏に蘇ったのが、かつて翻訳したマーシュさんの「序文」の言葉でした。そこで私は、憲吉さんの伝記を書くにあたり、妻の一枝さんの存在にも等量の光をあて、夫婦の物語として描くことを決意しました。完成した作品が、ウェブサイト「中山修一著作集」において公開しています第三巻と第四巻の「富本憲吉と一枝の近代の家族」です。

私は、「富本憲吉と一枝の近代の家族」を書くにあたり、まず先行研究に目を通しました。富本憲吉と一枝のふたりをモデルにした小説である、吉永春子『紅子の夢』（講談社、一九九一年）と辻井喬『終りなき祝祭』（新潮社、一九九六年）の二冊を別にすれば、書籍形式の評伝としては、憲吉さんについては、辻井勇『近代の陶工・富本憲吉』（双葉社、一九九九年）が、一枝さんについては、高井陽・折井美那子『薊の花——富本一枝小伝』（ドメス出版、一九八五年）と渡邊澄子『青鞥の女・尾竹紅吉伝』（不二出版、二〇〇一年）の二冊がすでに出版されていました。

このとき私は、一枝さんにつきましては、全くの不勉強でしたので、とりわけこの二冊をよく読み、知識を得ようと思いました。どちらの評伝においても、一枝さんの自由や自立を抑圧し、隷属的な妻の位置に支配しようとする憲吉さんの夫としての姿が、おおかた全体を通して描かれていました。そのとき私は、マーシュさんが「序文」で書いていたように、この二冊も、これまで闇に隠されていた女性の苦しさや悲しみを発掘し、再提示しようとする試みの延長線上にある労作であるにちがいない思い、そこに描かれていた構図を信じて、「富本憲吉と一枝の近代の家族」の執筆に入りました。

ところが、執筆を進めるなか、一つひとつの原資料（一次資料）を読んでゆくにつれ、先行するふたつの評伝に共通する構図、つまり、憲吉さんが封建的で家父長的な思想の持ち主で、一枝さんが良妻賢母の思想を超えた新しい女とする構図に疑問が生じてきました。頭が混乱し、大変苦しみました。そんなとき、そういえば『紅子の夢』の「あとがき」のなかで、著者の吉永春子さんが次のように書いていたことを思い出しました。「ふとした機会から私は、彼女〔尾竹紅吉こと、富本一枝〕について書くことになり、改めて調査に入ったが、すぐに戸惑ってしまった。事実と、私の脳ミソに焼きついた存在とが、時には重なり、時には遠く離れ、複雑な線となって、縦横に走りまくり始めた。これはいけない、どっちかにしなければ。選択の結果が〈小説・紅子の夢〉ということになった」<sup>241</sup>。

吉永さんは、「事実と、私の脳ミソに焼きついた存在」との乖離に苦しんだようですが、私の場合は、「事実と、先行評伝における記述内容」との相反に苦しめられました。しかし

私は、小説を書くつもりはもうとうありません。私は研究者として、あくまでも事実に基づく伝記を書きたいと思いました。どうしても真実の姿の憲吉さんと一枝さんに出会いたかったのです。事実を担保するために、自分の思いや解釈を一方的に押し付けるのではなく、慎重に原資料に耳を傾け、引用を多用することによって原資料に語らせるという方法を取りながら、憲吉さんと一枝さんの生涯を描くことにしました。先行評伝の構図を覆すには、とても大きな勇気を必要としました。幾度となく不安の波が押し寄せてきました。その一方で、幾ばくかの信念もありました。大雑把に言えば、次のようなものでした。

伝記や評伝を著わすにあたって、一般論として確かにいえることは、対象者がすでに過去の人物になっているといえども、実在していた以上、その人物の人権も人格も当然ながら尊重されなければならない、そのために最も肝要なことは、何かを断定するにあたっては、後進の研究者や伝記作家が、それが真実であるのかどうかを再検証するに足るだけの十分な根拠資料を注や図版や表にまとめ、あわせて開示しなければならないということではないだろうか。こうした手続きを踏まえながら、世代を越えて、途切れることのない学問上の論証や実証が積み重ねられてゆき、その過程のなかにあつて、いつしか万人が承認する、独断と偏見を排した「歴史的眞実」がその姿を現わしてくるものと思われるが、いかがであろうか。一例ではあるが、英国にあつては、憲吉が崇敬したウィリアム・モリスの伝記が、没後一〇〇年以上を経たいまに至るまで、新しく発掘された資料や証言を援用し、また、新しく開発された学問的コンテクストやアプローチに沿わせながら、多くの歴史家や作家によって書き継がれてきている事実が、そのことの重要性和妥当性を雄弁に物語っているように思われる——。

以上のような研究者としての、決して失いたくないと思っていた信念に支えられて、何とか「富本憲吉と一枝の近代の家族」は脱稿しました。しかし擱筆ののち、読み返してみますと、先行する二著に取って代わる夫婦間の新たな構図を、未知への不安を伴いながらも何とか示そうとする、多少とも硬直した意気込みがあつたためでしょうか、筆の力みが至る所で目につき、それが気になりはじめました。そしていま一度、過去のいかなる作品の記述内容に惑わされることもなく、そこから解放されて、ひとつの明確な文脈（コンテクスト）を用意したうえで、証拠（エヴィデンス）に基づきながらも少しでも滑らかな筆の動きでもって、一枝さんと憲吉さんのそれぞれの評伝を書いてみたいと強く思うようになりました。それが、いま書き終えたばかりの「富本一枝という生き方——性的少数者としての悲痛を宿す」であり、続けてこれから書こうとしている「富本憲吉という生き方——モダニストとしての思想を宿す」なのです。

その後もマーシュさんとの交流は続き、文部省の在外研究員として再びイギリスに滞在した一九九五（平成七）年のころ、次のようなことをマーシュさんは私に話してくれました。ヨーロッパのフェミニズム運動は、両性の不公平さについて多くの不満を爆発させた第一段階を経て、現在は、女性のなしえた仕事を、共感の情をもって掘り起こし、冷静に理解しようとする第二段階にあるといえる。そしてたとえば、ウィリアム・モリスについて書く場合には、今日にあつては多くの執筆者が、妻のジェインや娘のメイが体験した家庭内での出来事や、彼女たちが達成した幾つもの業績にも、目を配るようになってきた。これが、芸術史や文化史へのフェミニスト・アプローチの大きな成果であると思う——。その後マーシュさんは、ウィリアム・モリス協会の会長職に、そしてウィリアム・モリス・

ギャラリーの館長職に就くことになります。

こうしたマーシュさんの九〇年代当時のフェミニスト・アプローチについての認識を念頭に置いて、翻って日本を見たとき、そのころの日本の事情はどうだったのでしょうか。全体像を語る力量は私にはありませんが、少なくとも、高井陽・折井美那子『薊の花——富本一枝小伝』と渡邊澄子『青鞥の女・尾竹紅吉伝』を読んだ当初の私には、いまだヨーロッパの記述段階に遠く及ばないように思いました。そしてまた、両性間の不公平の存在が先験的に措定され、それを前提として事象や事物を感情的に読み解こうとするために、勢い単なる表層的な女性擁護と男性攻撃に終始し、必要とされる論証も実証もないがしろにされ、力余って事実から大きく離反する記述結果を招いてしまったのではないかとも感じられました。もちろん今日的には、こうしたことが学術研究の場にあつて許されることはないのですが、フェミニスト・アプローチの初期段階固有の特徴を、この事例は示しているのかもしれませんが。

前述のとおり、『薊の花——富本一枝小伝』（一九八五年）と『青鞥の女・尾竹紅吉伝』（二〇〇一年）が出版された、ちょうどそのあいだの時期に、『紅子の夢』（一九九一年）と『終りなき祝祭』（一九九六年）の二冊の小説が刊行されました。『紅子の夢』の著者の吉永春子さんは、一枝さんとの学生時代の一瞬の出会いが忘れられず、その強い衝撃が動機となって、筆をとることになったと述べていますし、『終りなき祝祭』の著者の辻井喬さんは、富本夫妻の息子の壮吉さんの友人であり、両親へ向ける壮吉さんの思いがこの小説の執筆へと駆り立てたと語っています。このように著者の執筆動機は、フェミニズム運動とは直接関係はなく、それぞれが極めて個人的なものだったようですが、当時これを読んだ読者は、個人的な熱い思い入れによって過去の出来事に創作的な手が加えられた虚構の物語であることを重々に承知しながらも、モデルとなっている主人公が富本憲吉と富本一枝であることは誰の目にも明らかであつたために、ここに描かれている内容が、まさしく憲吉と一枝という一組の夫婦の人生の実態であつたと受け止めてしまった——そうした可能性はなかったでしょうか。

一枝さんのいとこの尾竹親さんが、『尾竹竹坡傳——その反骨と挫折』（東京出版センター、一九六八年）のなかで、次のようなことを書いています。

人間の言動というものは、決して一つの情景のみに定着して語られるべきものではなくして、その人間が生きた全存在の一環に組み込まれてこそ、はじめて、よりよくその映像を伝え得るものだと私は信じている。

瀬戸内氏にしても、それが史実をもとにした小説であつてみれば、フィクションとしてのある種の無責任さに救われているのだろうが、時間の経過というものは、得てして、伝説という神話をつくり上げたがるもので、いつかはそれが事実とまではならぬとしても、史実に欠けた情緒の補足としてのさばり返ることがよくあるものだ。私が、実名、或いは史実にもとづいた小説の安易さを恐れる理由が、ここにもあるわけである<sup>242</sup>。

以上の引用は、瀬戸内晴美（瀬戸内寂聴）さんの『美は乱調にあり』（文藝春秋、一九六六年）という本のなかで描写されている、青鞥社時代に紅吉（一枝さん）が引き起こした、

いわゆる「吉原登楼」事件における竹坡（親さんの父親）の役割を巡っての論点が念頭に置かれて書かれている箇所ではありますが、これは極めて重要な指摘で、ここに、同じ過去の人物を扱った小説と学術研究との決定的な質的違いがあるものと思われま

す。他方、発表の時期に着目してみますと、井手文子『青鞥 元始女性は太陽であった』（第五章と第六章に伊藤野枝さんについての記述があります）の刊行が一九六一（昭和三六）年、そして、同じ野枝さんを扱った小説『美は乱調にあり』が、五年遅れて一九六六（昭和四一）年に刊行されます。また、高井陽・折井美那子『薊の花——富本一枝小伝』の刊行が一九八五（昭和六〇）年、そして、同じ一枝さんを扱った小説『紅子の夢』が、六年遅れて一九九一（平成三）年に刊行されます。いかなる目的によって執筆がなされたのか、そしてまた、どれほどの真実が描かれているのか、その比較考量は横に置くとしましても、歴史に埋もれた女性の生き方への共感と、その掘り起こしは、日本にあっては、実証主義を重視する学術の領域と、小説という想像的創作の領域とが、ほぼ同時進行的に、あるいは、学術研究の方が一步先行するかたちをとって展開されたといえるかもしれません。もっとも、伝統的に真実を愛し、歴史から多くの教訓を学ぼうとする英国のような国にあっては、事実に基づく厳密な伝記がひとつの文学形式として定着しており、過去に実在した歴史上の人物をフィクションという表現形式でもって描くことは、ほとんどありえないのではないかと思います。そしてまた、遺された家族や周囲の人びとの心情やプライバシーを考え、同時に、遺作や遺品の著作権などにも配慮し、親近者による思い出の記のようなものは別にして、客観性を重視する学術書の執筆は、少なくとも没後五〇年は手控えることも、おおかた一般的な習わしとなっているようです。

それでは最後に、再びフェミニスト・アプローチについて少し振り返ってみたいと思います。たとえばイギリスにおいて、戦後、高等教育や成人教育が一気に拡大するなか、そこで学ぶ多くの進歩的な学生たちは、これまでに描かれていた「歴史」には、自分たちが属する階層の人間を含む弱者や少数者、あるいは被抑圧者や非特権者たちの姿が存在しないことに気づきはじめました。彼らが指摘するように、たとえば芸術史を例にとりますと、伝統的にその学問が扱ってきたのは、限られた例外を除けば、ほとんどが「偉大なる男性作家」であり、そこには、「普通の人びと」の芸術的行為も「女性芸術家」の作品も完全に抜け落ちてしまっていたのでした。彼らはそこに着目して不満と批判の声を上げ、既存の「歴史」の成立過程と記述内容に異議を申し立てました。

続くフェミニスト・アプローチの第二段階に入ると、両性の不公平さへの感情的なほとばしりは、冷静にも学問的作業の新たな道を開拓し、「普通の人びと」の芸術的行為や「女性作家」の作品が再発掘され、「歴史」のなかに再配置されてゆくようになりました。一九八六年のマーシュさんの著作（訳書題『ウィリアム・モリスの妻と娘』）も、そうした文化的、学問的状況のなかから誕生したといえます。そうした状況がさらに進展し、この分野の学問がすでに次の新たな段階に入っているかどうかは勉強不足でよくわかりませんが、私の個人的な実感としては、第二段階の「男性史」と「女性史」には、自ずと限界があるように感じてきました。といいますのも、「男性史」にあっては、ある種特別の調味料として「女性」を登場させ、「女性史」にあっては、多くの場合いまだに攻撃の材料として「男性」を登場させることが、ステレオタイプ化しているように感じられたからです。そこから脱却するため、いまや私は、ふたつの性に同等の敬意を表し、男と女をひとつの組みと

して対象化し、その歴史を記述することの必要性を感じています。それは、名称的には、夫婦史、家族史、あるいは男女関係史ということになるのかもしれませんが。たとえば夫は家庭にあって、妻や子ども、あるいは使用人に対してどのように接したのでしょうか。一方妻は、どのような言動でもって周りの人間に対して振る舞ったのでしょうか。男女間にあって相互に働くさまざまな力の存在を見定め、その諸力にかかわる変移や実質について、思想的に、社会的に、そして文化的に実証分析することが重要なのではないのでしょうか。それぞれの時代の諸次元的制約を受けた過去の行動空間の構造と、そのなかで男女が織りなす力学とが、順次再発見されてゆくことになれば、それを手掛かりにしながら、仕事や家庭における真の両性の平等を今後再構築するうえで必要とされる新たな視点や原理のようなものが萌芽するのではないかと、近年私は、このように考えるようになりました。その観点に立って、身近な具体例を挙げるとするならば、「ウィリアム・モリス」や「ジェイン・モリス」の個別研究の精緻化に止まらず、一方で「ウィリアム・モリスとジェイン・モリスの夫婦／家族」のさらなる研究が今後重要になってきそうですし、「富本憲吉」や「富本一枝」の単独研究の深化にもまして、他方で「富本憲吉と富本一枝の夫婦／家族」のいっそうの研究が意味と価値を帯びてくるものと思われまます。いずれにいたしましても、これからの学術研究の動向に注意を払いたいと思います。

(二〇一八年)

注

- (1) 高井陽・折井美那子『薊の花——富本一枝小伝』ドメス出版、1985年、168頁。
- (2) 呉佩珍『『青鞜』同人をめぐるセクシュアリティ言説——一九一〇年代を中心に——』『立命館言語文化研究』28巻2号、2016年、56頁。
- (3) 平塚らいてう自伝『元始、女性は太陽であった②』大月書店、1992年、27頁を参照。また、「ヨミダス歴史館」（読売新聞社のオンライン・記事データベース）で「尾竹紅吉」を検索語として入力すると、現在、該当する記事は18件あり、そのなかで「紅吉」にルビがつけられている記事は14件。ルビはいずれも「こうきち」となっている。ちなみに、最も古い記事は、紅吉が青鞜社に在籍していたころの、1912（明治45）年7月10日の「卒業後（十一）結婚と就職 女子美術学校」という見出しがつけられた記事で、「又自ら少年と稱し『らいてう』の美少年と云はれ、頻りと鴻の巣の洋酒に浮れて可愛らしい氣焰をあげる紅吉も一時、此校の寄宿舎にみたが、窮屈さに我慢が出来ず遂に逃出したものださうだ」のくだりがあり、そのなかの「紅吉」にも、「こうきち」とルビがふられている。
- (4) 近年、性的少数者（LGBT）に関して、社会文化論的に、また教育実践論的に、そして医学的に関心が高まり、その適切な理解が進んでいる。それに伴い、多種多様な関連する書籍が出版されてきた。以下は、あくまでもその一部にすぎないが、ある程度の全体的な傾向は概観できるものと思われるので、参考までに、列挙しておくことにする。

一般的な概説書ないしは入門書としては、『同性愛・多様なセクシュアリティ』（“人間と性”教育研究所編、子ども未来社、2002年初版）、『セクシュアルマイノリティ』（セクシュアルマイノリティ教職員ネットワーク編著、明石書店、2003年初版）、『トランスジェンダー宣言』（米沢泉美編著、社会批評社、2003年初版）、『性同一性障害って何？』（野宮亜紀ほか著、緑風出版、2011年初版）、『LGBTQを知っていますか？』（星野慎二ほか著、少年写真新聞、2015年初版）、『セクシュアルマイノリティ Q & A』（LGBT支援法律家ネットワーク出版プロジェクト編著、弘文堂、2016年初版）などがあり、また、歴史書を幾つか挙げるとすれば、『レスビアンズの歴史』（リリアン・フェダマン著、富岡明美・原美奈子訳、筑摩書房、1996年初版）、『性と権力関係の歴史』（歴史学研究会編、青木書店、2004年初版）、『同性愛の歴史』（ロバート・オールドリッチ編、田中英史・田口孝夫訳、東洋書林、2009年初版）、『同性愛をめぐる歴史と法』（三成三保編著、明石書店、2015年初版）などがあり、さらには、博士論文をベースに書籍化されたものについては、『近代日本における女同士の親密な関係』（赤枝香奈子著、角川学芸出版、2011年初版）や『カムアウトする親子——同性愛と家族の社会学』（三部倫子、お茶の水書房、2014年初版）などが認められる。一方、特殊なものとして、同性愛や異性装を禁じる聖書を巡っての解説書として、『教会と同性愛』（アラン・A・ブラッシュ著、岸本和世訳、新教出版社、2001年初版）を挙げることができる。

なお、トランスジェンダーに限っていえば、日本におけるそれへの関心は、一九八〇年代ころから萌芽した足跡があり、医学書としては、小此木啓吾・及川卓「性別同一性障害」『現代精神医学大系 第8巻《人格異常、性的異常》』（中山書店、1981年初版）が、社会文化論としては、『トランス・ジェンダーの文化』（渡辺恒夫著、勁草書房、1989年初版）

が出版されている。また、自分がトランスジェンダーであることをカミング・アウトした主な書物として、『私はトランスジェンダー』（宮崎留美子著、ねおらいふ、2000年初版）と『ダブルハピネス』（杉山文野著、講談社、2006年初版）を挙げることができる。前者の著者は、男性から女性へのトランスジェンダー（MTF）で、後者の著者は、女性から男性へのトランスジェンダー（FTM）である。そして、日本で最初の公式な性別適合手術（性別再判定手術）は、1998（平成10）年に埼玉医科大学で行なわれた。

（5）『婦女新聞』第586号、1911年8月11日（金）、1頁。（「婦女新聞 第12巻 明治44年」、不二出版、1983年3月15日／復刻版発行、265頁。）

（6）同『婦女新聞』、同頁。（同上、同頁。）

（7）同『婦女新聞』、同頁。（同上、同頁。）

（8）島中雄三は、当時『婦女新聞』の編集者として働いていたが、その後、社会運動家、評論家として活躍。東京市議会議員も務める。弟が中央公論社の社長となる嶋中雄作で、のちに一枝の夫となる富本憲吉は、在籍する中学校（雄作は畝傍中学、憲吉は郡山中学）は異なっていたが、中学時代に雄作から『平民新聞』を貸し与えられて、それに連載されていた、堺利彦訳のウィリアム・モリスの「理想郷」を読み、モリスの社会主義思想と工芸実践に興味を抱くようになる。中学卒業後は東京美術学校に入学し、在籍中に英国への私費留学を果たし、ロンドンに地においてモリス研究に従事。そして帰国後、一枝と結婚する。

（9）『婦女新聞』第587号、1911年8月18日（金）、4頁。（「婦女新聞 第12巻 明治44年」、不二出版、1983年3月15日／復刻版発行、276頁。）

（10）同『婦女新聞』、同頁。（同上、同頁。）

（11）同『婦女新聞』、同頁。（同上、同頁。）

（12）桑谷定逸「戦慄す可き女性間の顛倒性慾」『新公論』第26巻第9号、1911年、38頁。

（13）同『新公論』、41頁。

（14）田中祐吉「女性間の於ける同性の愛」『新婦人』第1年第8号、11月之巻、1911年、25-28頁。

（15）尾竹親『尾竹竹坡傳——その反骨と挫折』東京出版センター、1968年、247頁。

（16）平塚らいてう『わたくしの歩いた道』新評論社、1955年、121-124頁。

（17）「編輯室より」『青鞥』第2巻第6号、1912年6月、121-122頁。

（18）尾竹紅吉「或る夜と、或る朝」『青鞥』第2巻第6号、1912年6月、115-116頁。

（19）「編輯室より」『青鞥』第2巻第7号、1912年7月、110頁。

（20）『宮本百合子全集 第六巻』新日本出版社、2001年、298頁。

（21）黒澤亜里子（編）『往復書簡 宮本百合子と湯浅芳子』翰林書房、2008年、41頁。

（22）吉永春子『紅子の夢』講談社、1991年、13-14頁。

（23）「東京観（三二） 新らしがる女（三）」『東京日日新聞』、1912年10月27日、日曜日。

（24）前掲『尾竹竹坡傳——その反骨と挫折』、233頁。

（25）「紅吉の畫が賣れる——三百圓で花魁身受の噂」『讀賣新聞』、1913年4月8日、3頁。そのあと、この記事は、こう続く。「所が幸運な事には、その畫は〔出品され

た巽畫会の] 開會間も無く物好きな福島於菟吉氏が買取つたので、紅吉はホクホクもの、サテ其の三百圓は何うなるかのかと云へば、今度紅吉が出す雑誌の保証金に充てるのださうだ、花魁身受などと評判を立てゝ置いて、蔭でペロリと舌を出す紅吉も女ながら人が悪い」。

(26) 内田魯庵「性慾研究の必要を論ず」『新公論』第26巻第9号、1911年、6頁。

(27) 「女性間の同性戀愛——エリス——」『青鞥』第4巻第4号、1914年4月、1頁。

(28) らいてう「圓窓より」『青鞥』第2巻第8号、1912年8月、79頁。

(29) 同「圓窓より」『青鞥』、80頁。

(30) 同「圓窓より」『青鞥』、81-82頁。

(31) 同「圓窓より」『青鞥』、82-83頁。

(32) 同「圓窓より」『青鞥』、83-85頁。

(33) 同「圓窓より」『青鞥』、87頁。

(34) 同「圓窓より」『青鞥』、同頁。

(35) 同「圓窓より」『青鞥』、88頁。

(36) 同「圓窓より」『青鞥』、同頁。

(37) 同「圓窓より」『青鞥』、89頁。

(38) たとえば、らいてうと紅吉とが相思相愛の仲であったことを示す別の証拠として、当時田村俊子(のちに佐藤姓)が書いた「逢つたあと」という詩があるが、そのなかの一節でふたりの関係は、こう描写されている。「紅吉、おまいのからだは大きいね。／Rと二人逢つたとき、／どつちがどつちを抱き締めるの。／Rがおまいを抱き締めるにしては、／おまいのからだは、／あんまりかさばり過ぎてゐる。」この詩の全文は、「編輯室より」『青鞥』(第2巻第10号、1912年10月、135-136頁)に掲載されている。

(39) 前掲「女性間の同性戀愛——エリス——」『青鞥』、3頁。

(40) 前掲「女性間の同性戀愛——エリス——」『青鞥』、17頁。

(41) 前掲「女性間の同性戀愛——エリス——」『青鞥』、19頁。

(42) 前掲「女性間の同性戀愛——エリス——」『青鞥』、21頁。

(43) 尾竹一枝「Cの競争者」『番紅花』第1巻第3号、1914年5月、107頁。

(44) 尾竹一枝「自分の生活」『番紅花』第1巻第1号、1914年3月、193-194頁。

(45) 同「自分の生活」『番紅花』、194頁。

(46) 同「自分の生活」『番紅花』、195頁。

(47) 同「自分の生活」『番紅花』、197頁。

(48) 同「自分の生活」『番紅花』、200頁。

(49) 同「自分の生活」『番紅花』、202頁。

(50) 同「自分の生活」『番紅花』、207頁。

(51) 山本茂雄「富本憲吉・青春の軌跡——出会い・求婚・結婚までの書簡集」『陶芸四季』第5号、画文堂、1981年、75頁。

(52) 「謎は解けたり紅吉女史の正體——新婚旅行の夢は如何に 若く美しき戀の犠牲者」『淑女畫報』第3巻第13号、1914年12月、32-39頁。

富本憲吉と尾竹一枝の結婚については、『讀賣新聞』(1914年10月23日、5頁)も、「婚儀を擧ぐる 藝術家と才媛 花嫁は尾竹一枝嬢」の見出しでもって報じているが、その内

容は、『淑女畫報』の「謎は解けたり紅吉女史の正體——新婚旅行の夢は如何に 若く美しき戀の犠牲者」とは大きく異なっており、また文体も、敬語調の表現となっている。とりわけ興味を引くのは、あれだけ世間を騒がせた、青鞆時代の「らいてうとの恋」も、「五色の酒」や「吉原登楼」についても、いっさい触れられていないことである。「世の中の無責任なる批評の爲め誤解を傳へられた事もあります」という文言のなかに、それらのことが暗に含まれているのかもしれないが、いくら婚儀予告の報道とはいえ、あまりにも美辞麗句が多用された記事になっているといわざるを得ないし、加えて、なぜ「青鞆」の二文字も「新しい女」の四文字も、文面にその姿が現われないのか、疑問さえ残る。この記事だけを読む限りでは、「青鞆の新しい女たる紅吉」は存在しなかったことになる。

そして、さらにいうならば、一年半前の『讀賣新聞』（1913年4月8日、3頁）は、「紅吉の畫が賣れる——三百圓で花魁身受の噂」という見出し記事で、「所が幸運な事には、その畫は〔出品された異畫会の〕開會間も無く物好きな福島於菟吉氏が買取つたので、紅吉はホクホクもの、サテ其の三百圓は何うなるかのかと云へば、今度紅吉が出す雑誌の保證金に充てるのださうだ、花魁身受なぞと評判を立てゝ置いて、蔭でペロリと舌を出す紅吉も女ながら人が悪い」と書いていた。読み比べてみるとすぐにわかるように、同じ新聞社の記事であるにもかかわらず、「紅吉」を取り扱う記述の調子において、このふたつの記事には大きな落差が見受けられるのである。なぜなのであろうか。このように、この記事には多くの不自然さがつきまとう。しかしながら、その理由までは実証できず、現時点では憶測するしかない。この記事の全文は、以下のとおりである。

「日本畫家として兄弟三人揃つて聲名を馳せらるゝ尾竹氏一家の長兄越堂氏の令嬢で一枝様は圖案及び工藝美術を以て知られたる富本憲吉氏と婚約成り。來る廿七日華燭の典を擧げ午後五時より築地精養軒にて披露の宴を開き、直様北陸へ向けて新婚旅行をなさるさうです。新婦の君は、兩親が、昔流のこせこせした教育法を避けて、大きい人間になれよ、世に優れた才能を磨けよと勵まされて、身も心ものんびりと、自由に幸福に生い立たれ、大阪夕陽ヶ丘高等女學校卒業後東京の叔父君の許に繪を學ぶ傍、紅吉と云ふ雅號を以て興味の赴くまゝ筆を執り、或は自ら雑誌を起されました。世の中の無責任なる批評の爲め誤解を傳へられた事もあります、よく識れる人々は、いずれも無邪氣で、眞直な其性質を賞めて居ります。新郎は大和の人、曾て歐洲に遊んで歸朝後、獨創の製作や意見を屢々世に現し、理解ある人々から前途に多くの望みを囑さるゝ青年藝術家です。兩氏を識る友人達は、何れもこの實質ある眞面目なる、世にも似合はしい結婚を稱へ、斯くして結ばれた同伴者が、互に勵まし、慰めあつて、尊き事業を成されんことを待ち望んで居られます。」

その一方において、この雑誌記事（「謎は解けたり紅吉女史の正體——新婚旅行の夢は如何に 若く美しき戀の犠牲者」『淑女畫報』第3巻第13号、1914年12月）の重要なところは、憲吉と一枝の結婚式当日の写真が掲載されていることである。平塚らいてうは、自伝のなかで、「やがて紅吉は富本憲吉氏と大正三年一月電光石火的な早さで結婚してしまいました。習俗に殉じたようなその振袖、高島田姿の写真に、私はあきれるだけでなく、紅吉にかけた期待が大きかっただけ、失望をさらに新たにしました」（平塚らいてう自伝『元始、女性は太陽であった②』大月書店、1992年、125頁）と、書いている。らいてうが見た紅吉（一枝）の「習俗に殉じたようなその振袖、高島田姿の写真」とは、間違いなく、この記事のなかに見出される図版写真（目次の表題は「問題の婦人尾竹紅吉女史の花嫁姿」）

のことなのではないだろうか。この写真を見たらいてうは、「失望をさらに新たにしました」と吐露しているが、おそらくは、旧来の婚姻制度を踏襲した結婚の形式だけだけでなく、さらには、婚礼に際して伝統的に花嫁が用いる衣装や容姿だったことのなかに、紅吉（一枝）の別の本性を新たに見出し、そのことに起因してらいてうは、こうした発話をしているのであろう。というのも、らいてう自身、この年（一九一四年）の『青鞥』二月号掲載の「獨立するに就いて兩親に」のなかで、「私は現行の結婚制度に不満足な以上、そんな制度に従ひ、そんな法律によつて是認して貰ふやうな結婚はしたくないのです。私は夫だの妻だのといふ名だけにでもたまらない程の反感を有つて居ります……戀愛のある男女が一つ家に住むといふことほど當前のことはなく、ふたりの間にさえ極められてあれば形式的な結婚などはどうでもかまふまいと思ひます」（らいてう「獨立するに就いて兩親に」『青鞥』第4巻第2号、1914年、115頁）と書き、奥村博との共同生活を宣言していたからである。

この写真は、らいてうをして驚きと失望へと導いた。確かに、青鞥のなかにあつて自由奔放に振る舞った「新しい女」という一側面と、育った家庭から受け継いだ習俗に殉じる「旧い女」という一側面との、紅吉（一枝）固有の二面性を象徴しているように読める。この相対する両極性が、さらには境界なき分割されたセクシュアリティと複雑にも絡み合つて、結婚後の一枝の闇のごとき底知れぬ悲痛を形成してゆくのである。

（53）前掲「富本憲吉・青春の軌跡——出会い・求婚・結婚までの書簡集」『陶芸四季』、74頁。

（54）富本一枝「結婚する前と結婚してから」『婦人公論』第2巻、1917年1月号、70頁。

（55）同「結婚する前と結婚してから」『婦人公論』、71頁。

（56）同「結婚する前と結婚してから」『婦人公論』、同頁。

（57）同「結婚する前と結婚してから」『婦人公論』、72頁。

（58）同「結婚する前と結婚してから」『婦人公論』、同頁。

（59）取材のために自宅にやってきた『新潮』の青年（記者）が、「それで貴方は、貴方自分を世間の云ふ『新しい女』と自認して居ますか」と問うと、それに答えて尾竹紅吉（一枝）は、こういつている。「いゝえ、——世間で云ふ新しい女と云ふものは、よく分りませんけれども、不眞面目と云ふ意味が含まれて居るやうですね〔。〕私は不眞面目と云ふことは大嫌ひです。私は寧ろ、世間で言はれて居るやうな『新しい女』と云ふものが實際にあるならば、『新しい女』を罵倒して遣り度く思ひます。『新しい』『舊い』と云ふことは意味の分らない事ですけども、舊い新しいの意味が、昔の女と今の女と云ふのなれば、私は昔の女が好きで且つそれを尊敬し、自分も昔の多くの傑れた女になりたいと思つて居ます。そして、私自身はどちらかと云ふと昔の女で、私の感情なり、行為なりは、道德や、習慣に多く支配されて居る事を感じます。」（「謂ゆる新しき女との対話——尾竹紅吉と一青年」『新潮』、1913年1月、107頁。）

（60）以下は、中野重治の富本一枝評である。「富本一枝さんはむかし青鞥社の一員だった。それは知っていたが、眼の前に見る一枝さんには一向『青鞥』らしいところがなかった。……『新しい女』どころではない。『古い日本の女』がそこにいた。『古い日本の女』は物のくれ方によく出ていた。……〔祖師谷の家を〕二度目か三度目に訪ねた時そこに

皿が一枚出ている。……とにかく私がほめた。……それが好ましいという意味のことを普通にひと口いったのに過ぎなかった。しかし帰りに、靴をはいている私に彼女が紙にくるんでその皿を押しつけた。押しつけたというのは、拒否できない何気なさでそれを私に受取らせてしまったとういうことだった。」(中野重治「富本一枝さんの死」『展望』第 96 号、1966 年、101-102 頁。)

(6 1) たとえば、次の引用は、これについての一枝の記憶の一例である。「考えてみますと、結婚します時、私の母は、母が結婚の時に母の母から貰って来た先祖伝来の九寸五分の短刀を私に渡して、“帰りたくなれば、これで死ぬ”と言いました。私はその母のことばを忘れることが出来なかったようです。“ごはんは三膳たべてはいけない。おつゆは一杯だけにしなさい”母はそうも教えました。」(富本一枝「青鞥前後の私」、松島栄一編『女性の歴史』(講座女性 5)、三一書房、1958 年、177 頁。)

(6 2) 前掲「結婚する前と結婚してから」『婦人公論』、74 頁。

(6 3) 同「結婚する前と結婚してから」『婦人公論』、63 頁。

(6 4) 同「結婚する前と結婚してから」『婦人公論』、76 頁。

(6 5) 富本一枝「海の砂」『解放』第 1 巻第 7 号、1919 年 12 月号、31 頁。

(6 6) 羽太鋭治・澤田順次郎『變態性慾論』春陽堂(1915 年初版)、1916 年(4 版)、346 頁。

(6 7) 富本一枝「私たちの小さな學校に就て 1. 母親の欲ふ教育」『婦人之友』第 18 巻、1924 年 8 月、28 頁。

(6 8) 澤田順次郎『神秘なる同性愛 下巻』(性的叢書第四編)天下堂書房、1920 年、182 頁。

(6 9) 同『神秘なる同性愛 下巻』、195-196 頁。

(7 0) 富本憲吉「美を念とする陶器」『女性日本人』第 1 巻第 2 号、1920 年、50 頁。

(7 1) 富本一枝「子供と私」『婦人之友』1 月号、1921 年、55 頁。

(7 2) 富本一枝「子供を讚美する」『婦人之友』5 月号、1921 年、170 頁。

(7 3) 富本一枝「安堵村日記」『婦人之友』第 15 巻 6 月号、1921 年、164 頁。

(7 4) 同「安堵村日記」『婦人之友』、168 頁。

(7 5) 富本一枝「母親の手紙」『女性』12 月号、1922 年、142 頁。

(7 6) 同「母親の手紙」『女性』、143-144 頁。

(7 7) 同「母親の手紙」『女性』、149 頁。

(7 8) 同「母親の手紙」『女性』、152-153 頁。

(7 9) 同「母親の手紙」『女性』、154 頁。

(8 0) 南八枝子『洋画家南薫造 交友關係の研究』杉並けやき出版、2011 年、56 頁。

(8 1) 中江泰子・井上美子『私たちの成城物語』河出書房新社、1996 年、42 頁。

(8 2) 同『私たちの成城物語』、41 頁。

(8 3) 富本一枝「安堵村日記」『婦人之友』第 15 巻 6 月号、1921 年、159 頁。

(8 4) 羽田野朱美「回想・富本憲吉——陶工と出会った人々(2)」、富本憲吉研究会会誌『あざみ』第 6 号、1998 年、112 頁。

(8 5) やまさき・さとし「村山籌子解説」『日本児童文学大系 第二六巻』ほるぷ出版、1978 年、565 頁。

- (86) 石垣綾子『我が愛 流れと足跡』新潮社、1982年、7頁。  
(87) 同『我が愛 流れと足跡』、7-8頁。  
(88) 同『我が愛 流れと足跡』、8頁。  
(89) 同『我が愛 流れと足跡』、同頁。  
(90) 同『我が愛 流れと足跡』、同頁。  
(91) 丸岡秀子『いのちと命のあいだに』筑摩書房、1984年、27-28頁。  
(92) 丸岡秀子『ひとすじの道 第三部』偕成社、1983年、108-116頁。  
(93) 同『ひとすじの道 第三部』、132頁。  
(94) 同『ひとすじの道 第三部』、同頁。  
(95) 同『ひとすじの道 第三部』、133頁。  
(96) 富本一枝「私たちの小さな學校に就て 1. 母親の欲ふ教育」『婦人之友』第18卷、1924年8月、32頁。  
(97) 小林信「私たちの小さな學校に就て 2. 稚い人達のお友達となつて」『婦人之友』第18卷、1924年8月、33頁。  
(98) 同「私たちの小さな學校に就て 2. 稚い人達のお友達となつて」『婦人之友』、同頁。  
(99) 同「私たちの小さな學校に就て 2. 稚い人達のお友達となつて」『婦人之友』、同頁。  
(100) 前掲『ひとすじの道 第三部』、134-135頁。  
(101) 富本一枝「東京に住む」『婦人之友』第21卷 1927年1月号、112頁。  
(102) 同「東京に住む」『婦人之友』、108頁。  
一方、夫である憲吉は、東京移住の理由について、晩年の一九六二（昭和三七）年に執筆した『日本経済新聞』の「私の履歴書」のなかで、こう述べている。「大和の一隅でロクロを引き、画笔をにぎる私の仕事も、だんだんと世間に認められ、生活には別段、不便を感じることもなかった。しかし、そのころ、東京へ出て仕事をしたい気持ちが日ごとに強くなった。東都の新鮮な気風にふれることは、かねてからのやみがたい念願であり、また陶芸一本で生涯を過ごす覚悟も、ようやく固まってきたのである。かくして大正十五年〔一九二六年〕の秋、十年余親しんだ大和の窯を離れ、東京郊外、千歳村（現在の世田谷区祖師谷）に居を移した。」（『私の履歴書』〈文化人6〉日本経済新聞社、1983年、210頁。〔初出は、1962年2月に『日本経済新聞』に掲載。〕）  
(103) 同「東京に住む」『婦人之友』、109頁。  
(104) 同「東京に住む」『婦人之友』、同頁。  
(105) 同「東京に住む」『婦人之友』、111頁。  
(106) 同「東京に住む」『婦人之友』、同頁。  
(107) 同「東京に住む」『婦人之友』、同頁。  
(108) 国立国会図書館デジタルコレクション（国立国会図書館／図書館送信限定）「旧新約聖書」大正三年一月八日発行、発行者／米國人 ケー・イー・アウレル、発行所／米國聖書協會、「新約聖書」二百十六頁。

たとえば、この箇所は、現代にあつてはこう訳されている。「26 このことのゆえに、神は彼らを恥ずべき情欲へと引き渡された。実際、彼らのうちの女性たちは、自然な〔性的〕

交わりを自然に反するものに変え、27 同様に男性たちも、女性との自然な [性的] 交わりを捨てて、互いに対する渴望を燃やしたのである。[そして] 男性たちは彼ら同士で見苦しいことを行ない、彼らの迷いのしかるべき報いを、己のうちに受けたのである。』(『新約聖書』(新約聖書翻訳委員会訳) 岩波書店、2004 年、628 頁。)

一枝が、もしこのような意味に理解していたのであれば、この段階で一枝は、自分の性的指向を、「恥ずべき情欲」であり「自然に反するもの」であり「見苦しいこと」であり、「迷いのしかるべき報い」を受けるべき大きな罪であるとして認識したと思われる。(109) 同「旧新約聖書」、「舊約聖書」二百八十二頁。

この箇所現代語訳の一例はこうなる。「5 女が男の着物を身にまとうことがあつてはならない。男が女の着物を着ることがあつてはならない。これらのことを行なう者はすべて、あなたの神ヤハウェが忌み嫌うものであるからである。」(旧約聖書Ⅲ)『民数記 申命記』山我哲雄・鈴木佳秀訳、岩波書店、2001 年、349 頁。)

このとき一枝は、聖書の言葉を通じて、異性装が「忌み嫌うべき服装」であることに気づいたものと思われる。

(110) 前掲「東京に住む」『婦人之友』、111-112 頁。

(111) 同「東京に住む」『婦人之友』、110 頁。

(112) 同「東京に住む」『婦人之友』、112 頁。

(113) もっとも、当時の『讀賣新聞』(1925 年 9 月 29 日、7 頁) は、砧村の成城学園滞在のために富本一枝がふたりの娘(陽と陶)を連れて上京したことをとらえて、「よき母 = 尾竹紅吉さん 愛嬢を連れて上京 奈良の山奥から 昔忘れぬ都に憧れて」という見出しのもとに記事にしているが、それを読む限りでは、そうした緊迫した状況は、いっさい伝わってこない。むしろ、平穏安寧な大和での暮らしが強調されている。

この『讀賣新聞』の記事は、一枝への聞き取りによって、おおかたの内容が構成されている。そのなかで一枝は、以下のように語っている。「そこは富本の故郷で百五十戸許りの村です[.] 私は富本と二人の子供と一緒に村はづれの窯業場で小さい生活を致して居ります……私共の生活は富本の考へから至極簡易で、ホンの日常生活の道具しか揃つておりません[.] それでも實家から全く補助を仰がず、自分達で労働し自分達で生計を立てゝ行くという風にして居りますから本當に生活らしい生活をして居るやうな氣が致します、子供がある様になつてからは育児や家事に追はれ、ろくろく勉強も出来ませんが、夜分は十時頃から一時頃までも讀書にふける事があります[.] これ迄はトルストイ物が好きでしたが、近頃はピーター、クロポトキンやアルツイバーセフの物などが好きになりました、もつと読んで研究を積みたいと思ひます。」

このように一枝は、夫の実家に頼ることなく儉約に励み、簡素で質実な生活のなかにあつて、昼間は家事や育児に明け暮れ、夜には進んで自ら讀書に親しむ、まさに良妻賢母の見本のような日々を安堵村で過ごしているように語っている。事実、ある見方からすれば、そうであつたかもしれない。しかしこれは、『讀賣新聞』の記者という他者に向つて語っているのではない。一枝の語りのはじまる前に、こうした一文があるからである。「用事があつて駒澤の村端の宏壯な邸宅を構へてある實兄の越堂畫伯のお宅へ伺つた[.] 當の紅吉を訪ふと質素な木綿の緋に束ね髪一齒切れのよい口調で……」。ここから、一枝の語りのはじまるのである。つまり一枝の聞き手役になっているのは、越堂(一枝の父)を實兄にもつ

尾竹竹坡か尾竹國觀のいずれかなのである。そうであるならば、この聞き取り記事は、身内による自作自演の記事だったということになる。「小さな学校」から教師が消え、安堵村での生活が破綻し、転地を迫れている状況にありながら、そのことにはいっさい触れないどころか、逆に、それとは反対の、実に平和で誠実な生活の様子を語って記事をつくり、『讀賣新聞』をして掲載させたのは、なぜなのだろうか。そうせざるを得ないところまで追いつめられていたと考えるのが、自然であろう。

以上のようなことを念頭に置いて、改めて、『讀賣新聞』（1914年10月23日、5頁）の「婚儀を擧ぐる 藝術家と才媛 花嫁は尾竹一枝嬢」の見出し記事を読み返してみると、これもまた、社内の記者が書いた記事ではなく、身内による自作自演の記事だったのではないかという疑念がわく。というのも、四日後に迫った婚礼の儀を予告するというかたちをとりながら、「青鞥の新しい女たる紅吉」の過去が実にうまく消されてしまっているからである。それと同じように、この「よき母＝尾竹紅吉さん 愛嬢を連れて上京 奈良の山奥から 昔忘れぬ都に憧れて」の見出し記事においては、近日中に起こることになる東京移転にかかわって、その移転理由の詮索から世間の目を封じ込めようとする気持ちが働いていた可能性がある。つまり、こうした内容の記事を新聞に掲載する意図は、平安な大和での生活ではあったが、そうしたりっぱな生活を打ち捨てても、娘たちによりよい教育を受けさせるために、憧れの東京へ再びもどることにした「よき母＝尾竹紅吉さん」というイメージを、事の起こる前に、先行して読者のあいだに定着させることだったのではないだろうか。妄想であり邪推にすぎるとの批判を受けるかもしれないが、それでも、そう推断せざるを得ない。なぜならば、この記事の内容と、東京移転の真の理由とが、どうしても結び付かないからである。この記事が掲載されておおよそ半月が過ぎた一〇月の半ば、住み慣れた安堵村を離れて、富本憲吉一家は、東京の新天地へ向けて出立する。その第一義的な理由が、子どもの教育にあったのではないことは、本文での詳述のとおりであった。

なお、「よき母＝尾竹紅吉さん 愛嬢を連れて上京 奈良の山奥から 昔忘れぬ都に憧れて」の本文記事の末尾には、次のような訂正文が続いている。「訂正 昨紙掲載の子供を二人連れた婦人の寫眞は本稿尾竹紅吉さん事富本一枝さん母子の寫眞を組違へたのです。尚ほ昨紙『農村にも革命の波が』云々の記事は本稿の續き記事です[。]訂正しておきます。」

確かに、前日の『讀賣新聞』朝刊の七頁を開くと、「農村にも革命の波が——美しいのは——東京の婦人」という見出しの記事と、陽と陶と一枝の三人の親子が写った写真とが、掲載されている。陽も陶も、ともにおかつぱの髪形をし、着ているワンピースもお揃いである。この時期の貴重な画像といえる。

(1 1 4) 前掲「東京に住む」『婦人之友』、同頁。

(1 1 5) 平塚らいてう自伝『元始、女性は太陽であった③』大月書店、1992年、261頁。

(1 1 6) 前掲『私たちの成城物語』、61頁。

(1 1 7) 同『私たちの成城物語』、62頁。

(1 1 8) 同『私たちの成城物語』、72頁。

(1 1 9) 神近市子『神近市子自伝——わが愛わが闘い』講談社、1972年、213頁。

(1 2 0) 同『神近市子自伝——わが愛わが闘い』、214頁。

(1 2 1) 東京移住後の一枝の執筆活動を概観する場合、一枝が思想関連の嫌疑で代々木署に検挙されるのが、一九三三（昭和八）年八月五日であることからして、この日までを

もって前半とし、この日から、一九三九（昭和一四）年一月一日（『婦人公論』掲載の「第一線をゆく女性 青鞥社」（写真）と「探偵になりそこねた話」）までを後半として二分割することが適切であろうと考えられる。検挙を挟んで、幾分執筆内容に変化が認められるからである。それ以降、アジア・太平洋戦争の終結まで、一枝の執筆は途切れる。

以下は、東京移住後の前半における一枝の執筆活動のおおよその全体像である。

一枝が『女人藝術』のために書いた文や座談会の収録記事に、「七月抄」（第一巻第三号、一九二八年九月号）、座談会「女人藝術一年間批判會」（第二巻第六号、一九二九年六月号）、「夜明けに吸はれた煙草——一九二九年の夢」（第二巻第七号、一九二九年七月号）、「平塚雷鳥氏の肖像——らいてう論の序に代へて」（第二巻第八号、一九二九年八月号）、「鼠色の廃館——長崎風景の一つ」（第三巻第四号、一九三〇年四月号）、「女人藝術よ、後れたる前衛になるな」（第四巻第七号、一九三一年七月号）、および、座談会「母として目覚めなければならない時相」（第五巻第一号、一九三二年一月号）などがある。『女人藝術』は、一九三二（昭和七）年の六月号をもって廃刊となった。

『火の鳥』もまた、一枝にとってこの時期の発表の場であった。この雑誌は、『女人藝術』の創刊から三箇月遅れて一九二八（昭和三）年一〇月に、同じく女性のための文芸誌として、渡邊とめ子（筆名は竹島きみ子）によって誕生した。廃刊は、『女人藝術』が一九三二（昭和七）年六月であるのに対して、『火の鳥』は、それより一年以上のちの一九三三（昭和八）年一〇月であった。『女人藝術』には、にぎやかで、華やいだ側面があったが、それに比べれば、『火の鳥』は、落ち着いた、地味な編集に特徴があり、度重なる発禁が原因となって廃刊に追い込まれたと伝えられている。このふたつの雑誌は、刊行された期間や女流文筆家への門戸の開放といった点で共通しており、その意味で競合誌という関係にあった。一枝は、そうした双方の雑誌の性格を踏まえたうえで執筆したのであろうか、うまく書き分けているようにも見受けられる。この『火の鳥』に掲載された一枝の文は、「光永寺門前——長崎風景の一つ」（第二巻第四号、一九三〇年四月号）、「米を量る」（第三巻第九号、一九三〇年九月号）、および「哀れな男」（第五巻第四号、一九三一年四月号）の三編である。

『婦人公論』は、東京移住以前からの一枝の主たる発表雑誌のひとつであった。この時期の一枝は、この雑誌に「洋服の布地は自由に選びたい」（一六六号、一九二九年六月）と「共同炊事に就いて」（一八三号、一九三〇年十一月）を書いている。

また、『婦人画報』に目を向けると、一枝が関係した座談会形式の記事が三点掲載されている。そのうちの最初のふたつが、この時期のもので、「今と昔の先端婦人」（三二六号、一九三二年八月号）と「尾崎行雄先生に話を聴く」（三三八号、一九三三年八月号）が該当する。

一方、こうした雑誌とは別に、一枝は、『東京朝日新聞』において書評を書き、「女性のための批判」というコラムも担当した。書評としては、一九三三（昭和八）年三月二五日に、河崎なつ著の『新女性讀本』（文藝春秋社）をとり上げている。「女性のための批判」というコラムには、同年の続く五月八日に「轉落の資格 毒煙と三井と三菱と」を、五月一五日に「心を打たれた二つの悲惨事」を、五月二二日に「膽のすわり 犯罪にも明朗性」を、五月二九日に「生活苦諸相 生きるための罪々」を、そして六月五日に最後となる「男爵夫人 馬鹿さを持つ女性」を書いた。

以上が、一九二八（昭和三）年（『女人藝術』掲載の「七月抄」）から一九三三（昭和八）年（『婦人画報』掲載の「尾崎行雄先生に話を聴く」）までの、東京移住後の前半における約五年間の一枝の執筆活動の主だった内容である。

(1 2 2) 前掲『元始、女性は太陽であった③』、303-305 頁。

(1 2 3) 同『元始、女性は太陽であった③』、305-306 頁。

(1 2 4) 前掲「東京観（三二） 新らしがる女（三）」『東京日日新聞』。

(1 2 5) 帯刀貞代「富本一枝さんのこと」『新婦人しんぶん』、1966 年 10 月 6 日、3 頁。

また、帯刀の『ある遍歴の自叙伝』（草土文化、一九八〇年）にも、働く女性の解放運動を支援する一枝の姿の一端が描かれている。

(1 2 6) 蔵原惟人「富本憲吉さんのこと」『文化評論』8、1963・NO. 21、57 頁。

蔵原は、こうしたことも回想している。「富本さんは戦後、日本芸術院会員、東京美術学校教授を辞任して、郷里である奈良県安堵村の旧宅に帰り、京都で陶業に従っていたが、そのあいだ京都府委員会の同志を通じて、わが共産党の活動にも協力して下さっていた」

(57 頁)。また、次のことも明かしている。「当時は非合法の共産党員をかくまったというだけで、治安維持法違反の罪にとられる時代だった。それから一年たって私が検挙された時、私はその間にとまって歩いた住居についてきびしく追及された。……すでに『調書』の一部を勝手に作りあげて、私にその承認を強要した。そのなかには富本憲吉宅の名もあがっていた。党の中央部にいて党を裏切った男がそのことを売ったのである。私は頑強に抵抗し、そこから富本さんの名前を消さなければ、今後ともいっさい取調べに応じないと頑張った。警察ででっちあげられ、検察庁におくられた私についての簡単な『調書』から富本さんの名は除かれていた」(59-60 頁)。

(1 2 7) 同「富本憲吉さんのこと」『文化評論』、58 頁。

(1 2 8) 『週刊婦女新聞』、1933 年 8 月 13 日、2 頁。

なお、『讀賣新聞』は、この件について、「富本一枝女史 検挙さる 某方面に資金提供」の見出しをつけて、すでに次のように報じていた。「澁谷區代々木山谷町一三一國畫會員としてわが國工藝美術界の巨匠（陶器藝術）富本憲吉氏の夫人で評論家の富本一枝女史（四一）は去る五日夕刻長野懸軽井澤の避暑地から帰宅したところを代々木署に連行そのまゝ留置され警視廳特高課野中警部補の取調べをうけてゐる、さきごろ起訴された湯淺芳子女史の指導によつて、某方面に百圓と富本氏制作の陶器を與へたことが暴露したものである、女史は青鞞社時代からの婦人運動家で女人藝術同人として犀利な筆を揮つたことがあり、最近では湯淺女史らと共にソヴェート友の會に關係左翼への關心を昂めてゐた」（『讀賣新聞』、1933 年 8 月 9 日夕刊、2 頁）。

一週間後には、「富本一枝女史 書類だけで送局」の見出しで続報。その一部は、次のとおりである。「すべてを認めたらうへ従來の行動一切の清算を誓約したので十五日起訴留保意見を付して治安維持法違反として書類のみ送局となつた」（『讀賣新聞』、1933 年 8 月 16 日夕刊、2 頁）。

そして、さらにその三日後、『讀賣新聞』は、「富本女史の令嬢も検挙」の見出し記事を掲載した。以下はその全文である。「某方面に資金を提供して代々木署に留置されてゐた女流評論家富本一枝（四一）女史は既報の如く轉向を誓つたので起訴留保となり十八日朝夫君憲吉氏の出迎へをうけて釋放されたがこんどは愛嬢で文化學院高等部二年生陽子（一九）

さんが皮肉にも母親が帰宅する前日十七日朝突如澁谷區代々木山谷町一三一の自宅から代々木署に検舉、警視廳特高課から出張した野中警部補の取調べを受けてゐる 陽子さんは日本女子大學を中途退學して二年前文化學院に入學したもので、地下深くもぐつて左翼運動に関係してゐることが判明したため 母親の一枝女史とは何等関係がない、特高課では母親と一緒に検舉する筈であつたが同家には子供が多く女手を一度に失ひ家事に差支へるので一枝女史の釋放が決定するまで検舉を差しひかへてゐたものである(『讀賣新聞』、1933年8月19日夕刊、2頁)。

(129) 尾形明子「富本一枝と『女人藝術』の時代」『叢書月刊』2月号(通巻185号)、弘隆社、2001年、17-18頁。

(130) 以下は、東京移住後の後半における一枝の執筆活動のおおよその全体像である。

『婦人画報』に掲載された、一枝に関連する座談会形式の三点の記事のうち、残りのもう一点が、「女性の教育と職業と結婚の問題を中心に 家族會議」(三五七号、一九三四年一月号)である。これはあくまでも座談会の収録記事であり、富本一枝の筆名で雑誌等に掲載されるのは、検舉からおよそ一年と四箇月が経過した一九三四(昭和九)年一二月の『婦人文藝』に掲載された『父親の鼻』の辨解(第一卷第六号)が、その最初となるものであった。『婦人文藝』は、神近市子の手によって創刊された雑誌であった。一枝は、この雑誌のために原稿を執筆しただけでなく、同誌が主催する座談会にも出席している。そのなかの主なものとして「福田晴子さん」(一九三五年一月号)と「時事批判座談會」(一九三六年一月号)を挙げることができよう。

一九三五(昭和一〇)年八月二八日の『讀賣新聞』を見ると、「女の立場から」という欄を創設する旨の社告が掲載されている。それによると、「朝刊婦人面に『女の立場から』なる題下に、女性ならでは説き盡し得ぬ鋭利にして繊細な社會批評と豊富な識見による女性のための時事解説とを九月二日付の紙面より連日掲載することとした」とあり、執筆者として、岡本かの子(月)、山川菊榮(火)、野上彌生(水)、富本一枝(木)、神近市子(金)、茅野雅子(土)が紹介されている。一枝はこの欄に、計一九回、寄稿している。タイトルと掲載日は次のとおりである。「非レビュー的な話題」(九月五日)、「歴史の齒車」(九月一二日)、「喧嘩の考察」(九月一九日)、「妙な負債」(九月二六日)、「日本の地圖」(一〇月三日)、「富める牝鶏」(一〇月一〇日)、「空間の物質」(一〇月一七日)、「精霊」(一〇月二五日)、「狼と子羊」(十一月一日)、「花束のない花嫁」(十一月八日)、「一本のナイフ」(十一月一六日)、「媒酌婦人の日記」(十一月二三日)、「風の力」(十一月三〇日)、「畏」(十二月七日)、「明朗な階段」(十二月二一日)、「子供の讀物」(十二月二八日)、「稗と糠の飯」(一九三六年一月六日)、「靴下の穴」(一月一三日)、「生ける屍」(一月二八日)。

『婦人公論』も、一枝にとって重要な発表誌であった。『婦人公論』を発行する当時の中央公論社の社長が嶋中雄作で、在籍していた中学は異なるものの、雄作と憲吉はすでに中学生のころに面識があった。雄作が早稲田大学に、憲吉が東京美術学校に入学する以前の話である。一枝が目立って『婦人公論』や『中央公論』に寄稿するのは、そうした憲吉と雄作の中学時代からの間柄があったことに由来していたのかもしれない。

『婦人公論』に掲載された一枝の文および写真は、次の九点にのぼる。「痛恨の民」(二三四号、一九三五年二月)、「家を嫌ふ娘を語る座談會」(二三七号、一九三五年五月)、「働く婦人と離婚の問題」(二四七号、一九三六年三月)、「私の好きな時間 佐藤俊子さんと富

本一枝さん」(写真)(二五八号、一九三七年二月)、「原節子の印象」(二六〇号、一九三七年四月)、「私の顔」(写真と文)(二六一号、一九三七年五月)、「明日の若木——娘から孫へ」(二七八号、一九三八年九月)、そして、最後が「第一線をゆく女性 青鞆社」(写真)と「探偵になりそこねた話」(ともに、二八二号、一九三九年一月)である。

一九三六(昭和一一)年には、『中央公論』に「宇野千代の印象」(二月号)を、そして『麵麴』に「仲町貞子の作品と印象 手紙」(第五卷第二号、二月号)を寄稿する。この『麵麴』、そして一九三七(昭和一二)年の『新女苑』と一九三八(昭和一三)年の『文體』は、一枝にとってこの時期の新たな発表誌であった。一枝は一九三七(昭和一二)年の『新女苑』に「親の態度に就て」(第一卷第三号、三月号)と「鏡」(第一卷第一二号、一二月号)を書いているし、翌年の一九三八(昭和一三)年には、『文體』において、「猫兒(夢)」(第一卷第一号、一二月号)と「少年の日記」(第一卷第二号、一二月号)を世に問うている。その一方で、書籍に所収されたものとして、同じくこの年(一九三八年)の一二月に双雅房より発刊された『新装 きもの随筆』に、一枝の「春と化粧」を読むことができる。

以上が、一九三三(昭和八)年八月五日に検挙されて以降、一九三九(昭和一四)年一月一日の『婦人公論』に掲載された「第一線をゆく女性 青鞆社」(写真)および「探偵になりそこねた話」までの、一枝の東京移住後の後半部分にかかわる執筆活動の概略である。

(1 3 1) 「女性の教育と職業と結婚の問題を中心に 家族會議」『婦人画報』第 357 号、1934 年 11 月号、80 頁。

(1 3 2) 同「女性の教育と職業と結婚の問題を中心に 家族會議」『婦人画報』、88 頁。

(1 3 3) 富本陽子「明日」『行動』第 3 卷第 3 号、1935 年、240-241 頁。

(1 3 4) 「母親発見 今は古き母親の道 かけ離れた両親 父、富本憲吉 母、富本一枝 富本陽子」『讀賣新聞』、1935 年 12 月 1 日、9 頁。

(1 3 5) 「働く婦人と離婚の問題」『婦人公論』第 21 卷第 3 号、1936 年 3 月号、216 頁。

(1 3 6) 同「働く婦人と離婚の問題」『婦人公論』、同頁。

(1 3 7) 同「働く婦人と離婚の問題」『婦人公論』、同頁。

(1 3 8) 同「働く婦人と離婚の問題」『婦人公論』、同頁。

(1 3 9) 富本一枝「福田晴子さん」『婦人文藝』第 2 卷第 11 号、1935 年 11 月号、144 頁。

(1 4 0) 富本一枝「宇野千代の印象」『中央公論』1936 年 2 月号、202 頁。

(1 4 1) 富本一枝「仲町貞子の作品と印象 手紙」『麵麴』第 5 卷第 2 号、1936 年 2 月号、82 頁。

(1 4 2) 富本一枝「原節子の印象」『婦人公論』第 22 卷第 4 号、1937 年 4 月号、296 頁。

(1 4 3) 富本一枝「私の顔」『婦人公論』第 22 卷第 5 号、1937 年 5 月号、219 頁。

(1 4 4) 富本一枝「伊藤白蓮氏に」『婦人公論』64 号、1921 年 4 月号、70 頁。

(1 4 5) 富本一枝「春と化粧」『新装 きもの随筆』双雅房、1938 年、279 頁。

(1 4 6) 尾形明子『「女人芸術」の世界——長谷川時雨とその周辺』ドメス出版、1980 年、136 頁。

(1 4 7) 前掲『神近市子自伝——わが愛わが闘い』、224 頁。

- (1 4 8) 同『神近市子自伝——わが愛わが闘い』、同頁。  
(1 4 9) 高野芳子『わが青春・深尾須磨子』無限、1976年、15頁。  
(1 5 0) 同『わが青春・深尾須磨子』、36頁。  
(1 5 1) 同『わが青春・深尾須磨子』、49頁。  
(1 5 2) 同『わが青春・深尾須磨子』、50-51頁。  
(1 5 3) 同『わが青春・深尾須磨子』、51頁。  
(1 5 4) 「同棲愛の家庭訪問」『婦人公論』第15巻第5号、1930年5月号、18頁。  
(1 5 5) 前掲『わが青春・深尾須磨子』、52頁。  
(1 5 6) 同『わが青春・深尾須磨子』、46頁。  
(1 5 7) 同『わが青春・深尾須磨子』、52頁。  
(1 5 8) 同『わが青春・深尾須磨子』、同頁。  
(1 5 9) 大谷藤子「失われた風景」『學鐙』第60巻第12号、1963年12月号、42頁。  
(1 6 0) 同「失われた風景」『學鐙』、44頁。  
(1 6 1) 辻井喬『終りなき祝祭』新潮社、1996年、7頁。  
(1 6 2) 同『終りなき祝祭』、同頁。  
(1 6 3) 同『終りなき祝祭』、200-202頁。  
(1 6 4) 同『終りなき祝祭』、19頁。  
(1 6 5) 中村汀女『汀女自画像』日本図書センター、1997年、92頁。  
(1 6 6) 前掲「失われた風景」『學鐙』、42-43頁。  
(1 6 7) 同「失われた風景」『學鐙』、43-44頁。  
(1 6 8) 神近市子「雑誌『青鞥』のころ」『文學』第33巻第11号、1965年11月、64-65頁。  
(1 6 9) 前掲『「女人芸術」の世界——長谷川時雨とその周辺』、134頁。  
(1 7 0) 『私の履歴書』（文化人6）日本経済新聞社、1983年、223-224頁。〔初出は、1962年2月に『日本経済新聞』に掲載。〕  
(1 7 1) 井手文子「華麗なる余白・富本一枝の生涯」『婦人公論』第54巻第9号、1969年9月、346頁。  
(1 7 2) 海藤隆吉「祖師ヶ谷の家」『富本憲吉のデザイン空間』（展覧会図録）、松下電工汐留ミュージアム編集、2006年、6頁。  
(1 7 3) 富本憲吉「繪と詩」『馬酔木』第27巻第1号、1948年、ノンブルなし。  
(1 7 4) 前掲『神近市子自伝——わが愛わが闘い』、242頁。  
(1 7 5) 前掲『汀女自画像』、93頁。  
(1 7 6) 同『汀女自画像』、102頁。  
(1 7 7) 富本一枝「後記」『風花』創刊号、風花書房、1947年、44頁。  
(1 7 8) 富本岱助「祖母 富本一枝の追憶」『いしゅたる』第12号、1991年1月、16頁。  
(1 7 9) 同「祖母 富本一枝の追憶」『いしゅたる』、同頁。  
(1 8 0) 近藤富枝『相聞 文学者たちの愛の軌跡』中央公論社、1982年、175頁。初出誌は、「誄歌」『婦人公論』昭和54年12月臨時増刊号。  
(1 8 1) 前掲『「女人芸術」の世界——長谷川時雨とその周辺』、134頁。

- (182) 『毎日新聞』(大阪)、1949年10月25日、2頁  
(183) 同『毎日新聞』、同頁。  
(184) 同『毎日新聞』、同頁。  
(185) 同『毎日新聞』、同頁。  
(186) 前掲『尾竹竹坡傳——その反骨と挫折』、251-252頁。  
(187) 神近市子「このひとびと③ 富本一枝 相見しは夢なりけり」『総評』、1967年10月20日、4頁。  
(188) 神近市子「朋友富本一枝」『在家佛教』第234号、1973年9月、54頁。  
(189) 前掲『尾竹竹坡傳——その反骨と挫折』、264頁。  
(190) 前掲『薊の花——富本一枝小伝』、192頁。  
(191) 富本一枝「村の保育所」『暮らしの手帖』第16号、1952年6月、36頁。  
(192) 同「村の保育所」『暮らしの手帖』、41頁。  
(193) 富本一枝「春未だ遠く」『暮らしの手帖』第19号、1953年3月、143頁。  
(194) 「まないた」『婦人民主新聞』、1966年10月2日、1頁。  
(195) 松島栄一「あとがき」、松島栄一編『女性の歴史』(講座女性5)、三一書房、1958年、199頁。  
(196) 座談会「婦人運動・今と昔——この半世紀の苦難の歩み——」『朝日ジャーナル』第3巻第36号、1961年、67頁。  
(197) 同座談会「婦人運動・今と昔——この半世紀の苦難の歩み——」『朝日ジャーナル』、76頁。  
(198) 同座談会「婦人運動・今と昔——この半世紀の苦難の歩み——」『朝日ジャーナル』、77頁。  
(199) 前掲「華麗なる余白・富本一枝の生涯」『婦人公論』、346頁。  
(200) 井手文子『青鞥 元始女性は太陽であった』弘文堂、1961年、1頁。  
(201) 同『青鞥 元始女性は太陽であった』、4頁。  
(202) 前掲『尾竹竹坡傳——その反骨と挫折』、247頁。  
(203) 同『尾竹竹坡傳——その反骨と挫折』、255頁。  
(204) 高井陽「アザミの花——母(富本一枝)、父(富本憲吉)の断片」、高井陽・折井美那子『薊の花——富本一枝小伝』ドメス出版、1985年、5頁。  
(205) 同「アザミの花——母(富本一枝)、父(富本憲吉)の断片」、高井陽・折井美那子『薊の花——富本一枝小伝』、6頁。  
(206) 同「アザミの花——母(富本一枝)、父(富本憲吉)の断片」、高井陽・折井美那子『薊の花——富本一枝小伝』、7-8頁。  
(207) 同「アザミの花——母(富本一枝)、父(富本憲吉)の断片」、高井陽・折井美那子『薊の花——富本一枝小伝』、8頁。  
(208) 同「アザミの花——母(富本一枝)、父(富本憲吉)の断片」、高井陽・折井美那子『薊の花——富本一枝小伝』、同頁。  
(209) 平塚らいてう自伝『元始、女性は太陽であった④』大月書店、1992年、311-312頁。  
(210) 同『元始、女性は太陽であった④』、312頁。

(2 1 1) 『朝日新聞』が報じた富本憲吉死亡に関する記事は、次のとおりである。『朝日新聞』、1963年6月9日(夕刊)、11頁。『朝日新聞』、1963年6月10日(夕刊)、7頁。『朝日新聞』、1963年6月14日(朝刊)、15頁。および『朝日新聞』、1963年6月14日(夕刊)、6頁。

(2 1 2) 辻本勇『近代の陶工・富本憲吉』双樹社、1999年、196-197頁。

(2 1 3) 富本一枝「母の像 今日を悔いなく」、日本子どもを守る会編集『子どものしあわせ』第121号、草土文化、1966年6月号、3頁。

しかし、心配をかけたことに対して母にわびる気持ちは、これが最初ではない。というのも、一枝は、こうした自覚ももっていたからである。『『新しい女』で母をずいぶん困らせ、母は私のために肩身の狭い思いをしました』(富本一枝「青鞥前後の私」、松島栄一編『女性の歴史』(講座女性5)、三一書房、1958年、178頁)。結婚に際して伝統的な婚礼衣装を着用したのも、わびる気持ちの裏返しだったのかもしれない。そうであれば一枝は、物心がついて以来、生涯を通じて心のなかで母にわびていたことになる。その内実が、母の思いに反して「新しい女」のごとくに生きたことに対してなのか、あるいはその表裏をなす、母の教えを満たす女に徹しきれずに生きてしまったことに対してなのか、それはよくわからない。あるいは、こうした自分の表層の「生」についてというよりも、むしろ、他人に語れない自己の深層の「性」にかかわって、母に心配をかけ、困らせたことを最晩年の一枝はわびているのかもしれない。しかしそれについても、現時点においては、実証するにふさわしい証拠を見出すことはできない。さらにいえば、一枝の母親が、娘の特異な「性」についてどう思っていたのか、それを示す資料も、見たところ残されていないようである。

一方、最後まで一枝は、性自認(ジェンダー・アイデンティティ)に関して明確に「カミング・アウト」することはなかった。しかしながら、「母の像 今日を悔いなく」執筆の五年前に、すでに一枝は、心の性からの離脱現象(逆にいえば、体の性への帰着現象)とも受け止められるような発言をしている。一九六一(昭和三六)年九月号の『婦人界展望』は、「“青鞥”発刊五十周年」と題して、らいてうと一枝の対談を載せた。見開き二頁のごく短いものではあったが、そのなかで司会者が、紅吉という当時のペンネームに言及すると、それに対して一枝は、「そう、私は、いまでもそうですけど紅いろが好きなのです」(「“青鞥”発刊五十周年」『婦人界展望』第85号、1961年9月号、8頁)と応じ、さらに、当時の服装について話題が向けられると、「私はかすりが好きでしたので着ていたのです。それに日本婦人がズロースをつけるようになったのはずっとあとのことでしょう。画をかく私には、はかまはどうしても必要だったのです」(同「“青鞥”発刊五十周年」『婦人界展望』、9頁)と、返答している。性別表現に関連するペンネームや服装にかかわって、ここでの一枝の応答は、明らかに身体的性の範囲から発せられている。心の性を表現していると思われる、「紅吉」の「吉」という男性性を連想させる文字についても、袴にマント、そして印籠に駒下駄という男性性を強調する装いについても、決して触れられることはなかった。こうした、一見すれば心の性からの離脱現象ではないかと考えられる過去への修正的再解釈が、「心配をかけたことに対して母にわびる気持ち」の切実なる現われだったのかどうかは、これも資料に乏しくここで容易に判断することはできない。しかしその後、絶筆のエッセイの筆名に「紅吉」ではなく「紅」の一字を用いて

いることや、また別の箇所では紅吉を「こうきち」ではなく「べによし」と読ませようとしていることから判断すると、最晩年において一枝が、青鞞時代の自身の性別表現にかかわって、意識的に修正的再解釈を行なおうとしたことは、ほぼ間違いないことであろう。

(214) 同「母の像 今日を悔いなく」、日本子どもを守る会編集『子どものしあわせ』、同頁。

(215) 前掲『尾竹竹坡傳——その反骨と挫折』、233 頁。

(216) 同『尾竹竹坡傳——その反骨と挫折』、233-234 頁。

(217) 同『尾竹竹坡傳——その反骨と挫折』、234 頁。

(218) 同『尾竹竹坡傳——その反骨と挫折』、233 頁。

(219) 同『尾竹竹坡傳——その反骨と挫折』、同頁。

(220) 同『尾竹竹坡傳——その反骨と挫折』、263 頁。

(221) 尾竹紅吉「歸へつてから」『青鞞』第 2 巻第 10 号、1912 年 10 月、131 頁。

(222) 富本一枝「青鞞前後の私」、松島栄一編『女性の歴史』(講座女性 5)、三一書房、1958 年、178 頁。

(223) 「謂ゆる新しき女との対話——尾竹紅吉と一青年」『新潮』、1913 年 1 月、107 頁。

(224) 前掲「青鞞前後の私」、松島栄一編『女性の歴史』、同頁。

(225) 前掲『元始、女性は太陽であった③』、298-299 頁。

(226) 同『元始、女性は太陽であった③』、300 頁。

(227) 前掲「雑誌『青鞞』のころ」『文學』、68-69 頁。

さらに神近市子は、『神近市子自伝——わが愛わが闘い』のなかで、次のようなことを回想している。神近の東京日日新聞への入社をきっかけをつくったのは紅吉(富本一枝)の紹介によるものであった。結婚生活の場を安堵村に移すため紅吉が東京を立つ少し前のことだったのではないかと思われるが、神近が回想するところによると、「私をたずねて尾竹紅吉の使いという人があらわれた。手紙をあけてみると、東京日日新聞(いまの毎日新聞)で婦人記者をさがしているから、立候補してみないかと書いてあった。入社の希望があるなら、履歴書を持って新聞社に小野賢一郎氏をたずねてみるということであった」(神近市子『神近市子自伝——わが愛わが闘い』講談社、1972 年、122 頁)。紅吉は青鞞社の社員のころから小野とは面識があった。そうしたこともうまく作用して、以前からジャーナリズムに強い関心をもっていた神近は、希望どおりに入社が決まった。

(228) 前掲『ひとすじの道 第三部』、134-136 頁。

また丸岡秀子は、富本一枝について、次のようなことも回顧している。「ことに、子どもを愛することにおいては誰も及ばなかった。『お母さんが読んで聞かせるお話』(A・Bの両巻ともに一九七二年、暮しの手帖社刊)という単行本を残しているが、彼女のお通夜の晩、近所の子どもたちが、次々に棺の前で泣いていた姿もまだわたしの記憶にある。それもいいかげんなものではない。わたしの娘も息子も、幼いときに体が弱く、何度か重症に陥ったことがあった。そんなとき、一枝さんは、青山の日本赤十字まで自分で出かけて、医者連れてこなければ納得できない、という真剣さも見せた。その態度に打たれた赤十字の青柳先生のお手紙が、まだ大切に残っている。だから、彼女はわたしの十代の飢えについても、深い配慮で見守ってくれた。“耐えること、耐えた瞬間はすでに過去です”と

書き送ってくれた言葉に、わたしの人生はどれだけ支えられてきたことかわからない」

(丸岡秀子『いのちと命のあいだに』筑摩書房、1984年、31頁)。

(229) 前掲「富本一枝さんのこと」『新婦人しんぶん』、同頁。

(230) 志村ふくみ「母との出会い・機織との出会い」、原ひろこ編『母たちの時代』駸々堂、1980年、25-26頁。

(231) 同「母との出会い・機織との出会い」、原ひろこ編『母たちの時代』、同頁。

(232) たとえば、書名の例として『青鞥の女・尾竹紅吉伝』(渡邊澄子著、不二出版、2001年)を挙げることができる。書名は限定的であるにもかかわらず、内容はそれから大きく逸脱して、広く富本一枝の生涯が描かれている。また、特集のタイトルの例として「特集◆新しい女・尾竹紅吉」(『彷徨月刊』通巻185号、2001年2月号、2-33頁)を挙げることができる。この場合も、特集名と、所収されている各エッセイの内容とが、必ずしも一致しているわけではなく、幾つもの齟齬が散見される。このふたつの事例が示すように、これまでの研究にみられる「青鞥の女」あるいは「新しい女」という用語については、その実体が、そしてその呼称に対する一枝本人の認識等が、一次資料に基づき十全に検討も定義もなされないまま、一方的に一枝の身にまとわされてきた傾向にあったといえる。同時に、もうひとつ特徴的なことは、その用語をラベリングすることにより、意識的であったのか、無意識的であったのかはわからないが、富本一枝というひとりの女性の全存在なり全生涯なりが、あたかもそうであったかのような印象を結果として醸し出してしまったことであろう。

(233) 前掲「華麗なる余白・富本一枝の生涯」『婦人公論』、331頁。

(234) 同「華麗なる余白・富本一枝の生涯」『婦人公論』、同頁。

また一枝は、「“青鞥”発刊五十周年」と題して、らいてうと対談を行なった際には、このようなことも語っている。「当時、青鞥へ書いていたものをいま読むと、汗が出ます。若い一途なままをむきだして書いたのですね」(「“青鞥”発刊五十周年」『婦人界展望』第85号、1961年9月号、8頁)。

(235) 「編輯室より」『青鞥』第3巻第8号、1913年8月、195頁。

(236) 前掲「母の像 今日を悔いなく」、日本子どもを守る会編集『子どものしあわせ』、同頁。

(237) 前掲「華麗なる余白・富本一枝の生涯」『婦人公論』、331-332頁。

(238) ジャン・マーシュ『ウィリアム・モリスの妻と娘』中山修一・小野康男・吉村健一訳、晶文社、1993年、16頁。[The original text is Jan Marsh, *Jane and May Morris: A Biographical Story 1839-1938*, Pandora Press, London, 1986.]

(239) 同『ウィリアム・モリスの妻と娘』、17頁。

(240) 同『ウィリアム・モリスの妻と娘』、同頁。

(241) 前掲『紅子の夢』、274-275頁。

(242) 前掲『尾竹竹坡傳——その反骨と挫折』、217頁。



図1 七歳のときの尾竹一枝（中央）。左右は妹と弟。



図3 画室のなかの尾竹一枝。



図2 マント姿の尾竹紅吉（一枝）。



図4 『青鞥』創刊者の平塚らいてう。



図5 1911年7月に情死したふたりの令嬢。



図7 1923年ころの富本憲吉と一枝。



図8 1925年秋の富本一枝とふたりの娘(右が長女の陽、中央が次女の陶)。



## 番紅花

編輯同人  
 原 信子 小林 晋津  
 松井須磨子 神近 市  
 小笠原 良 尾竹 一枝

(銀二費送) 容内號月四 (錢十三金價定)

**挿畫**

- 歌川国芳の『浮城物語』
- 若尾徳平の『浮城物語』
- 尾竹一枝の『浮城物語』
- 表紙文・裏紙

- 藤 光 (Kogoritaro Taniguchi)..... 尾竹 一枝
- 藤 春の小曲 (詩)..... 阿部 次郎
- 藤 春のレオナルド・ダ・ヴィンチの言葉..... 小笠原 良
- 藤 春の妹 (小説)..... 青山 菊栄
- 藤 春のマカールの夢 (Karamell)..... 岡田 八千代
- 藤 春の伊達虫子の紹介..... 伊達 虫子
- 藤 春のさようなら (小説)..... 原 信
- 藤 春のバルシナルに就て..... 尾竹 一枝
- 藤 春のワグネル、バルシナルの筋書..... 尾竹 一枝
- 藤 春のさくらの花 (小説)..... 尾竹 一枝
- 藤 春の海外通信..... 尾竹 一枝
- 藤 春のいい小説家といふ息子 (Chico)..... 尾竹 一枝
- 藤 春の影のかけ (詩)..... 尾竹 一枝
- 藤 春の『ピエールとジャン』を讀みて..... 尾竹 一枝
- 藤 春の米國の歌劇界..... 尾竹 一枝
- 藤 春の編輯室にて..... 尾竹 一枝

店書堂雲東 九町物繪區橋本日市京東 所行發 (番四一六五京 編振)

図6 エリスの抄訳「女性間の同性の戀愛」を所収した『青鞥』(1914年4月号)に掲載された『番紅花』(第1巻第2号)の広告。



図9 1929年7月号の『女人藝術』の口絵となった富本一枝と長男の壮吉。



図 1 0 1935年に『讀賣新聞』が「女の立場から」のコラムを創設したときの社告。

富本一枝

図 1 1 1935年ころの富本一枝の直筆署名。



図 1 3 第一線をゆく女性 青鞆社。右端から左回りで、生田花世、長谷川時雨、富本一枝、岡田八千代、平塚らいてう、神近市子。

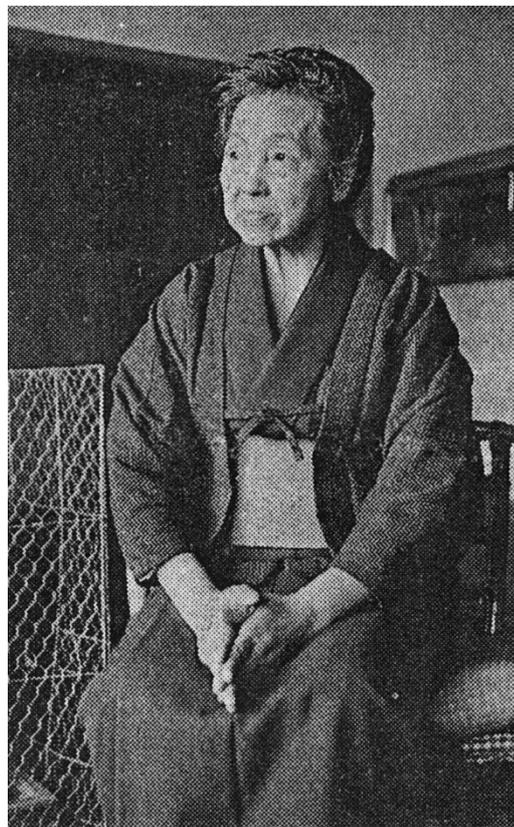


図 1 4 晩年の富本一枝。



図 1 2 ピンポンを楽しむ佐藤(田村)俊子(右)と富本一枝。

図版出典

- 【図 1】『淑女畫報』第 3 卷第 13 号、1914 年 12 月、37 頁。
- 【図 2】『淑女畫報』第 3 卷第 13 号、1914 年 12 月、35 頁。
- 【図 3】『婦人畫報』第 86 号、1913 年 9 月、ノンブルなし。
- 【図 4】『婦人畫報』第 86 号、1913 年 9 月、ノンブルなし。
- 【図 5】『新婦人』第 1 年第 6 号、1911 年 9 月、48 頁。
- 【図 6】『青鞜』第 4 卷第 4 号、1914 年 4 月、ノンブルなし。
- 【図 7】『アサヒグラフ』第 1 卷第 2 号、1923 年、6 頁。
- 【図 8】『讀賣新聞』1925 年 9 月 29 日、7 頁。
- 【図 9】『女人藝術』第 2 卷第 7 号、1929 年 7 月号、ノンブルなし。
- 【図 10】『讀賣新聞』1935 年 8 月 28 日、2 頁。
- 【図 11】『讀賣新聞』1935 年 9 月 5 日、9 頁。
- 【図 12】『婦人公論』第 22 卷第 2 号、1937 年 2 月号、8-9 頁。
- 【図 13】『婦人公論』第 24 卷第 1 号、1939 年 1 月号、10-11 頁。
- 【図 14】『新婦人しんぶん』新日本婦人の会発行、1987 年 9 月 24 日、2 頁。

## 索引

### ア行

- 『朝日ジャーナル』 80  
『朝日新聞』(→『東京朝日新聞』) 83  
アジア・太平洋戦争 62, 63  
『馬酔木』 70  
安宅安五郎(一枝の妹の福美の夫) 11, 51  
安宅良子(安宅安五郎・福美の娘) 51  
「新しい女」 14, 19, 22, 23, 27, 60, 61, 80, 81, 84, 88, 89, 93, 94  
熱田優子 50, 56  
生田花世 46  
石垣綾子(旧姓田中) 34-36, 87, 92  
『我が愛 流れの足跡』 34  
石田寿枝 74-77, 82  
板垣直子 46  
市川房枝 52, 65, 80  
井手文子 69, 80, 81, 93, 95, 100  
「華麗なる余白・富本一枝の生涯」 69, 95  
『青鞥 元始女性は太陽であった』 81, 82, 93, 100  
伊藤野枝 100  
伊藤白蓮 53, 54  
井上美子 45  
『私たちの成城物語』(中江泰子と共著) 45  
今井邦子 52  
今村荒男 83  
岩波書店 79, 92  
ウィリアム・モリス・ギャラリー William Morris Gallery 98  
ウィリアム・モリス協会 William Morris Society 98  
内田魯庵 9, 15  
「性慾研究の必要を論ず」 9, 15  
宇野千代 52-54  
エリス、ハヴロック Ellis, Havelock 15, 18, 19  
「女性間の同性戀愛——エリス——」 15, 18-20, 25  
円地文子(旧姓上田) 46  
「晩春騒夜」 46  
大阪府立成人病センター 83  
大谷藤子 48, 50, 65-68, 71-74, 77  
「失われた風景」 66

「血縁」 65

大田洋子 46

尾形明子 50, 56, 74

『「女人芸術」の世界——長谷川時雨とその周辺』 56

岡田禎子 46

小川正矩 38

荻野綾子 40, 64, 65

奥むめお 52

奥村博（平塚らいてうの夫、のちに博史に改名） 21, 22, 51, 68

小山内薫 46

尾竹うた（尾竹一枝の母） 11, 84, 94

尾竹越堂（本名熊太郎、尾竹一枝の父） 11

尾竹きく（尾竹竹坡の妻、尾竹親の母） 11

尾竹倉松（雅号は國石、尾竹熊太郎の父、妻はイヨ） 11

尾竹國観（本名亀吉、尾竹越堂の弟） 11, 58

尾竹紅吉（本名一枝、尾竹越堂・うたの長女、のちに富本憲吉の妻）（→富本一枝） 4, 10-25,  
27, 28, 47, 48, 68, 71, 75, 81, 82, 85, 87-89, 92, 93, 95, 97, 99

「悲しきうたい手」 24

「歸へつてから」 87

「五色の酒」 12, 14, 28, 88

「最後の霊の梵鐘に」 11

「自分の生活」 20, 21, 24, 25

「太陽と壺」 11

《陶器》 11

「同性の恋」（あるいは「らいてうとの恋」） 14, 17-19, 28, 88

《枇杷の實》 15

「吉原登楼」（あるいは「吉原遊興」） 14, 28, 88, 100

「夜の葡萄樹の蔭に」 24

「私の命」 24

尾竹貞子（尾竹越堂・うたの六女、夫は正躬） 11

尾竹親（尾竹竹坡の息子） 76, 77, 82, 84, 85, 99, 100

『尾竹竹坡傳——その反骨と挫折』 76, 84, 85, 99

尾竹竹坡（本名染吉、尾竹越堂の弟、妻はきく） 11, 58, 85, 100

尾竹福美（尾竹越堂・うたの次女、のちに安宅安五郎の妻） 11, 51, 92

尾竹三井（尾竹越堂・うたの三女、浅井呉竹・かとの養女、のちに野口謙次郎の妻） 11

小野とよ（志村ふくみの実母） 92

折井美耶子 4, 5, 78, 97, 99, 100

『薊の花——富本一枝小伝』（→高井陽） 4, 97, 99, 100

力行

- 偕成社 91  
海藤日出夫（富本陶の夫） 70  
『解放』 28, 37  
『輝ク』 50  
『風花』（風花書房を含む） 71-73  
金子しげり 65  
神近市子 46, 49, 63, 67, 68, 70, 71, 76, 77, 79, 86, 87, 90, 92, 95  
「雑誌『青鞥』のころ」 90  
「富本一枝 相見しは夢なりけり」 76  
「朋友富本一枝」 76  
軽部清子 48, 65, 66  
川崎なつ 49  
『新女性讀本』 49  
河盛好蔵 71  
「何を讀むべきか」 71  
関東大震災 36, 38  
木田久 78  
京都市立美術大学 75  
久保田万太郎 72  
『一に十二をかけるのと十二に一をかけるのと』 72  
熊本県立図書館 29  
『暮しの手帖』 71, 78, 84  
「お母さまが読んできかせるお話」 78, 79, 84  
蔵原惟人 49, 92  
桑谷定逸 9  
「戦慄す可き女性間の顛倒性慾」 9  
『行動』 51  
弘文堂 81  
国際民主婦人連盟 Women's International Democratic Federation (WIDF) 79  
『國民新聞』 17  
コットン、ユージェニー Cotton, Eugénie 79  
『子どものしあわせ』 84  
呉佩珍 4, 5  
「『青鞥』同人をめぐるセクシュアリティ言説——一九一〇年代を中心に」 4  
小林哥津 86  
小林多喜二 49  
小林信（のちに桑野信子） 38-41, 48  
「2. 稚い人達のお友達となつて」 38, 40  
近藤富枝 73, 74  
『相聞 文学者たちの愛の軌跡』 73

## サ行

- 西行法師 83  
サッポー Sappho 64  
佐藤俊子（田村俊子） 54  
澤田順次郎（→羽田鋭治） 26, 29  
    『神秘なる同性愛 下巻』 29, 32, 38  
    『神秘なる同性愛 上巻』 29  
沢柳政太郎 45  
三一書房 79  
    『三彩』 69  
島崎勉 97  
嶋中雄作 52  
島中雄三 8, 9  
志村ふくみ 90, 92, 95  
    「母との出会い・織機との出会い」 92  
自由学園（→羽仁もと子） 34, 49, 51, 90  
    『週刊婦女新聞』 46, 49  
    『淑女畫報』 21  
    「謎は解けたり紅吉女史の正體——新婚旅行の夢は如何に 若く美しき戀の犠牲者」  
    21  
春陽堂 26  
松風栄一 74, 75  
女子美術学校 22, 75  
ショー、ジョージ・バーナード Shaw, George Bernard 96  
成城学園（成城小学校、成城女学校を含む） 43, 45, 51  
青鞞社（青鞞、青鞞運動、青鞞時代を含む） 4, 10-17, 19, 20, 27, 28, 34, 47-49, 60, 61, 75,  
79, 81, 82, 85, 93, 94, 99  
    『青鞞』 6, 10, 11, 15, 16, 19, 20, 25, 45, 46, 57, 71, 72, 79-82, 87, 93  
    『世界』 79  
世界母親大会 79  
瀬戸海晴美（瀬戸内寂聴） 99  
    『美は乱調にあり』 99, 100

## タ行

- 高井陽（富本憲吉・一枝の長女、成田穰と離婚後高井春彦と結婚）（→富本陽） 4, 5, 78, 97,  
99, 100  
    『薊の花——富本一枝小伝』（→折井美耶子） 4, 97, 99, 100  
高野芳子 63-65  
    『わが青春・深尾須磨子』 63

- 高群逸枝 47, 48  
巽画会 11  
帯刀貞代 48, 49, 79, 90-92, 95  
『日本の婦人——婦人運動の発展をめぐって』 79, 92  
田中祐吉 9, 24  
「女性間に於ける同性の愛」 9, 24  
『小さき泉』 73  
「小さな学校」 32, 38-40, 59  
『中央公論』 53, 65  
中條百合子（のちに宮本百合子）（→宮本百合子） 13, 40, 46  
辻井喬 66, 67, 97, 99  
『終りなき祝祭』 66, 67, 97, 99  
辻本勇 83, 97  
『近代の陶工・富本憲吉』 83, 97  
堤清二（→辻井喬） 66  
堤康次郎 66  
帝国芸術院 70  
陶淵明 69  
『東京朝日新聞』（→『朝日新聞』） 46, 49  
『東京日日新聞』 14  
東京美術学校（現在の東京芸術大学） 21, 33, 68, 70, 72, 76  
「高山疎開」 72  
東洋英和 51  
富本一枝（富本憲吉の妻、旧姓尾竹、雅号は紅吉）（→尾竹紅吉） 4-6, 10, 11, 13-15, 20, 23-61, 63-85, 87-101  
「危ない街角」 84, 85  
「哀れな男」 47  
「安堵村日記」 31  
「1. 母親の欲ふ教育」 38, 40  
「伊藤白蓮氏に」 53, 54  
「宇野千代の印象」 53  
「海の砂」 28, 37  
「奥さんと鶏」 78  
「おくびょうな兎」 78, 84  
「膽のすわり 犯罪にも明朗性」 49  
「共同炊事に就いて」 4, 46  
「結婚する前と結婚してから」 26, 27, 81  
「心を打たれた二つの悲惨事」 49  
「子供と私」 30  
「子供を讃美する」 30, 31

- 「米を量る」 46  
『番紅花』 19, 20, 21, 24, 46, 57, 71, 72  
「生活苦諸相 生きるための罪々」 49  
「青鞥前後の私」 79, 81, 88, 89  
「戦争とはいわずに」 84  
「男爵夫人 馬鹿さを持つ女性」 49  
「探偵になりそこねた話」 61  
「轉落の資格 毒煙と三井と三菱と」 49  
「東京に住む」 40, 43, 45, 57, 58  
「遠い国のみえる銀の皿」 79, 84  
「仲町貞子の作品と印象 手紙」 53, 54  
「女人藝術よ、後れたる前衛になるな」 47  
「母親の手紙」 32  
「母の像 今日を悔いなく」 84  
「原節子の印象」 53, 54  
「春未だ遠く」 78  
「春と化粧」 54  
「福田晴子さん」 53  
「鮎」 46  
「米軍の迷走」 84  
「貧しき隣人」 46  
「村の保育所」 78  
「夜明けに吸はれた煙草——一九二九年の夢」 46  
「私の顔」 54  
富本憲吉（雅号は安堵久左） 4, 13, 21-31, 33, 34, 36-41, 43-45, 50, 52, 56-59, 61, 63, 65,  
66, 68-72, 74-77, 82, 83, 86, 90, 95, 97-99, 101  
「3. 生徒ふたりの教室」 38, 40  
富本憲吉氏圖案事務所（→美術店田中屋） 23, 25  
「美を念とする陶器」 30  
「私の履歴書」（『日本經濟新聞』に連載） 69  
富本壯吉（富本憲吉・一枝の長男） 44-46, 66, 67, 70, 83, 86, 99  
富本岱助（富本陽・成田穰の息子） 65, 66, 72, 74  
「祖母 富本一枝の追憶」 72  
富本陶（富本憲吉・一枝の次女） 30-34, 37-40, 43, 59, 70  
富本豊吉（富本憲吉の父） 84  
富本陽（富本憲吉・一枝の長女）（→高井陽） 26, 29-32, 34, 36-40, 43, 45, 51, 52, 59, 60,  
61, 65, 70, 72, 82  
「明日」 51

ナ行

- 中江昭男（中江百合子の三男） 45  
中江泰子（旧姓植村、中江昭男の妻） 33, 45  
『私たちの成城物語』（井上美子と共著） 45  
中江百合子 33, 42, 43, 45, 72, 92  
中澤不二雄 72  
『ぼくらの野球』 72  
中野初子 14  
仲町貞子 54  
中村汀女（本名斎藤破魔子） 67, 68, 71, 73, 77, 86, 87, 92  
中村時子 8, 9  
中本たか子 46  
奈良県立図書情報館（旧称は奈良県立戦捷図書館） 29  
奈良女子高等師範学校（現在の奈良女子大学） 29, 36, 37, 39, 40, 41, 90  
奈良女子大学 29, 39, 40  
奈良女子大学学術情報センター 39  
日本共産党 49, 56  
『日本経済新聞』 69  
日本女子大学 51  
日本母親大会 79  
『女人藝術』 46, 47, 49, 50, 56, 57, 61, 74  
野上彌生子 13  
野口謙次郎（一枝の妹の三井の夫） 11

## ハ行

- 長谷川時雨 46, 50, 54, 57  
羽田鋭治（→澤田順次郎） 26  
『變態性欲論』 26, 29  
バトラー、ジュディス Butler, Judith 4  
花森安治 71, 78  
羽仁もと子（→自由学園） 34, 49  
林茂 79  
林芙美子 46  
『放浪記』 46  
原節子 54  
美術店田中屋 23, 25  
『火の鳥』 46, 47  
平塚曙生（奥村博史・平塚らいてうの長女） 45, 51, 90  
平塚敦史（奥村博史・平塚らいてうの長男） 45  
平塚らいてう（本名明子） 4, 5, 10-12, 14-22, 34, 45, 47, 48, 51, 68, 72, 75, 79-81, 83,  
85-87, 89, 90, 93, 95

- 「圓窓より」 16-19  
「砧村に建てた私たちの家」 45  
自伝『元始、女性は太陽であった』 47  
『青鞥社』のころ——明治・大正初期の婦人運動（座談会） 79  
「婦人運動・今と昔——この半世紀の苦難の歩み——」（座談会） 80
- 深尾須磨子 40, 48, 63-65  
福田晴子 53, 54  
藤城清治 79  
『婦女新聞』 7-9, 11  
『婦人画報』 41, 51  
『婦人公論』 4, 26, 46, 52-54, 61, 65, 69,  
『婦人之友』 30, 31, 34, 38, 40, 45, 57  
『婦人文藝』 53  
『婦人民主新聞』 84, 85  
ブリティッシュ・カウンシル British Council 97  
プロレタリア芸術（プロレタリア文化、プロレタリア文学を含む） 46, 49, 53, 61  
文化学院 49  
『文學』 90  
堀文子 65
- マ行  
『毎日新聞』 74, 76  
マーシュ、ジャン Marsh, Jan 96-100  
『ジェイン・モリスとメイ・モリス』（訳書題『ウィリアム・モリスの妻と娘』） *Jane and May Morris: A Biographical Story 1839-1938* 96, 100
- 真杉静枝 46  
町田仁 78  
松島栄一 79  
『講座女性5 女性の歴史』 79, 88  
松本順造 9  
「恐るべき同性の愛——親不知の激浪に相擁して情死せし二令嬢」 9
- 丸岡秀子 36-40, 87, 90, 91, 95  
『いのちと命のあいだに』 36  
『ひとすじの道 第三部』 36, 39, 91
- マルクス主義 47, 50, 53  
三上於菟吉（長谷川時雨の夫） 46  
三島由紀夫 66, 67  
「午後の曳航」 66, 67  
水沢澄夫 69  
「富本憲吉模様選集」 69

- 水原秋櫻子 70  
三井礼子 79  
南薫造 33  
宮本百合子（旧姓中條）（→中條百合子） 12, 13, 45  
    「二つの庭」 12  
無産婦人芸術連盟 47, 48  
    『婦人戦線』 47  
武者小路實篤 71  
    「畫をかく事で」 71  
村田静子 79  
村山籌子（旧姓岡内、村山知義の妻） 34, 49  
村山知義 49  
室生犀星 71  
    「(俳句) 露の臺」 71  
    『麵麴』 53, 54  
モリス、ウィリアム Morris, William 21, 96-98, 101  
モリス、ジェイン（ウィリアム・モリスの妻、旧姓バーデン） Morris, Jane (née Burden)  
    98, 101  
モリス、メイ（ウィリアム・モリスとジェインの次女） Morris, May 98  
文部省（現在の文部科学省） 98  
門馬千代子 65

#### ヤ行

- 矢田津世子 46  
山川菊栄 46, 79, 80  
やまかわ・さとし 34  
山下毅雄 78  
山の木書店 72-74, 77-79  
湯浅芳子 13, 40, 50  
夕陽丘高等女学校 11, 92  
横田文子 48, 50, 65  
吉永春子 13, 97, 99  
    『紅子の夢』 13, 97, 99, 100  
吉野源三郎 72, 73  
    『人間の尊さを守ろう』 72, 73  
吉屋信子 65  
    『讀賣新聞』 15, 46, 52, 58-61

#### ラ行

- ロセッティ、ダンテ・ゲイブリエル Rossetti, Dante Gabriel 96

著作集 1 1 『研究余録——富本一枝の人間像』  
第一編 富本一枝という生き方——性的少数者としての悲痛を宿す  
索引

ワ行

渡邊澄子 97, 99

『青鞥の女・尾竹紅吉伝』 97, 99